

す。刑官感伏敷奏し、由て免るゝを得たり。叔平は事に坐して獄に死す。時に少しも屈せず、汗漫として蠶叢の國に游涉し、霜天清曉藤に搗りて徐歩し、王岷の下、首を矯めて遐に空に嵌する蓬委西嶺の雪光を囑み、函谷關西放逐僧の歌を高誦して意氣昂然、遠く雲棧崖梯を攀ちて絶壑を度る。

函谷關西放逐僧、黃皮瘦裏骨稜巒、有時宴坐幽岩石、只欠空生作友朋、
函谷關西放逐僧、是何頑惡得人憎、髑髏及下逃腥血、脚債曾煩驛吏徵、
函谷關西放逐僧、慣騎鐵馬走冰稜、曇花落二千年後、又見黃河一度澄、
函谷關西放逐僧、同行唯有一枝藤、終南翠色連嵩華、慶快平生此一登、
函谷關西放逐僧、生涯善以拙爲能、千鈎弩發離邊雀、驚落搏風化海鵬、
函谷關西放逐僧、鈍根仍得啞羊稱、瓶空遠餉他方國、識海無風浪有騰、
函谷關西放逐僧、擬將何法當宗乘、三玄三要閑戈甲、半滿偏圓爛葛藤、
函谷關西放逐僧、全機銷燦火中冰、破第風捲荒山頭、百鳥啣花更不會、
函谷關西放逐僧、海山衣鉢取無憑、千生黑業性猶在、百煉黃金色更增、
函谷關西放逐僧、砂非鉢本不勞蒸、長伸兩脚深雲裏、自在烏沉兔又升、
其の纒かに山中の古寺に投ずるや、禪龕に傍ふて松子を拾ふ、靜寂至れり。

平生無夢會行路、綉嶺東邊渭水南、一逕盤空雲背嶮、半崖松子落禪龕 (石甕寺)

元の皇慶二年二月七日にして雪村年二十四、聲名ために天下を動かせしと云ふ。其の獄に在るや、佛光の偈句を分析和韻して別に五偈を演成せり。奇語となす。

乾坤無地卓孤筇、可是藏身處沒蹤、半夜木人騎石馬、鐵圍撞倒百千重、
且喜人空法亦空、大千任是一樊籠、罪忘心滅三禪樂、誰道提婆在獄中、
珍重大元三尺劍、寒霜萬里光焰々、髑髏乾盡眼重開、白壁連城本無玷、
電光影裏斬春風、舜若多神血濺紅、驚得須彌盧倒卓、潛身跳入藕絲中、
百城烟水一枝筇、觸目無非是幻空、童子曾參無厭足、鑊湯爐炭起清風

既に宥されて長安に在ること三年、朝議又之を遠く西蜀に竄逐す。彼遂に函關を出で秦隴を度り、崧華に登望し山川を跋涉し、艱險を犯して苦に辛酸を嘗め、幾度か傲吏暴徒の難に遇ふも、彼悠々として網川雍城に至る。

枝履欲何適、脩然意若存、山回懸棧道、溪轉斷橋村、松老苓收液、玉藏石帶溫、已知幽隱處、聊止扣柴門、 (網川道中)

其の舟を浮べて峽に入るや、舟中手づから小本の南華真經を披き、每紙一覽を経るや之を水中に抛

つ。人怪んで之を問ふ。彼咲つて曰く、記せずして胡をか爲さんと。聞く者をして皆舌を卷かしむ。西川に至るに及んで大官碩儒多く子弟を送りて彼が門に入りて指畫口講を受けしむ。東西万里、故國の地を離れて遙に異域に孤身を投じ、而も深く西蜀の窮地に僻在して悠爾として錦里先生を學ぶ。其の感懷果して何如。後十年にして偶、大赦ありて召還せらる。彼乃ち泰定三年夏再び装を治めて蜀地を離れ、七月嘉州を過ぎ八九巴峽を渡り渝州に下り、澆瀕を經雲安に出で冬月君山に登り、南に遊び年を越えて吳楚に下り、廬山より焦山金山を過ぎて湘江に泛び、玆に友人吉州祐と會し、纔にして更に東西手を別つ詩あり。

半年同飲虎溪水、不談玄妙是甚底、明年此日遙相望、我歸東海君西州

雪村斯の如く遊蹤を天下に印し、又長安に來りて留まること三年、一夜忽ち桑梓の老母夢に入る。乃ち將に歸櫂を理めんとす。古林和尚之を送るの偈中、水宿風凜宜善爲、扶桑夜半金烏飛の句あり。會々文宗即位し詔ありて彼をして京兆翠微寺に董せしめ、寶覺真空の號を賜ふ。於是暫く止まり、杜佑の墅王維の莊に優遊し、叔平の爲めに命して肖像を作りて之を祀る。舊義を忘れざる也。天曆二年我元徳元年遂に商舶に附して東歸す。時に年四十歳、始めて渡航せしより既に二十二歳を經、船閩江を發せんとするや、竺仙之を送るに詩を以てす。掛席同爲海國遊、寸心如水正悠々の句あり。漸くに

して船博多に着くや未だ母の在る所を知らず。先づ相州に赴き由比ヶ濱を經、偶、乗る所の馬蹶て顛ぶ。彼泥淖に墮ち路傍の人家に入り、水を求めて衣を滌ふ。一老嫗内より出で彼を睹て涕泣す。彼其故を問ふ。嫗曰く、我に二子あり。皆出家し一子遠遊して歸らず。今我老いて一面に及ばず。且暮門に倚るのみ。彼之を熟視すれば乃ち母也。是に於て母子邂逅悲喜交々集る。彼母に遺らんために嘗てより一金を藏するあり。飢寒を忍んで敢て自から用ゐざりき。即ち出して母に献ず。因て母と同居誠を竭して奉養し、又年を越えて鎌倉に抵り、福山の玉雲臺に寓し、次いで信州慈雲寺に入り、諏訪湖に臨み富嶽を仰ぎて幽居す。元弘元年徳雲寺の開山となる。明年藤原範秀の請によりて京の西禪に住し、建武元年豊の將山（万壽）を董し、子昂と書東往來す。住まること三載にして解印上京梅尾に嘉遷す。詩あり其志を見るべし。

播州赤松圓心強いて之を山より出でしめ、金華山法雲寺を開く。時に元に於ては江南第一の大觀たる龍翔新建せられ、我國には京の天龍寺新建せられ、兩朝の大利後先相望みしが、金華は其中間に在りて名藍を稱せられ爾後大に盛を極めしと云ふ。義堂が金華雲溪山に酬するの詩中に、梅花世界詩千首、草草池塘草幾春の句あり、以て見るべし。雪村大龍菴を寺左に營み、夜々月に對して昔遊を憶起し、遙に岷峨の空を望む。

九月今宵正十三、清光昭徹照龍菴、蟾蜍應咲唐人癖、只把中秋作話談、

尊氏古先を介して万壽に來らんことを請へども應ぜず、文を作りて之を退く。圓心尊氏のために一日圓を排して懇款情を陳べけるに通身汗下りぬ。出で、人に謂つて曰く「我嘗て百萬軍中に馳突すとも懼るゝ所なし。只今老師の面前片刻跪對するも威稜人に逼りて怯懾此の如し」と。雪村已を獲ずして万壽に莅む。曆應四年なり、後朝命を以て建仁を董し、虎關と會し、談笑相忘れ、唱和の詩あり。貞和二年右手不仁なるを以て左手にて偈を書すに字畫端しからず。憤然として筆を屏上に擲ち墨未だ乾かざるに泊然として龍化す。閱世五十七、僧徒にして支那に入り偉蹟を残せしもの、昔に空海最澄等あり、後に甯然覺阿等ありしも、雪村の行道に至りては、見て最も多趣也雄奇也。予其の人を想ふ毎に神魂の飛越を禁ずる能はず。彼の如きは實に天外の飛雪に似たるか。超然空にあつては觸るゝ所なく、降つて一たび草木に至れば玉花燦然たり。既に清脫にして亦清趣あり、愛すべきかな。

第二節 著述及び詞藻

雪村の詩集を岷峨集と曰ふ。高僧傳には四卷とせるも今存せる史局本にして建仁寺藏本を寫せしものは上下二卷となり、元祿年間の版行にして有緒の編せる行道記亦其中に存し、尾に乾峰の參雪村和尚文あり。原本誤字脱字頗る多く、難讀の處少なからず。雪村雜體十首中既に舊藁今半蠶の語あり。

蓋し其の人物の高尙なる、敢て保存に意を留めざりしなるべし。又之を編せしは相國の天啓にして、元祿の頃に成りしと傳ふるを以て見るも殘缺多きは其の處たり。此事本書南禪英中玄賢の序文を以て知るべし。雪村の詩未だ精練細微の工夫に至らず。大約太白東坡を規撫して力足らず。故に鏗鏘の雅音に乏し。若し之に加ふるに一段の精力を以てせしならんには、別に一新機軸を出せしや必せり。意を用ゆること深からざりしや惜むべしとなす。然れども其悠揚蕭散の致、清高杳綿の趣、亦他の攀擠を許さざる者あり。

五古にては雜體十首觀るべし。淵明の風あり。

學道無固必、斲輪亦有術、胸吞萬卷書、未足誇神筆、但止邪於心、萬源終歸一、寄語擔簞人、迷方休自窒、

吾不歡人譽、亦不畏人毀、只緣與世疎、方寸淡如水、一身縲紲餘、三歲長安市、吟哦聊適情、直語何容綺、

九衢暑若蒸、一室寒如冰、手枕榮辱外、篆烟和夢凝、遣懷五字詩、治病三折肱、簡然會心處、松岫碧層々、

其他

我本東南人、常思東南客、奈此良夜何、蕭々城東陌、泛菊露薄々、鳴柯風撼々、微吟君不來、明月轉空白、

(秋夜懷友)

集中に於て壓卷とすべきは、七月下旬嘉州觀水漲三十韻の作なるべし。

嘉州滙三江、濼發浮滂決、千尋底莫窮、万里源而往、澎湃據上游、滄浪逐佳賞、七月暑闌珊、一川氣清明、閶闔轉鈞樞、風雲變忽恍、靈靈股昏朝、天瓢洗穹壤、峩山對空蒙、瓦屋迷茫蒼、龍泓即鳴壘、烏尤僅如象、枯查逐浪來、巨石崩湍槍、奔駭劈箭機、灣澗旋車輞、蛟織綃以潛、鼉盪舟莫上、城郭決沙堤、亭臺漂石礫、林塘滾潢汗、洲渚明澗瀼、昨日映蒹葭、今朝失菰蔣、鳧鷖各散飛、魚龍恣爭攘、任公請收綸、預且安施網、似乘海若肩、可泚馮夷頰、行客且驚惶、嗇夫宜慨慷、斗斛付空々、田禾殊粳々、清哦強自寬、默坐端可想、池井溷有時、蛙黽聒於曩、吠畝圻文龜、靈湫虛聆響、早涼初難期、炎涼或易喪、去病得時名、衛青叛其黨、人情但枯棹、宇宙空俯仰、物理惣輪環、古今幾消長、曲士辨連狂、達人才個儻、渤澥絕端倪、溝澮誠鞅掌、我欲乘此流、明當擊蘭槳、赤岸洞庭東、煙波渺方丈、

前半語句艱澁なるも、後半に至りて雄渾爽朗、特に結語に長ずるは彼に於て常に見る所なり。七古にては先づ本書に因縁ある岷山歌より觀ん。

岷山歌

岷山岌々天尺咫、岷水湯々濤万里、險隘攢聳鏤鄧鋒、烟塵隔斷咸陽市、寒暄異候自仙都、冰雪嵌空從太始、崖前鹵井湛星芒、谷底甘水流石髓、琪玕錯落雜硤砢、芝草芬芳生蘭芷、鸞鷲飛鳴蟠赤龍、麒麟蹂躪伏青兕、形勝自可暫游觀、幽奇未許窮躋攀、橋梁架壑虹蜺背、城郭麗錦烟霞間、安憶蠶叢未開國、水豈不水山不山、汪洋磅礴但元氣、天府雄深神物慳、五丁力開戰爭路、八陣圖啓兵機關、七竅謀報渾沌氏、三分割據蝸觸蠻、誰向南柯夢炊粟、思齊北斗堆金玉、今朝荒塚盡蒿萊、昔日蒼生憂杼軸、明月隨人墮遠汀、暮雲牽恨平秋麓、苔封石鏡照無光、草沒琴臺絃莫續、曠古長壙集許流、高風獨振箕穎曲、岷山岌々水湯々、胡不早歸駕鴻鶴、

能く東坡の口吻を得て力稍や足らず、而して筆端自から雲烟遶遶を覺ゆ。左の一篇、文字錯誤あるに似たれど、茲に付す、岷山に關すれば也。

送開先腰知客遊峨眉

我儂遊山被山苦、欲住不住心未主、上人遊山得山娛、欲行便行休躊躇、乾坤濶、日月幹、蜀江急、峨山岌、峨山峩哉、界天壁立千萬丈、大鵬側翅飛不上、塵埃野馬何蒼々、呼吸風霆俯星象、釘饌群峯如核盤、雪岷銀色水闌珊、五月行人凍如蟻、坡仙此語令人一詠心先寒、雲棧崖梯聯復絕、沙

羅花綻天香泄、輪光五彩湛浮嵐、夜壑神灯自明滅、象王屢回旋、仙聖多游歇、我儂昔被耳根瞞、親往曾添眼中屑、至今安憶發嗟吁、着甚來由空挈々、上人猛利以楔出、枯藤末離瀑岩前、千里萬里一條鐵、賊來須打客來看、坐斷大方々始瞥、

上祝融峯

蚤年心許衡霍遊、披圖安認〇〇〇、插天霽色融峯秋、造化小兒甚戲劇、末跡不科失中州、恒兮岱兮亦曾躄、嵩兮華兮皆經眸、白雲無主誰羈留、迹來得路霄征去、枯藤替我湘江舟、岸水嶺雪三百里、絕頂豁落青雲收、恍然跨鵬翼、不爾戴鰲頭、上接蔚藍、下盤坤軸、東凌陽谷、西俯崑丘、茫茫身世不復辨、但覺兩耳風颼々、神閑細凝眺、万象入彫鏤、老柏千年電霜雪、飛泉百道懸琳球、嗚乎咄哉、鴻荒纒判便生積塊、積塊之中茲其尤、礧巖磊何磨日月、古今登陟如蜉蝣、樂事賞心誰可謀、人生憂患何綢繆、安得渣霞茹芝、終老結茅伴猿鶴、坐看七十二峯、報珪受笏天南陬、
缺字ありて完璧を見るべからざるも凡作たらざるを知る。

贈李以正李元夫歸鄉

李以正霜筠雪竹持君抱、綠髮未凋關塞草、李元夫霽月光風爽君神、青衫不浣長安塵、難兄雖弟勇高義、受我不疵同臭味、謫仙才調欠一官、詩酒風流轉豪氣、浪遊萬里天一畝、笑談自可輕王侯、

歸去來兮今不早、斑衣須與萱堂謀、鴻飛冥々何容與、病翅何能共高舉、饒行豈忍歌陽關、碧雲暮斷湘南山、君不見碌々弃林非可惜、會有龍梭起雷澤、他年未老江海濱、思與公等成三客、
此等は李白を學んで到らざる者なり。

送康樂翁還以簡于故友

客從東南來、還向東南去、夜雨對連床、惜別天欲曙、我亦湖海人、相逢誰非故、矧今瀕死餘、分袂寧無慮、秋雲鎖關山、秋月隨杖履、雲月本無情、迎送何太遽、匡峯訪古時、茗上尋幽處、問我有何如、煩君重慰諭、

悠揚流麗些の滯室なし。當時に珍重せられしを知るべし。

和曾奇權遊雁塔韻

先生精思箭中戟、文陣橫滅拂神筆、蚤年志氣張吾軍、叫關獻賦天咫尺、風流耆舊陪調臣、慣醉碧桃華底春、跨風騎鯨千載後、斗南可吏無一人、君何久居冷官舍、爲賦青梨扣清夜、錦囊盛玉西遊秦、掉頭那受人間價、秋水渭水飛黃天、相逢秋屢同翩然、我家吳興幽絕處、松蘿石磴常攀緣、邇來萬里他山川、鶴怨漸已秋鳶肩、乘興作詩發三嘆、揮絃目送征鴻邊、
李以正に贈る者に優れり。

雪山吟留別錦里諸友

我愛雪山雪、堆銀沙万仞之巒嶼、顛倒春風吹不銷、今古高寒太清絕、又愛雪山雲、披絮帽一片之輪困、追隨元氣聚復散、乾坤廓落何邊垠、雲與雪兮殊不惡、雪與雲兮竟何若、上林賦客氣飄飄、姑射山人顏渟渟、雪可尋雲可伴、誰云無語難相款、孔父傾蓋溫伯雪、呂安命駕嵇中散、人間輕薄託輕言、方寸何啻千兵屯、幾回々首雪山々下雲邊村、思君明月愁黃昏、

清秀の作なり。

五律にては、

索莫唐朝寺、昔人今已非、短綃千疊嶂、浮世幾殘暉、塔影搖風際、鐘聲吹翠微、客窓休自恨、華表會仙歸、
(宿鹿苑寺王維舊宅)

湖海堂々陣、非君孰可尋、不談今世事、足見古人心、貝錦囊中句、焦桐指外音、孤山應聽我、招角月邊吟、
(和太虛韻)

高人何所嗜、吟苦與誰同、夜色窓前月、秋聲夢底風、京華歲將晚、湖海道非窮、思想東南興、冥鴻万里空、
(和立秋夕吟)

七律にては、

曾朝玉帝紫宸班、樞轉玄虛道契環、尺宅蒿萊根已剪、寸田梨棗子堪攀、丹青漠々風塵外、蓑笠茫茫宇宙間、一閔長歌產背冷、貝宮明月簾三山、
(無邪真人圖)

巴國霜風曉來嚴、籬邊無酒憶陶潛、白衣知足送不送、黃菊情多拈更拈、逸興東歸雲海外、浩歌西遠雷山尖、明年兄弟登高樂、水石蕭々竹半欄、
(重九)

路隔蓬萊二十年、偶尋幽上岳陽船、釣天罷樂鳳已去、定貝闕不扁龍正眠、沙際冰痕枯水石、山中日色澹風烟、湘魂吊到斑々竹、恨滿東南飛鳥邊、
(冬月望君山)

霜落鮫人泪欲銷、月明浮玉冷龍腰、鶴銘鐵畫紀時晉、仙化金丹聞性焦、京口山無連地脉、海門風有漲天潮、人間勝槩不多遠、弱水蓬萊空自遙、
(焦山)

亭臺縹緲薜蘿蟻、咫尺叢宵氣錯摩、靈白舊蟠泉底蟹、篆如新寫沼中蝌、閑吟白石封蒼蘚、絕愛青松蔓綠蘿、斜日斷雲千里目、皚々積雪是蓬婆、
(上長松山)

華門忠孝自名流、判署枚臬宅畔州、謀國不由宮小大、策勳寧與世沉浮、馬蹄印雪千山曉、鵬翼摩空萬里秋、此去政成拜丹詔、會看環珮鳳池頭、
(饒暢府判之淮安)

耿世文章自有宗、鶻膏百鍊淬詞鋒、佐州先試判花手、莅事全無芥蒂胸、江帶青衣秋漲綠、城連白帝晚煙濃、知公政簡多吟興、還許詩僧一笑逢、
(寄王州判)

無情湘水日東流、流到滄波欲盡頭、明月貝宮仙島曲、夕陽喬木故園秋、千年物化空聞鶴、万里詩盟獨有鷗、同是天涯未歸客、連床鄉語慰窮愁、
(和郷反鷗字韵)

處世隨流幾逆流、爲君心迹話從頭、十年樊屨秦山雪、一片閑雲楚岸秋、擒藻休廢人賦鵬、忘機應伴我馴鷗、勞々大壤真堪笑、椰子身中萬斛愁、
(右同)

佳句を摘録せば、

瓶冷吳水月、錫輕秦山雪、不疑心自妙、蘊智貌還愚、窳眠簞六尺、危坐香一爐、冰魂夢月

梅花老、凍眼悲霜柳未眠、吟到峩尖中夜月、夢隨巴激半江濤、寂々岩房同月夜、看々烟艇別

山溪、水落沙痕鮫洄溢、煙開松馭鶴飛還、金地風清開講堂、霜天月皎照禪堂

絶句

一峽寒江界尺天、玉繩低水耿人眠、十分清賞今宵月、不在米樓碧戶邊、
(中秋舟船清水溪)

鷄頭關上逢今日、正是村僧入蜀初、出蜀又當渝州別、仙山相會更何如、
(閩岩總兵)

朔風吹雨洒淅城、遲我嵩山二日程、一種閑懷無着處、夕陽微向柳梢明、
(口號)

二月江南花下迷、淺紅深紫鷓胡啼、浮雲往事今如許、勞落風塵万里西、
(和杜郷史)

千疊峯巒紫翠堆、雲烟冥合與晴開、虛庭不掃松花落、襲々香風天外來、
(同右)

絶句中、偶語若くは偶語に類する者にて佳なるもの多し。

摩訶衍法離四句、千載優曇瑞百花、不向龍淵釣頰尾、別江煙雨一絲斜、
(次韵石橋)

見說天台滑石橋、東隣蓬島望非遙、飛車禽有乘風日、直上丹崖倚沈寥、
(同右)

道人心性絶迂疎、不學彫虫巧媚時、興發天心穿月脅、盡收星斗入新詩、
(同右)

囑君早去開虛室、容我閑來寄短椽、一關紫芝千嶂曉、落花流水任茫然、
(同右)

鶴樹金棺示涅槃、西天東土幾遭瞞、阿師隨例生顛倒、滄海珠沉片月寒、
(同右)

區々壯志漫題橋、虎豹九關天路遙、爭似少林無孔笛、一聲吹徹翠雲寥、
(同右)

道人心與道修始、道絶方偶豈有邊、行到水窮山盡地、坐看雲靜月明天、
(無息)

曹溪末後不傳衣、祖位誰當弟七機、永劫沉淪求解脫、金鷄夜半貼天飛、
(讓和尚)

三脚蝦蟇飛上天、嶮崖拶透幾重巖、有誰攀仰不及處、看破清光未發先、
(月崑)

莫笑區々陌上塵、百年誰假復誰真、今朝借路邯鄲客、不是黃梁夢裏人、
(過邯鄲)

氷侵石竈泉聲澁、風颭筠窓月影搖、竈墮灰寒門戶冷、老僧定起篆初消、
(宿法王)

道出形骸名豈徇、職親耳目法當嚴、寂寥候館無人待、明月滿窓風滿簾、
(和杜御史)

詩風田熟可忘憂、何似仙人玉斧修、遙想推敲明月下、雪山西畔暫停驢、
(同右)

右偈類瑰奇なるあり、脱落なるあり。其瑰奇なるも李長吉の如き虚構無義のものにあらず。脱落なるものも東坡の任口吐出の者と異なれり。而して他僧の如く偏に佛臭に陥らずして全く之を詩化して出せり。これ佛教詩人として観るべき所にあらざるか。彼が語録の如きも亦各篇皆詩なるを見る。今語録中より左の一文を抄出せん。

豁開正眼輝天地、南北東西一點收、只這一點、在凡同凡、如石含玉、在聖同聖、似地擎山、理事圓融、性相平等、隱顯自在、去住無方、所以道昭々於心目之間相不可觀、晃晃於色塵之内、真不可求、直得煖理天上陰陽、洗光域中日月、輔萬機於造化、和一氣於天倫、至矣哉、妙不可得而言者也、到這裏持國增長、逞威神、劍戟霜寒兮、明珠燦爛、廣目多聞、現通力、箋毫春動兮、寶塔巍巍、許多異獸既傾心、無量非人能捧足、縱使雕金鑲玉、未免合水和泥、雖然不離初禪帝釋宮、且教儼立三世如來殿、正當恁麼時、現天大將軍身、爲誰說法利生還見麼、掀翻海嶽尋知己、撥亂乾坤致太平、（四天王慶讚）

第三章 別源

第一節 傳記

南北朝時代の詩壇に雪村中岩の間に在りて別に一旗幟を樹つるものを別源と爲す。

別源名は圓旨、自ら縦性と號す。越前の平氏なり。母嗣なきによりて藥師佛の像に縞り明珠を吞むと夢みて孕むことあり。已に韶歳にして父に郡の帆山寺に隨ひて觀音の像を瞻禮して大いに喜ぶ。又寺僧を見て忻然として舊識の如く、歸りて出家を求む。父母其志に隨ひ佛種寺の竹庵和尚に依りて童行と爲り、十六にして鬚具す。一日竹庵謂つて曰く「汝が氣宇を觀るに久しく村院に滯るべからず。頃ろ東明和尚元國より來りて盛に洞宗を以て東關に唱ふと聞く。亟に往いて之を拜せよ」と。源命を受けて行く。時に明圓覺に主たり。一面して參堂を許され、執持すること十二載、純一に參詳して師資契投す。元應二年船に附して元に入り、一時の英納古林・雲外・中峰・無見・靈石・古智・竺田・南楚・龍巖・般若等に謁す。機に當りて讓らず、咸之を器稱す。嘗て鳳臺の古林の會中に在りて掌藏乗拂に一衆目を屬く。同學天岸の明極及竺仙と東歸するや源の岸に寄するの詩あり。

寄天岸首座

只隔西山一片雲。多時消息絕知聞。如今忻有下山客。幅紙書呈別後文。

蘿薛情懷誰所同。門前日々獨看松。孤雲蹤跡我相似。只恨不從東野龍。

同爲地角天涯客。何事君行我獨留。山上有雲遮不得。一秋頻夢出林丘。

其翌年即元の至順庚午我が元を以て回りて圓覺の後版に任じ、建長の前版に轉ず。中岩は更に遅れ

て正慶元年に歸朝するや博多より源に詩を寄せて曰く、
江湖憶昔共萍蹤。各自漂流歸海東。彼此情含無限事。都盧只在不言中。

歸郷中留博多寄別源二首

白雲堂上白頭師。堂下諸郎誰白眉。兄弟團欒相語處。莫忘關口四方兒。 同右
又兩人集中唱和の作多し。今若干首を録す。別源先づ漫成あり。

漫成 五首

院落蕭々秋雨中。開窓盡日望前峯。向來天地一隻眼。掛在岩頭千尺松。
乾坤逆旅寄行蹤。今日西兮明日東。若向金山來訪我。鐘樓北畔板籬中。
呦々山鹿叫羣鳴。夜靜秋堂月正明。記得飛來峰下住。冷泉亭上聽猿聲。
世上紛々幾變遷。靜中風景尚依然。天恩只在林間久。未奪閑窓一枕眠。
窗外芭蕉薔葉大。雞冠階上筆頭紅。休言種子天生異。風土此方知不同。
中岩之に和す。

和別源韻 五首

寒雲忽起洞門中。落日將春烟外峰。城郭與人共非是。千年鶴宿寺前松。

夢覺樓頭四鼓鳴。斜々殘月半窻明。袿衾如鐵不堪擁。忍聽山風卷葉聲。
日月蹉跎時屢遷。幾回嗟嘆思悠然。何如放下諸緣了。獨向雲林深處眠。
著麻衣破那堪補。燒葉灰寒難再紅。寂寞謾將古人比。却慚道業不相同。
窮途不見憐鹽馬。俗眼祇應愛畫龍。拊石今難臻百獸。且隨兒輩賦雕蟲。
別源偶作二律あり。

偶作

知時不失性何迷。莫把羽毛分鳳雞。日月環中無始末。乾坤世上有高低。一心寧異隨情別。萬物雖殊歸理齊。誰怪步趨同不得。前程各自有東西。
永宵潛思世昇沈。同到黃泉不可尋。指鹿威權真可笑。屠龍功業枉勞心。暗中閉眼看天地。夢裏聚頭話古今。山月臨窓秋寂々。寒蛩唧々砌邊吟。
中岩の和に曰く、

和答別源二首

心以形勞何太迷。錦毛照水眩山雞。新題詩見篇々妙。久廢恭應著々低。天也丘軻無遇魯。時哉管晏有功齊。想君寒榻永宵坐。憶我同舟過湖西。

窓間吐月夜沈々。壁角光生藤一尋。窮達與時俱有命。行藏於世總無心。夢中誰謂彼非此。覺後方知古不今。自笑未能除僻病。逸然乘興發高吟。竺仙亦之に和して曰ふ。

次韻別源首座

常教惺々莫使迷。貧天寧學無醜雞。直饒作佛無須羨。何況爲人已自低。着句但愁驚鬼泣。出頭願焉天齊。有時獨宿千峯頂。夢遶崑崙萬國西。大道如天謾陸沈。笑將分寸枝千尋。虎頭燕領未足齒。虫臂鼠肝奚掛心。萬古乾坤渾似舊。一期人事任如今。西風陣々吹黃葉。拾得瑤花喜自吟。竺仙又別に別源を訪ふて作あり。

訪別源

一年不到此。快我今日來。見說縱性窩。不爲佗人開。長松老翠葉。石壁堆蒼苔。幽窓面林隙。幾見白日頽。有時發妙語。肆意無敲推。不覺爲撫几。四座驚奔雷。

康永の初め越州に還る。朝倉金吾弘祥寺を開き延いて第一世となす。又善應吉祥二寺の開山第一世となる。文和三年東陵和尚南禪に住し、書を封して邀招す。源乃ち偈を作りて善應の可休亭に題して曰

孤松三尺竹三竿。招我時々來倚欄。細雨隨風斜入座。輕煙籠日薄遮山。沙田千畝牛馬瘦。野水一溪鷗鷺閑。自笑可休休未得。浮雲出岫幾時還。

義堂京より遙に之に和して曰く、

和別源師韻寄題越州可休亭

暫向豁邊把釣竿。興來吟倚野亭闌。可休畢竟休何日。不出終須出此山。天上好風催鴛急。水中明月對水間。後三十歲成追憶。烟際斜陽一鳥還。

可休亭畔歸休日。吟未曾休興未闌。詩髮鏘殘吳地雪。瘦容寫出越鄉山。隰州夢斷長庚曉。古洞春深暮景間。喜見諸郎相次起。光生畫錦幾回還。

龍山に抵るに及んで分座說法す。延文二年釣旨を承けて洛の真如を匡す。翌年脚疾を患ひ印を解きて越に歸る。貞治三年大將軍義詮荐に建仁を以て請す。源已むことを得ず、疾を力めて之に應ず。中岩疏を作りて之を賀す。

別源住建仁諸山疏

峻整舉似。有句無句。句々超宗。邁騰提拈。築著隘著。著々出格。嗟繇方今人心淡薄。馴致乃往

佛道陵夷。苟能一旦振綱。便見四方取則。人行解相應。見聞極淵。壯歲遊方江南。驗過數員善知識。比年歸隱越北。旺化一國都會人。綿密工夫。龍梭細吐冰縷。痛快作略。鐵撥高彈鷓絃。截鐵斬釘去粘解縛。意刻句句刻意。意句交馳。偏中正正中偏。偏正回互。檀信重九鼎。隣封望分光。急著一鞭。勿駐四馬。

其の九月九日源上堂の語に曰く、

籬邊不見白衣客。爭得淵明興味濃。今日黃花應笑我。白頭扶病上東山。

十一日晚參罷んで病革まり鼓を鳴して衆に辭す。諸宿室に詣りて疾を問ふに源應接常の如し。國醫診視して謂ふ「必ず明日を待たざるべし」と。源笑つて曰く「吾精神未だ耗へず。尙三十一日を待つべし」と。翌月朔日大將軍源の道義を重んじ弘祥を陞して位を諸山に列せしむ。初八日諸弟子建仁の東偏に就いて塔基を築き庵を構へて洞春と曰ひ、輿して塔所に至る。源環視して曰く「此地千光禪師入定の處に鄰る、老僧此に歸す、亦幸ならずや」と。中巖を招きて曰く「後事老兄を煩はさんのみ」と。十日の三鼓に至りて衣を更へ榻を書して坐化す。閱世七十有二、師變贊して曰く、別源和尚。觀光元國。逢一時龍象。往覆宗義。悟解無翳。而才章有餘。其離文字性也。顯述作中矣。」と。源の中岩と特に親交ありしこと、其の和因「甚戲與中岩談。中論生死地獄有無之事」と題せる長篇の詩中に、

中岩文物仲靈後。斷絃又見鷲膠續。欲掄大厦崇宇梁。郢斤須采之良木。縱性野客一芥軀。何幸與君忝下屬。朝談暮論同襟期。卓犖情思忘禍福。有日不見心常思。一會萬事皆知足。

の語あるを以て知るべし。別源死後中岩又之が爲めに洞春庵別源禪師定光塔銘を作る。文は載せて東海一漚集別集にあり。

第二節 著述及び詞藻

本朝高僧傳本傳に云ふ。源頌偈甚多。以作者鳴。有南遊東歸二集。天童雲外軸、南禪清拙澄、竺仙仙及東明著語稱讚。今傳于叢林。と。二書今五山文學全集第一輯に收めらる。史料編纂掛にある内閣本の東歸集は寛文甲辰の刊行に係る。竺仙の序文に云く、別源首座。自昔同見鳳臺老人。而後我東歸。其所得之深。過我奚啻百倍而已。於彼於此。所吐妙語。猶鳳鳴也。可以則之。爲律爲呂。爲後學者法。彼之作。自號南游集。於此作者。餘則目曰東歸集也。當今大法東漸。日大於東。而又豈止是作而已也。却當見翔於千仞。萬囀和諧。使彼昆虫草木。悉作鳳鳴而後已。と。清拙の跋語は曰く、詩有奪胎換骨法。人亦有奪胎換骨法。用古人意。不用其句。用古人句。不用其意。此詩奪換也。日本旨藏主。入保寧休居之室。復遊歷諸老之門。歸來觀其著述。概有大唐音調。語意活脫。如珠走盤。豈非能奪換我大唐胎骨者耶。抑得休居翁九轉還丹。乃若是耶。と。語意活脫灑然として駿爽なる所、實に源

の詩の長所なり。越北の詩僧源と略ぼ時を同じうして雪村あり、後代に良寛あり、推して以て三大名手となすべきなり。

雲外評語の中に、詩與境合。見詩即見境。境與詩合。見境即見詩。苟不然則詩境兩失。日東旨禪者。作天童十詠。句意不凡。書此以實其說。と。南游集中に和雲外和尚天童十境韻の十首あり。今左の二篇を録す。

十二欄干凝碧寒。青山綠水四連環。簷頭滴々零松露。孤鶴飛從天外還。

翠鏤亭

機自忘時心自閑。夢飛江海立欄干。向明月裏藏身去。莫與雪花同色看。

宿鷺亭

此外南游集中最佳の諸篇若干を選録すること下の如し。

相逢相別意何説。同入華胥一夢中。落葉蕭々山雨靜。浙江潮漲五更風。

別友人(之二)

家在扶桑滄海濱。扁舟不載未歸身。爭教江畔東流水。爲我傳言寄故人。

和江上晚望(之三)

欲跨長鯨遊汗漫。先登句曲第三山。下方人世紅塵遠。上界仙宮碧落寬。黃髮靈童尋樂去。丹毛老

鶴伴雲還。苒苒應在九霄外。香縷烟騰天市壇。

小菖峰

相別于今書問稀。長空幾度雁南飛。蹉跎日月如梭轉。俯仰乾坤何所依。潮打石城機未息。秋深香

徑夢頻歸。興來獨向層臺立。疊々吳山斜日微。

寄靈岩南堂侍者

歲暮天寒客路長。同人仰我碧雲房。溫然一笑春風面。融盡十年冰雪腸。逆順任緣真有道。去留隨處本無方。君看妙喜衝梅後。振起宗風已墜綱。

丙寅冬過石霜會此山侍者

相別東西天一。業風吹轉路茫茫。清湘影落脩江月。孤館寒來半夜霜。但得情懷無楚越。何妨兄弟似參商。大千齊在乾城裏。寶鏡光中萬象彰。

湖南途中寄雲岩月侍者

要了克賓未了因。逢場法戰振威神。金槌打落天邊月。桃夢移來洞裏春。物々全明西祖意。塵々現

出法王身。溪聲山色坡仙句。一度吟來一度新。

和潛維那韻時在東林

浮圖千尺插銀漢。高踏天梯向上臨。一鳥飛邊斜日薄。老僧歸處白雲深。烟兼樹影連千嶂。風送鐘

聲出二林。晉代英雄夢何去。廬峯翠色古猶今。

和白雲書記登西林塔韻

三年聚首鳳凰臺。冰雪相看百念灰。天岸風高秋已老。海門潮落夢初回。六朝城裏對明月。十里湖

邊看早梅。我又行蹤無定度。雲山何處待君來。

送僧回浙兼簡天岸首座字海藏主

故國山河幾度更。英雄埋骨不埋名。楚雲兼雨連鐘阜。淮水接潮回石城。世路區々迷蝶夢。江湖渺

々冷鷗盟。白頭僧在興亡外。一卷楞嚴證道情。

和遊石頭城韻

十年倦客占幽栖。紫陌紅塵消息稀。百念泯來忘至理。萬機休能絕離微。石邊移榻伴雲坐。岩下擔

泉帶月歸。欲了殘經敲石磬。林禽驚起入天飛。

和草庵首座山居(八首之一)

人我雙空肝膽傾。山禽野鹿亦忘情。雲歸岩戶床長濕。月上茆簷窓漸明。石鼎煎茶清味好。瓦爐焚

同右

栢紫烟輕。客來莫問西來意。庵主慈癡懶作聲。野鶴孤雲蹤不定。世間何處寄幽懷。列章林木岩前立。數筆峯巒天際排。湛々禪心清似水。稜々老

同右

骨瘦如柴。功名千古誰長保。百歲光陰自有涯。烟水百城途路長。自家庵內見心王。千尋飛瀑落前湖。一帶白雲遮下方。林葉秋深埋石徑。桂花月

同右

皎照岩房。悠悠世事多榮辱。獨愛青松耐雪霜。萬里秋風涼。銀河橫天長。星斗爭頭出。榮爛錯光芒。吾聞天帝女。嫁與牽牛郎。郎在河西女河

東。七月七夜每相逢。雲母帳中珊瑚枕。欲盡肝膽意重々。義和御日九關啓。神官催裝駕玉龍。烏鵲橋邊淚如雨。愁雲慘霧鬱心曾。月眉不掃鬢懶梳。身心勞倦機杼中。含情相望來秋約。夜々孤眠白玉宮。此說我聞不肯取。天人豈可痴孩同。日月循環無窮理。斗杓運轉造化功。焉得去從乘槎客。親問雙星上層空。 七夕戲筆

同人昨自海東來。百煉黃金色不回。一見笑顏春風暖。十年懷抱是時開。雙眼炯々如點漆。容儀堂々有古質。如我百拙真可羞。出語荒唐無音律。謾道同父白雲翁。不知金針手頭密。撥轉路頭重重逢。三九誰言二十七。萬里家鄉歸未歸。五湖煙雨一蓑笠。百補筒穿手臂露。布鞋無底脚指出。蒼

山店中聽雪聲。曾郎枕上夢方驚。起來日午打三更。兄弟元是阿娘生。

和曹川道中冬夜詩韻會不聞侍者

東歸集中にては、

時移世異有青山。人自忙兮山自閑。唯有山僧知此意。秋風古寺掩禪關。

和偶作韻(三首)

此宵無月莫登樓。無月登樓易得愁。且待青冥雲霧盡。清光應有到床頭。

仲秋無月兼謝友人見招

已無閒事到心頭。今日逢君話舊遊。吳越江山忘未得。孤舟短棹過長洲。

和古心聖侍者五偈(五首)

佳句新詩意味長。白雲中見碧雲房。調高今古無人和。山鳥助吟來短牆。

和白雲庵偶作韻酬中岩

靜向庭除著意長。尺松拳石亦非常。神遊不假馭風術。心到何求縮地方。佳句新題經品藻。閑花小草吐幽芳。人間六月多炎熱。爭得山中半日涼。

和庭中擬山中岩題詩韻(有序云。庵居無故。適於意。前障地。聚石積土。擬疊巖。)

我將天地作蓬廬。聚散寧分親與疎。千里東西雖異路。一心朝暮似同居。滔々流水歸滄海。淡々孤

雲行太虛。靜坐窩中春晝永。迢々相送到皇都。送光禪人之京師

人生天定在身前。窮達昇沈豈遇然。指上數過多日月。心中遊遍舊山川。秋風白髮三千丈。夜雨青燈五十年。靠壁尋思今古事。一聲新雁度涼天。夜座

共處窩中寂寞濱。嘗過萬苦與千辛。淡交寧爲名名走。同志只於道義親。北越秋雲迷去鴈。東關曉月照行人。因君千里動鄉念。古寺閑房臥病身。送偉上人歸越

聞兄昨日江南來。珣弟今朝江南去。故人又是江南多。況我曾在江南住。江南一別已三年。相憶江南在寐寤。十里湖邊蘇公堤。翠柳青烟雜細雨。高峰南北法王家。朱樓白塔出雲霧。雪屋銀山錢塘潮。百萬人家回首顧。南音北語驚歎奇。吳越帆飛西興渡。我欲重遊是何年。送人只得空追慕。

送僧之江南

吾聞海上有神山。弱水三萬空瀾漫。不有馭風軒雲術。何緣能到縹緲間。又聞陸行有崑崙。鶴駕羽衣常盤柏。不知此去幾万路。騎無驥驢步亦艱。半盞水涵一峯石。孤峯絕岸屹巖岫。九江拖綫五老瘦。三峽潑灑巴水灣。天工幾日揮雷斧。影鏤荆山碧玉團。對石堪謝人修供。埋盆莫笑童痴頑。我將天地歸方寸。海之一漚山毫端。卽相見之有鉅細。返性見時沒兩般。百億須彌不爲大。一芥子中何太寬。毛孔塵刹行不盡。掌上日月長自閑。道人靜坐禪榻上。無限山川往且還。芒鞋竹杖舊遊

地。江南山水爛漫觀。浮三萬六千頃湖。攀七十二峰烟巒。歌包招舟西津渡。金鷲負山出中湍。又訪苒苒登勾曲。回首六朝之帝寰。東到若耶仰秦望。峭崖孤絕不可攀。赤城霞霽天姥出。鴈宕削玉華頂寒。上有百衲老頭陀。道貌枯淡若懶殘。石橋亭下投一宿。尊者托鉢阻面顏。崖瀑響空毛骨冷。飛樓湧殿事誕謾。天風吹我過滄海。黃梁半熟香可飡。無邊境界從何起。盆水清冷石爛斑。

盆 石二十四韵

名壓羣花顏色稀。梅慙太瘦海棠肥。淡紅微上玉人頰。潔白粧成羽客衣。遙認雪殘猶未盡。近看雲簇不曾飛。預愁夜雨洗拏去。又怕春風吹得歸。遊賞紛々傾全國。訪尋剝々扣幽扉。當時若使吳王見。西施應須出禁闈。題櫻花

若し其の稍や偶語を混じて奇逸なるものには、

尋花空裏走天涯。盛水籃中歸到家。床上翻身開兩眼。一庭霜月照窓紗。窩中雜言(十首)

詩無題目寒山子。樹葉崖根佳句多。開得好懷爲何事。相逢拾得笑呵々。同右

夢破江湖座夜堂。空階點々雨聲長。郎當屋舍多成漏。一滴分明一斷腸。同右

閑一閑中尙未閑。苦吟搜句坐窓間。詩成吟罷閑還至。閑至無詩遣與難。和閑一閑言(十首)

無窮理自靜中通。世路雖窮道不窮。彼我相忘形質外。顛言倒語戲兒童。同右

學道先須得自由。恰如江上一虛舟。雖然逐浪隨波去。得可休時便可休。

追步龍牙和尚偈

世上若無名利客。道人安得見孤標。經行座臥青山頂。一嘯披雲倚沈寥。

和不聞足矣軒偶作

紛々萬事眼前過。歷盡人間日月多。貪看閑庭落花後。又和烟雨上層蘿。

撥草參玄只圖見性即今上人性在什麼處

南遊東歸二十年。不曾參得祖師禪。空成口業知多少。楚水吳山滄海烟。

自題

天地風高霜氣清。青山秀色向秋橫。閑雲觸石淡中影。空巖生松靜裏聲。動赴萬機寧借力。湛存一

色不留情。金鷄啼破玉人夢。仰看長庚配曉明。

上白雲和尚

春入京城花草暖。忽催歸興絆行藤。堪爲方外不羈客。正是人間無住僧。孤霧斷雲三事僧。殘山剩

水一枝藤。恩波愛浪未全盡。難使情懷冷似冰。

又左的一篇の如きは最も當時社會狀態と學徒の境遇とを想察せしむるに足るものなり。

用孚首座歲暮韻見重和

寒風刮肉三冬暮。四邊干戈尙未駐。豺狼梗路行人稀。鰥寡寒餓誰問顧。羽檄四來點行頻。民役兵
伍悲長吁。踏虎尾兮涉春水。億兆叩天嗷々顛。傷時掩面象尼袂。哀世登樓仲宣賦。未知造物何如

哉。踏踏危途如蛙步。騰飛在念籠內鳥。躑躅堪憐置中兔。臥龍不起伏波死。廊廟今日思擇措。軒
中道人物外情。一片禪心生鐵鑄。穆々容儀見範模。典刑後昆以垂裕。鉅文瑰章獨步才。大論高談
出情度。我生辱交蓬賴麻。一世佳遇夙有懷。神交不是形骸交。譽不欣兮訕不怒。心忘道術言忘
諱。砥礪頑鈍諄々諭。回首四十一年非。自羞已往之訛誤。神矣黜哉汗漫遊。不向世間風濤湖。朗
嘯一聲雲天開。斗宿燦爛近可數。我之所樂人不樂。人之所樂我哀訴。太古寥寥正音稀。不聽奏韶
又奏護。高山流水君彈罷。疊壁連珠又唾吐。
是れ當に中岩の諸作と俱に當時の詩史として傳ふべきなり。

第四章 夢 巖

第一節 傳記

夢巖名は祖應、雲州の人、幼より英發、東福に潛溪に謁し、後歸郷門を鎖して出でざること二十年、
遂に東福に出づ。博覽雄辯にして善く文を屬し中岩と名を齊ふす。又時名を負ふ者大岳東漸大愚岐陽
惟肖の輩皆曾て其の門に遊ぶ。應安七年寂す。大智圓應禪師と謚せらる。著述に早霖集あり。續群書
類從之を收む。三卷より成り偈疏詩文を含む。

第二節 學 術

夢巖最も孟子に精通して之を其徒に授けしこと、日工集其他諸書に由りて稱せらるゝ所也。果せる哉、虎關の替腹殺人論を出して孟子を難するに及んで、彼極力之を辯じて虎關を駁したり。其文下に戴するが如し。蓋し聖人は道義の理想中に行動するを以て、形迹を以て論ずべからず。且つ舜の父を負うて逃るゝ如きは他の隱者の介行と異なりとし、又本章を以て最も能く聖人用心之極致を説き傳へて親切著明なる者となせり。亦一見識なしとせず。今夢巖の學脈を見るに全く程朱の學に由れるもの也。其の送通知侍者歸郷詩軸序を以て見るも亦明也。其の夫人之稟氣有清濁と云ひ、義理之辨之在人也、猶如三光五岳在天地之間、不可掩藏、奴隸亦仰其高明、何處更有難見難知之事乎、而私智一搖於中、則天下公共之理本罔焉于外、自爾以降、動靜云爲、以私自蔽、肆欲妄行、閣良遂竄、若此爲觀望人之仰已、不亦左乎、免鯨面鞭背也亦幸矣と云ひ、又天理復往のことを説けるが如き即ち然り。彼又佛者の惑を解きて左の言あり。其の思想の傾向を窺ふに足らん。

烏摩松茂而栢悅、芝焚而蕙歎、鳥獸之喪群匹、回翔焉、鳴號焉、蹢躅焉、而夫人也不知愛其類、又朝死而夕忘、鳥獸草木之不若者或有焉、則群居必亂、於是乎有聖人者、出率其固有之情性、以覺斯民、此世俗名教之所以起也、惟吾佛祖之道稍異乎此也、以其情想合離列墜所繇、先把世間一切

憎愛恩義一時屏除、無欲無依、馴致乎其極則一死生浪去來、然後動靜施爲、無適而非道矣、豈但如土梗木偶、漠然無所悲喜、而以爲清淨寂滅者也哉 (悼大道和尚頌軸序)

抑も五山に於ける宋學は岐陽によりて大に振興せられたり。而して岐陽の學は實に夢巖に出づ。夢巖は全く宋學に依りし者にして、彼の虎關中岩より義堂等に至るまで程朱の學を窺はざるはなかりしと雖も、敢て之を崇信し若くは憑據するには至らざりし也。

臥雲日件録第五十三冊に曰く、

東福常喜華岳和尚來、茶話之次及夢巖和尚之事、岳曰云々妙喜中岩聞夢巖講蒲室、曰彼不入唐、爭知蒲室近事、因令僧行聽之、歸來以所講告之、然中岩入唐朝所見聞之事夢巖亦能講之

と。亦以て其の學の博きを知るべし。又同所に曰く、

夢巖不要身後留蹤迹、命曲以書籍等、令供本成寺祖塔修造資

と。其の著述等の傳はるもの他に比して少なき所以なるべし。又同所に曰く、

近時尙有聞夢巖講者、曰本成寺内不足容衆、然自門外遠處聞夢巖講者曰、本城寺内不之如左右、此異寺之一也

想ふに質實篤學の人たりしや疑ふべからず。

第三節 文

瞽瞍殺人論

孟軻弟子桃應問孟軻曰、舜爲天子、臯陶爲士、瞽瞍殺人、則如之何、軻曰、執之而已矣、然則舜不禁歟、曰夫舜無得而禁之、夫有所受之也、然則舜如之何、曰、舜視棄天下猶棄敝屣也、竊負而逃、遵海濱而處、終身訴然、樂而忘天下、或者疑曰、法之不可廢也、孝之不可忘也、則固然、使舜遽棄天下、則其奈蒼生何、余應之曰、觀夫軻書七篇、其隨時因人、高下其言而要其歸、只是道性善、而稱堯舜而已矣、其中能說聖人用心之極致、得親切著名者、莫善於焉、請試嘗論之、夫舜起陶漁、得帝堯之讓者、無他、在孝義之著聞也耳、已在帝位、其所守者亦無他、先王之法也耳、由此言之、天下者非得於堯也、蓋得於孝也、所守者非帝位也、蓋守先王之法也、然則堯也舜也、天下也者皆其虛號也、而孝與法也者、是非其實也耶、其實苟存、則惡乎往而非堯舜之天下、若爾、曰棄非棄也、曰忘非忘也、若夫廢先王之法而不行、失孝義之道而知而徒竊其位、號而稱其嗣者、則身先自棄、奚何天下蒼生之恤哉、旨哉孟軻子語聖人之詳也、孔子之後有孟子、先儒之言不誣矣、而今以逃海濱、與夫莊周書所云遺世之士、自放物外、長往而不返者、比焉、則過矣、矧是假借之言也、而非具有此事、學者或於此深察舜之所以自樹立者、則乃知孟軻之言不虛設矣、嗚呼

呼吾徒已稱大聖人之嗣也、其任大也、其責重也、而庸愚如土木者、徒以遁去爲高、以辭爲名者有矣、與夫附麗城社、竊據師位、同類蠃合、以爲吾門昌熾者、則有間而爲舜之罪人則鉤也、因釋惑者之疑而不覺及此

夢岩虎關と其説を異にせしと雖も、虎關の學に於ては甚だ之を推服す。虎關の死するや行狀記を作し、大いに之を稱揚して、自夫大藏東傳六百歳、此方古徳専心功行、不事該博、雖或披覽、僅能涉獵耳若其奥句秘義、眼日照罇毛髮絲粟不遺者、古今惟師一人耳、至若翰墨文章之妙、不學而能焉、則一由夙熏般若之力也、豈區々估畢困而後獲者之比乎の語あり。

送通知侍者歸鄉詩軸序

有豺虎之山有蛟鱷之水、人莫不畏且避焉、鯁蚌之所蟠、豚特之所牧、雖千仞之山、百尋之谿、人易之、以其無可畏之實也、然則山水何擇焉、夫竺之偈也、震之詩也、吾邦之和歌也、其來尙矣、惟人之生而靜者關係其土地風氣之殊、而方言相異、然其寓性情之理矣則一也、夫人之稟氣有清濁、故其言之工拙隨焉、蓋鍾河岳英靈之氣者、而乃能爲純正粹溫、其能爲純正粹溫則無他、只在詣理而已矣、藻繪云乎哉、譬之人事如堂下醜明惡而不醜、發一言而當理、叔向下執手以上、嗟乎非特詞章爲然、於人亦然、傳曰人之所以爲人也非特二足無毛也、以其有義理之辨也、蓋義理之辨之在人

也、猶如三光五岳在天地之間、不可掩藏、奴隸亦仰其高明、何處更有難見難知之事乎、而私智一搖于中、則天下公共之理、本罔焉于外、自爾以降、動靜云爲、以私自蔽、肆欲妄行、開良遂竅、若此爲觀望人之仰已不亦尤乎、免點面鞭背也亦幸矣、古之君子所以大過乎人者、不失所以爲人也已、豈特在文彩煥爛、相鮮語言琅々之間乎、惠峰通知侍者長門人也、才俊氣銳、力學不倦、緇作之間推後生之可畏者、余乍來此、雖未審知其人、而心竊識之、一月連環入夢、鄉土之念與春雲共起、大方名衲、旁搜儒典、工於篇章者若干人、各製唐律一篇、寫繙繙之情、以爲言贈也、哀成一軸、屬余爲序、余展之風簷之下、細讀數過、竊以爲嘲風弄月、黼黻大虛、劄目錄心、作無益、害有益、是以古之高僧、焚棄筆研之不暇也、尙何霸橋驢上之思、而飯顛山頭之瘦耶、指天日誓後期、潛然出涕、黯然銷魂、閱巷兒女事、壯夫不爲也、飴密以甘之、莖萱滌澆以滑之、以至讀詩不忍夢我傷足、不出數月、皆是世間深重恩愛之氣習也、豈真出家端的報親之道乎、此之數者吾門障道因緣也、芟夷溫崇痛斷本根可也、胡爲重培擁而使滋蔓耶、雖然景從表出、流自源來、世焉有無質之影、無源之水乎、天理不可掩者、乃是人情之所不已也、而今爲文爲情爲孝、皆似焉者也、就其似焉者而求其真者、則其迷不遠而復、然則文也情也孝也、寧非所以復之之具乎、由此而觀、則僧而詩、々以贈僧、雖非古人之意、亦是古人之意也、詩中所用五社、三橋、千松、惠日、皆東福景致

也、赤間壇浦地名、石橋以地近羅漢窟稱之、昔者仲哀帝欲親征高麗、不果而崩、安德帝軍敗績、愧死仇家之手、自赴于水、双珠一劍、並皆長門之故事云、

字句妥當を欠く者ありと雖も、多種の材を一篇の中に收むる其排列の用意に至りては精也と云ふべし。

夢岩の疏二十六篇あり。其詩文よりは筆力優れるが如し。絶海之に似たる者多し。序説の如きは岐陽の下にあり。

蘭春谷佐淨智寺江湖疏

豐城埋劍、紫氣久在斗中之間、陶壁栖椽、頽虬忽乘雷雨之勢、此座可惜、正法難聞、某玄徒白眉緇林丹鳳秀句播万口、英氣雄百夫、剛則甄、柔則坏、堪成法器、直爲壯、曲爲老、足張吾軍、祇今出自關西、而爲關東導師、如昔寓止少林乃是双林大士、正々之旗、堂々之陣、佛魔遁逃、琅々其語、莫々其機、人天瞻仰、攪醜翻毒藥、如海一味、令蚊虻修羅各腹果然、

第四節 詩

夢岩義堂等の集中に楚辭の篇あり。大約詩の餘技に出でしに過ぎず。今夢岩の楚辭體四篇、多く屈原に摸倣し全く其の語を取りて填めしものに過ぎざるも、左の二篇の如きは稍や異色の所あるを以て

其例として擧ぐ。

送助侍者歸洛 序あり略す

馳光冉冉兮客意驚秋、葉落歸根兮鳥倦歸休、胡託卑棲兮久此淹留、釣于雀洛兮豈得吞舟、始疑餘語兮彷徨夷猶、終而信也兮悠爾旋轉、陟彼南山兮路阻且脩、躡飛鳥背兮塊視九州、灌木叢生兮于谷之幽、々之石兮與足爲仇、有明日光兮功々周々、夷險甘寥兮忘於同游、嗟々人生兮如木漂浮、偶然相觸兮亦各隨流、不知何處兮夜雨床頭、品坐而話兮今日林丘、

書湘妃圖

湘之水茫茫、湘山蒼々、倚欄々兮幽篁、目眇兮陟方、剩腰褱兮不知繞、九嶷兮柔腸、

古詩諸体を兼ね特に長篇を多しとし、代東奉答大建秀峰二仲之厚貺の一篇を最とす。長篇と云ふを以てすれば中岩にも比すべきあるも、語句多くは澁晦にして取り難し。

祈 穀 庚子歲

祈穀民相聚、蠻榭列堂前、尙有古遺法、伊蒲屏葦簾、山藥幾煮掘、土卵又堆盤、芥葉人頻噉、舊甕壺傾翻、豆腐淮南術、軍糧蕪菁根、飯與嶺雲白、餅與山月圓、座雖設無次、百爲一皆村、還羹而流歡、曲禮成閑篇、幾匝枯柳癭、淋漓老瓦盆、既醉轉嘈雜、秋樹噪晚蟬、或如虹飲渚、或如鯨吸

川、頰目暖睨柱、箕踞仰視椽、狂劇只絕叫、歡極復沈瀾、兒女接餘瀝、箇々手杯圈、巧者衣百結、荷杖引馴猿、飲食人不顧、時々嘸饑涎、俳優無多態、鼓笛徒喧々、伎薄而遇厚、幸乘衆心懽、東隣賸浮圖、欺愚備講員、泚爲旁觀類、負々亦便々、黍麥低昂易、一足翹可難、雖吐非是黃、如何做阿仙、人生不好古、万事失根源、誰於訛替處、斯理子細觀、項年兵戈起、一主已南遷、一主據帝座、芒背又針氈、諸將勳未策、仰見跼々驚、王租納賊稟、武夫溲儒冠、大人方蜺帆、宅在誰與安、空國無君子、稼熟誰與食、若樂唐虞化、此樂在史編、只恨鴟夷腹、更無忠義肝、杜陵布衣老、帝魂拜杜鵑、一杯高槐葉、停筋望露寒、冤禽欲填海、愚公欲移山、雖云不量力、微誠孰可捐、大運吁難識、俗事何足患、笑彼竊服子、醉飽如乞墻、民亦習爲常、恬不省其響、豈斯人獨爾、愧已堯成潛

冗寥の句通誦し難く、加ふるに文字缺損錯誤ありと雖も、前半閑々筆を着けて、記事細密、後半一蹶して時事に入り、沈鬱激楚の氣少陵の遺意を見る。

六 甲 山

昔者神功皇后時、万斯鱗鱗征高麗、不利其土地璽絲、示人四海無外而、天兵壓境陣雲低、一葦帶水限華夷、日駕車出叱六螭、陽候水伯驚披靡、神武不殺畏以威、三韓崩角口嗚啞、云臣世々備藩

維、稚耄相率犒王師、齊呼萬歲捲歸旗、告功于上下神祇、二百万兵人馬疲、鴨綠江上思騎箕、今日之事異唐隋、恩風化雨伴軒義、應神天王透誕彌、至人應運半千期、綿々瓜瓞本於斯、至今蟬聯金玉枝、戰馬歸山不復騎、戰艦閣沙不復檣、特欲鑿戒万古垂、兵器不鑄作耕犁、高山頂上聚瘞之、功德與山共巍々、爲人後者孰不思、文王沒而文在茲、異方尙能寶服台、況是華夢不相輝、大國尙能聽指麾、蠢爾不勞折箠管、此山我師我箴規、聖德碑多溢美辭、此山我輔我元龜、阜慶逝矣不可追、予週嶺下搗枯藜、仰見嶺上白雲飛、六甲山名童子知、六甲山故知者稀、

中秋戲富李白問月

昔人舉酒問諸月、月不能言對以意、譬夫湘纍柳々州、異世同心相顧蟹、太極清氣溢兩間、造化陶鑄作銀盤、銀盤之量隨所見、所見今如秋扇團、晦朔虧盈循環似、理須天地與終始、自有月來億万斯、年運茫茫孰知幾、明鑑不可棲纖埃、何以就中秧桂樹、下土之物風馬牛、勿說爬沙與顧兔、三郎躬踐傳霓裳、上天那有亡國具、不啻此一事失眞、人間訛言誰縷數、因思采石江水照錦袍、狂飲顛吟一世豪、赤壁磯下玉堂笛、吹裂蒼崖千丈壁、又思梁王去後池臺、歲々只有東風來、瘦公登處有高樓、北望中原滿眼愁、說著令人空感慨、丈夫不作兒女態、高山高寺更高閣、最高巖腹湧一塔、西風吹我身、飄然登到上頭排闥闔、去年中秋天漆黑、今年中秋分外明、一點雲生一陣風、金篦刮去眼醫清、万象

歷々白晝如、只群動息是夜歎、恍若天地闢、月始挂碧虛、絕叫猛拊闌干折、塵抱煩襟虛豁々、雪我神水我脾、不知月化爲我身々化月、形骸亦復至乎遺、但此興逸不可遏、目前長江變醞醪、細嚼南山北斗酌、作詩無言聊一吟、林雞拍翅東方白
佳處なきにあらざるも疵瑕多し。

近體にては七律三千五六百あれども、甚だ見るべきものなし。先づ合作と稱すべきものを擧ぐれば、躍馬京華二十秋、誰知蟻穴夢王侯、軒天氣勢棺三寸、蓋世功名土一坏、麾下偏裨皆素服、門前吊客半緇流、寂寥常在光中景、醉舞無人月滿樓、
の一首の如きは奇抜の趣あり。

君子當世兩閑人、逢興莫厭投報頻、薝蔔不香花六出、閻浮無影月孤輪、山城万雉粉牆曉、村落千家麪市春、歲晚天寒誰暖眼、相看耐久有松筠、
(雪中寄友)

不悲合會有際離、白首難期再晤時、亭柳弱枝絲嬾々、驛梅蒼子玉累々、已無陸詒澆胥次、強使酪奴醒瞎眊、飯石山中金粟寺、偶因君去告吾飢、
(送僧適金粟)

絶句數少し。亦た甚だ誦すべきものなし。

數行洞墨一封信、寫了無鴻西北飛、欲使爺孃誠存沒、爺孃存沒又難知、
(高麗人十首の中)

忽被村翁喚得回、曲枝桑下酌三林、醉鄉廣大人間小、日本高麗安在哉、
西湖處士林君復、慶曆郎官梅聖俞、觀物思人々是物、氷魂雪魄不勞呼、
避得網羅惟隱眠、四圍野水碧於水、官人騎馬江頭路、著眼何曾到汝邊、
開元國色駐濃粧、松柏從茲棄道傍、尤物移人花尙爾、五陵公子醉如狂、
(同右)
(梅下)
(鷗)
(牡丹)

第五章 中 巖

第一節 傳 記

中巖名は圓月、相州鎌倉の人、姓は平、土屋の族にして桓武帝の遠孫也。幼より容發、年八歳に及び壽福に入り、僧童と爲り、十二道慧に従ひ、孝經論語を讀み、且つ時の數學者に就いて九章算法を學ぶ。後中正子を著はし、治曆篇を修めし者蓋し此に得たるものか。夙に密教を學びしに、雲屋東明に謁してより心を禪に寄す。十九歳渡海せんとして博多に赴きしも、綱司の上舶を許さるによりて果さず。歸りて虎關に濟北庵に謁す。時に虎關釋書を撰し、關を掩ふて客を謝す。獨り不聞と中巖と參叡を許されしのみ。彼五家符命を作り虎關に稱せらる。正中元年二十五と成り、再び渡海せんと思し、兵亂のために船出です。翌年遂に江南に到る。其の冬雪竇に寓し、其より天下の巨利碩納を尋

ね、嘉興・天寧・靈岩・保寧・洪洲・雲岩・吳門・道場・淨慈・淺塘皆其の足跡を遺さるはなく、所在遊學の徒古林龍山東陵雪村等と合離す。偶々其友不聞天朝の嫌疑に觸れ難に罹るを救はんがため武昌に至り、遂に百丈に登りて東陽に參し密を受く。我邦百丈の系統は實に中岩によりて始めてつがれしものにして、亦彼が後日他の擠排を蒙りて不遇に陥るに至りし一因たりとす。時に元文宗即位し治綱を張る。天下師表閣を建つ。中岩命ぜられて上梁文を作る。百丈を出で、より廬阜郡湖金華を經、徑山に上り、回りに響に過ぎりて友絶際を吊し、一峰と共に湖東に出で、凡そ彼土に在る事八年にして正慶二年歸國す。時に關東北條氏既に亡ぶと雖も、兵塵未だ收まらず、身を容るゝに處なく、博多の大友氏に依り、次で南禪に歸る。時勢を痛議して原民原僧二篇を作り上表以聞す。時に大友氏の殊遇を得たるは、彼が祭大友江州直庵の文中に、予初識公、在乞丑、予南遊八年而歸、見遇殊厚、原民原僧、自謂覆瓿、而公縱臆敢塵帝難、臨當寫文、紙筆手授云々とあるを以て知るに足る。

上建武天子表

十一月日、傳法臣僧圓月、謹昧死上書皇帝陛下、窃以王者受禪於人者、襲其統而沿之、得命於天者、道其變而革之、受禪於人者如夏后殷周之克繼也、得命於天者、湯放桀武王伐討之類皆是也、故易曰湯武革命順乎天而應於人、豈止湯武而已、漢高祖唐太宗宋太祖皆其人也、文中子曰、通其變天下無弊

法孰其方天下無善教、教化法度之成、三代莫之踰者、然久則其法又幣法弊則革之、所以通其變也、所以夏法弊則殷湯革之、殷法弊則周武革之、周之衰時法之弊甚、時衛鞅入秦變其法、行之朞年、國都言新法之不便者以千數、於是太子犯法鞅言法、之不行自上犯之、太子君嗣也、不可施刑、鞅刑其傅、其師、明日秦人皆趨令行之、十年秦國、道不拾遺、無盜賊、民勇於公戰、怯於私鬪、然後其初言不便者來言令便也、然而秦得天下之後弗能知復變其法之理、故弊甚極至暴酷、是以二世而亡、漢繼秦之後七十餘歲、雖欲理之、無可奈何、法出而奸生、令下而詐起、則無佗、以秦之遺民習俗、薄惡、民人祇冒也、是故董仲舒對策曰、如以湯止湯、湯愈甚、琴瑟不調、甚者必解而更張之、乃可鼓也、爲政而不行、甚者必變而更化之、乃可理也、仲舒之言至矣哉、恭惟 陛下明繼周文德、承 神武興王除霸、柔遠包荒、高天之下、厚地之上、莫不賓順、非聰明叡知、得命於天、孰能與於此哉、然今天下爲關白所白、百數十歲之弊積焉、斯民漸漬惡俗、貪饕論議、故自朝至暮、獄訟滿庭、又沙上偶語者亦多矣、乃與漢繼秦之時偶相同也、更化則可理之時也、天地之初、臣不得而知之、陛下除霸興王、不乃萬世鴻業之始、固在斯時乎、舊法之弊可不革耶、臣是山林一芥、宜當與草木共朽也、世之利害非所交關、然所以區々是言不避煩黷之誅者何也、實爲天下不爲身也、實爲萬世、不爲于一時名望之榮也、伏望 陛下感董生王通之至言而收臣懇誠、則天下萬世之幸矣、臣不自撥、輒撰原民原僧二篇以塵 叢覽、

如有可采、敕有司施行、謹奉書以聞 某誠惶誠恐

原民篇

淳世之民各務本修業、故國富且強矣、所以農者播禾穀、種菜果、工者營棟宇造器皿、賈者通其有無、士者布其政令、符璽稱解之信、以防其欺負、詩昏禮樂之教、以正其狼戾、甲兵干城之威、以禁其侵奪、然而百姓各修其業、而奉其上、則國無有徒爲苟食者、故富強也宜矣、漢氏以降、加以佛法、使民精通性命死生之理、且知禍福因果之道、然而百姓好善而賴慶、忌不善而避殃、故有利于國、無害于民、是以國益強矣、今觀國朝、民無不衣甲乎兵者、百姓皆忌其業、互相侵奪以爲利也、若夫出家斷髮者、亦以堅甲私兵相誇、而廢其本業也、禍亂之大、莫之過焉、武者者戡定禍亂也、其爲文也止戈也、然今有如斯禍亂、而不能戡定者、可言國有武乎、彼亦堅甲利兵也、此亦堅甲利兵也、以堅敵堅、以利敵利、其勢均矣、勢均則不可制止也、宜矣、周語有之、先王耀德不觀兵、夫兵觀則翫、翫則無震、旣然、今宜奈之何、宜當敕差有司、如非官軍者、衣甲手兵、則誅之、使彼士農工賈、及釋氏之流、各務本修業、則富強之國、其庶幾乎、

原僧篇

出家也者、斷髮云乎哉、出離俗塵之家、疎于世情、親于道情之稱也、儒不云乎、身體髮膚不敢毀傷、

然則佛之教剃髮除鬚其無由乎、曰若使爾形質同彼在俗之人、則俗不知所以擇而敬之、僧亦以爾形質不與俗異、故藏身於俗中、以行非法之事、而無所羞也、是以佛教剃除鬚髮、表而出之、是故俗見彼圓削之士、殊生恭敬之心僧以爾形質異諸人、而不可藏身、故不敢行非法之事、僧不行非法之事、則其道愈隆焉、俗生恭敬之心、則其福愈昌焉、釋氏之教、固有由也、今稱出家者、不本其由、而止斷髮而已、士農工賈之民、皆廢其業、不知所以爲僧、偷空名於出家、從意斷髮者戶有諸、非唯爲儒者罪人而已、抑又爲弊佛法之魔族也、僧亦斷髮、俗亦斷髮、何異之有、且夫士農工賈之民、漸少而徒爾不用之人愈多、亦爲國家之害矣、

建武元年圓覺に歸り中正子十篇を作る。曆應三年瑣細集を作る。藤谷に門を杜ちて世と接せず。藤谷は大谷氏の墳處なり。同二年、上州利根に吉祥寺を始む。百丈東陽の法嗣たるを表示せんがために洞宗の徒の怒を招き、不聞別源等會して事無きを得たり。同四年日本書を修す。後醍醐帝に焚かる。康永元年鎮西に下り復た船に乗じて東陽を訪はんとして成らず。歸りて藤谷利根の間に在り、貞和元年虎關を海藏院に訪ひ、元享釋書を泛覽す。是より年々鎌倉京都豐後の間に往來し、席暖なるに至らず。蒲室集の註釋其間に成る(延文三年天龍於て)。延文五年に至り、京の葛村へ妙喜世界を作りて閑居す。貞治二年足利氏強ひて之を等持に入らしむ。等持は足利氏の顧問處なり。義堂書を寄せて之を警む。

上中岩和尚書

周信惶恐九拜上覆上都等持禪寺宗主中岩和尚侍几、周信濡滯東隅、不親槌拂又五年矣、誠可恨也、伏惟和尚道契王臣、名喧宇宙、然其一出一處、皆系乎佛法之弛張、可不重乎、春間傳聞樞府特以等持來聘、起和尚於江之隱處、由是關左諸山咸謂和尚爲天下佛法宗主、而恐傳者不端、故不敢即賀、非慢也、適者與姪至、就問方審傳者端也、信始聞而喜、中而懼、終乃復喜、而更有所幸也、何則和尚平生以道自高、几今抱道而不容於世、佚乎丘壑者之誠與不誠、聞是舉也皆頤々然曰、茅茹之慶兆于茲矣、是以始而喜也、而又等持適官寺陰柄銓衡、密贊樞政者之所宜居、故每難其人、明教謂慎之乎、蓋是也、而邇來迫不得已、居斯任者、或材兼應世而能周防者或默焉、自守而慎乎嫌疑者也、惟和尚言行正正、洞視古今、論其人物必公必當、以之應乎今世、則圓柄而方鑿、以之處於嫌疑、則邪者必忌、佞者必毀、毀之忌之而不已、則宜或有武庫之變、是故中而懼也、而又或者妄議曰、和尚榮寵若斯、其或枉尺直尋而然、信抗顏而駁之曰、必不然也、想方今府君自領樞務以來、一更舊弊、巨開正塗、擢用直者、參乎政化、故其化及吾佛氏、而旁搜抱道正直之士以公其舉也、若果爾則公舉行乎天下而善類並進、妄庸竄伏也必矣、是以終乃復喜也、然前云々者、皆外物也、固非必爲和尚所宜幸也、信竊幸和尚以盡扶桑國爲妙喜世界、端居其中、三尺竹

篋佛來也打、祖來也打、打去打來、何翅乎十三人也、其或不然、姑向建化門例用三尺竹篋子拈作一管毛穎子、踵通慧潛子之武、補僧史補教之缺、俾片言隻字立之不朽、則庶得佛祖命脉綿々不絕、是乃更有所幸者也、非獨信之所幸而已、抑亦天下學佛者之大幸也矣、惟和尚高識遠量、非敢蓋勾管窺之者可擬也、區々之誠、欲默其可得乎、君子不以人廢言、苟有可采者、蕝蕝之言而不弃之、况不肖與和尚既忝忘年之素、設無可采想必不以敢言爲罪也、惶々栗々不宣、

中岩乃ち直に印を解きて妙喜に歸り、使者頻臻するも堅く閉ぢて起たず。三年近江に行きて龍興寺を始む。應安八年七十六歳を以て卒す。佛種慧濟禪師と贈稱せらる。彼生前儒者藤原忠範と交あり。忠範家に儲粟に乏しと雖も、權勢を避けて學を勵み、且つ漢唐を尙びて宋學を排するもの也。寄藤刑部の詩に、學尙漢唐不言今、奮起欲救伊洛弊と稱せし者は也。

彼又在宋中宋學を研む。贈觀瀾張學士の序文に曰く、予既遊盧阜、將過番易買舟彭蠡、風雨不可往也、信宿落星寺、會此相談大極無極之義一貫不二之道と。又其詩に曰く、

客邸細讀觀瀾文、風情四座收塵氣、三復之后猶未厭、無那冬日將黃昏、夢中得句參李杜、郊島瘦寒何足云、詩之於道爲小技、試將大道俱相論、究盡幽明歸無極、一異儒佛空諸群、揚墨申韓寧復數、莊老虛玄猶弗援、天賜先生不失時、今上政是清明君、跨看場屋得意后、護法著論莫相讓、

第二節 著述

東海一瀕集

卷之一 古詩 五言律詩 七言律詩 五言絕句 六言絕句 七言絕句 贊

卷之二 疏說 上梁文 銘

卷之三 表書 記論 雜文 祭文

卷之四 中正子十篇 自跋

卷之五 自歷譜 輝東陽偈、宗廓偈 玄理偈 僊竺仙偈跋

中に就き、自歷譜は六十八歳以下八年間は弟子建幢の補によりて成る。中正子は群書類從卷四百九十八に收められたるもの也。是れ寧ろ單行せしむるを可とせん。故に今別に離して之が解題を試むべし。

中正子十篇

中正子外篇三卷六篇より成る。五千七百餘言、烏何國・仲明・桑革子等の假人を以て問答體に文を成す。第一篇叙は本書著述の所以を明にす。第二篇仁義、第三篇方圓、第四篇經權、第五篇革解、此篇は周易革卦を解説し、改革之道不可疾行革之爲體内不革而外可革也とせり。第六篇治曆は前篇の續にて、

革象を以て曆を治め、時を明にするを數理に由りて精細説明せり。

内篇は三卷四篇より成る。凡五千六百餘言、第一篇性情、第二篇死生、第三篇戒定慧、第四篇問禪是也。

中正子自跋左の如し。

予生亂世、無有所以、偏以翰墨游戲餘波及二三子講明、遂成中正子十篇、後十年讀之、又不能無自是之非之也、此書之作、以出乎一時之感激爾、甲甲春季圓月書、

竺仙讀中正子の偈跋左の如し。

有生幾何同一氣、有頑鷲兮有才藝、中正子持思无邪、吐語作金擲地響、警歎嘘吸内外篇、上下出入天與淵、荒涼海國渺煙草、桑華開此扶桑顛、

瑣細集

五家符命

蒲室集註釋

右三書未だ之を見ず。

日本書

本書稿成りて後醍醐帝に献じたるも焚かれたるを以て傳はらず。蓋し神武太白祖の事を載せしがた

めたりと云ふ。若し果して然りしとせんか國體論者の非難を免れざるべきか。圓月は恐くは此邊には無意識にて寧ろ日本を揚げんがためたりしや推知し難からず。然れども古來天神の子孫を以て稱せられたる皇室の忌諱に觸れ、ために焚棄せられたるや固より其處たりと云ふべきのみ。而して中岩の後漢書晋書等によりて其の説を立てしや必せり。而して中岩の國史に精ならずして虎關の國體説に服せざりし事虎關傳中に挙げしが如し。然らば中岩若し日本を揚げんがためたりしと雖も、國體論者の反抗に遇ひしや怪しむに足らず。但其書にして歴史的敘述に依らんとせしものならんには、史的參考書となりしならんのみ。今何れか是なるを知るに由なし。然るに後世林羅山に至りて神武天皇論なる一篇を草し、中岩が意を推し寧ろ中岩の説に贊同の傾向を示せり。亦以て缺亡を補ふに足る者なしとせず。由て茲に之を付載すと云ふ。

神武天皇論

論曰東山僧圓月嘗修日本紀、朝議不協、而不果遂、火其書、余竊推圓月之意、按諸書以日本爲吳太伯之後、夫太伯逃荆蠻、斷髮文身、與蛟龍共居、其子孫來于筑紫、想必時人爲神、是天孫降于日向高千穗峰之謂乎、當時國人疑而拒之者或有之歟、是大已貴神不順服之謂乎、以其與蛟龍雜居、故有海神交會之說乎、其所齎持而來者、或有墳典索丘蝌斗文字歟、故有天書神書龍書之說

乎、以其三以天下讓、故遂以三讓兩字揭于伊勢皇太神宮乎、其牽合附會雖如此、而似有其理、夫天孫試若爲所謂天神之子者、何不降畿邦而來於西鄙葦爾之僻地耶、何不早都中州善國、而瓊杵彥火鷦草三世居于日向而沒耶、神武四十五歲東征到安藝國、明年入吉備國、比及三年、修舟揖聚兵食、其後至河內國、與長髓彥大戰于孔舍衛坂、既而獲克、遂殺長髓彥、入大倭國建樞原宮、且夫以神武之雄略、其難如此、又何哉、天孫之有大已貴、神武之有長髓彥、或相拒、或相戰是亦可惟焉、想其大已貴長髓彥者、我邦古者之會長、而神武者代而立者耶、嗚呼姬氏孫子本支百世、可至萬世而爲君、不亦盛乎、彼強大之吳、雖見滅於越、而我邦之寶祚與天地無窮、余於是愈信太伯之爲至德也、設使圓月復生、謂余言何哉、或曰吾邦以八咫鏡草薙劍八坂瓊爲三種神器、自靈神繼天、而馭宇內、固有三器、惟鏡惟劍惟薙、乃出于天成、歷代寶之、今若子之言、則是亦異邦之寶器、而出于人爲也、奈何、對曰、太伯之逃去時、豈不有器物可提携襲職乎、其祖公劉、干戈威揚有以啓行、太伯何不則乃祖之法哉、只讓天下而已、想太白不爲匹夫之行歟、所謂端委而治、又可見矣、於吳則有季札劍、夫差屬鏤之類、傳于周則有赤刀大訓弘璧琬琰之類、且古天下班五瑞干群后、想太伯何不執圭璧以爲信乎、然則所謂三神器、與赤刀弘璧瑞玉類也耶、若論天成入爲、則形而上者謂之道、形而下者謂之器、天人一體、道器無間、故有理則有物、有物則有形、有形則有

器、夫物之有成也、本乎自然、譬如穿牛鼻絡馬首、人皆知牽繩羈勒之作在於人、而不知牽繩羈勒之作、由於牛馬、三神器之作、亦猶是也、不獨此而已、聖人之制作、皆如此矣、何惟之有、且余嘗推神書之意、則三器者三德也、人心之虛靈不昧、鑒以茹之、是智也、非鏡乎、人心之全德圓成渾然如玉是仁也、非璽乎、人心之剛直果決義以斷之是勇也、非劍乎、三器者神也、三德者心也、心者神明之舍也、是以一而三、三而一、未嘗始有異者也、蓋神本無方、假器以象之、心本無迹、隨物而應之、天下之際微矣哉、豈以毫髮而隔哉、爲人之上、而以三德治國家、永可以保三神器之大寶、若舍德取器、則抑末矣、古之讀神書者、知而不言、今之讀神書者、詐而不知、余是故聊論之此耳、曰三器既開命矣、今子云太伯與蛟龍雜處、故有海神交通之說、然則女登感神龍生炎帝、劉媪遇蛟龍產高祖、及赤電大虹玄鳥巨迹之祥、史氏之所記、儒先之所論、皆可廢耶、奈何、曰誠然也、天地之始未嘗先有人、則人固有化而生者、是天地之氣生之也、故有氣化、有形化、鳳凰之生、異於衆禽、神龍之生異於群鱗、物既有然者、則神聖之生、必有異於人、是雖理之變、而不可謂無之也、今余之所云非謂之、但就太伯而建言耳、曰晉書載日本蓋夏后少康之裔也、接小康之庶子封於會稽、文身斷髮、處江淮之陂、與鼃魚鱉爲伍、遂爲越國、由是觀之、吳越共近于我邦、一葦之航、往來之易、以爲太伯之子孫宇、以爲少康之後昆乎、是亦未可知也、子推之以爲太伯爲夏

后、必與圓月全獲罪于時乎、不若只從日本紀之舊儀、而敬我邦固有之神皇、不亦可乎、曰是亦然也、太伯之事乃古人多言之、余不始言之、小康之事、晉書姑備一說、誠是上世之遠也、不易詳知也、余今生乎千載之下、叨々及此、子之駁余固宜、雖然論于門者論于朝廷者、古之人行孔子之作春秋、記用周正、其告顏子則以行夏之時、有公有私、道並行而不相悖也、若使余讀日本紀、何必敢爲哉、

第三節 學 說

圓月の學は古來諸種の學說を摺摺して能く之を總合統一し、終に儒佛の調和融合に歸したる者也。其の規畫形式は大概仲靈に依れるに外ならざるも、所論更に精に入り、亦一家の言を成したる所なしとせず。日本に於ける支那學術思想の變遷を研めんとする者は必らず先づ圓月を捉へ之を中心として前後の時代に見ざるべからざる也。

第一 立脚地

中岩が思想の立脚地を知らんと欲せば、彼が周秦以下諸子に對する批評の態度を見るに如くは無し。彼れ之を其の著中正子の序論に於て述べたり。彼は子思孟軻を以て、子思は誠明、孟軻は仁義、皆道に醇なる者とし、荀卿を以て醇にして小漓ありとし、揚雄を以て殆んど醇に庶くして其の文緊な

る者とし、王通を以て夫子に後ること千載なるも甚だ侷たりとし、而して王通の徒は之に過ぎ、夫子の化愈遠しとす。韓愈は道に小詭するも、文八代の衰を起したるは尙ぶべしとし、柳子厚を以て文に淵にして騷多しとし、歐陽修を以て韓を宗とするに過ぎずとし、蘇子の兄弟は軻を以て尤なりとし、轍を以て善文の者とす。而して老莊を以て清にして靜なる者にして、莊の文、特に奇にして其の教化に於けるや不可なりとせり。是を以て之を觀れば、中岩は寧ろ老莊を退けて孔孟を尙べる者たり。彼又た方圓篇に於て孟荀揚の三子は最も學者に益あるも、惟だ莊に至りては益なく、纔かに以て欲を窒ぐの譬と爲すべき者とせり。中岩は決して窒欲を輕視せざるものなり。其の道物論に於て莊子逍遙遊を布演したり。又左の一篇の如き以て見るべし。

窒 欲 銘併序

孟子曰、無羞惡之心非人也、天下之可羞可惡者、皆由不窒欲也、作窒欲銘、銘曰、
化母之産、萬彙殊質、性變之情、以喪醇實、動物之凡、所欲如一、君子於斯、止不縱恣、好惡中節、中和莫失、乃能保之、受天陰陽、小人反之、禽獸之匹、爪牙爭利、猛鷲媚嫉、人而非人、可醜可恤、戒哉銘乎、欲也宜窒、

されば中岩は唐宋以下の諸儒者は取らざる所有りと雖も、漢以上の儒教をば概して醇なりとし、其

の孔孟を推重するや至れりと云ふべき也。彼猶仁義篇に於て極力揚墨を排斥して、仁義に非ず且つ其の所謂中正の道に反する者となせり。蓋し彼の仁義と謂ひ又中正と謂ふものを見るに、畢竟儒教の中に存する所を取りて發揮するに外ならざる也。然れば彼が學は全く孔孟の儒教に其の根柢を置きたるものと稱するも不可なき也。且つ彼の論ずる所を見るに、常に易を以て本となし、以てその唐宋以下の諸子を難するに於ても、易を知らざるを以てせり。その復初説の一文に於て韓退之を論ぜるが如き以て見るべき也。

復初易象有之。休復之吉以下仁也。仁者言初九也。以陽剛之復、居衆陰之下。故曰仁也。亦二比焉而下之。故曰休復也。二而復初、柔而下剛。故美之也。休之訓美。復者反本之謂。初者元本之稱。本而居下、物之体也。本而處卑、人之禮也。又曰、天地之間萬物運轉而究其本。至於太極寂然虛無也。故復之爲体、陽微乎初、動息乎地。然其陽且動者、不可微而息而已。且生且養、浸長之曰臨。臨也者大也。滋長之曰泰。泰也者通也。故有始於無、實始於虛、是自然之理也。由是言之、復初之本立乎虛無、而交泰之道生乎實有者也。退之責求清淨寂滅者以爲禁而相生養之道者復初之理、未之思矣。吾聞之本立而道生也。不立本而能生道、則未或聞之。

是れ即ち韓子が其の原道論に於て、虛無寂滅を求むるを排して、相生相養の道を唱道したるを以

て、一局の偏見となし、相生相養の道は、易の所謂交泰之道にして、實在活動の所にありて、其の活動の根本本身に復へり求むれば、即ち初九の位より太極に至りて、所謂虚無の寂滅なりとなすもの也。此の説たる周子の太極説と甚だ相似たるものありて、唯之を易理に於て説明したるは頗る巧なりとなすべし。然れども中岩は宋儒の學に就きては敢て之を尙びしの形迹なく、程朱の學に至りては寧ろ反對の側に立てるを見る。問禪篇に曰く、

伊洛之學、張程之徒、夾注孔孟之書、而設或問辨難之辭、亦有恣地便是恰好不要者、什麼說話无道理了、那裏得箇不理會得、却較些子、等語。然其注意在於槌提佛光之道也。此等語非禪也。審也。禪者佛之心也。其量大而能博、無所不容。故得其心者發而言之、何言不中。寓而表之而已。苟不得佛心者、縱使新口佛語、亦非禪也。何況恣地却較些子等語、暢疏下俚者乎。

是れ専ら禪の見地によりて、程朱は佛語を用ゆと雖も禪にあらざるを辨せるものなり。禪とは何ぞ。彼曰く、

能信心者不自欺也、不自欺則無妄、無妄則歸理、歸性之道、信而證者禪也、

是を以て見ば、彼の所謂禪は復性説の如き也。果して然らばその復初説と相異なる所なき也。即ち知るべし、彼は易理と禪理と一にして二ならざる者とせることを。彼が意の在る所を追綜し行かば、

自から茲に達せざるを得ざる也。否彼實に之を公言せる也。性情篇に曰く、

孔子曰、利貞性情。言俾情能復性也。利者秋之斷也。貞者冬之正也。正者極也中也極也而已矣。

天之道非真正、則萬物之動不靖。人之道非真正、則萬行之業不成。故俾情復於性者靜而已。靜而

極中。天地以此富有萬物。人道以此修証萬行。是孔子子思之吉乎性也。不與吾佛之教相賅也如此。

孟軻氏以降言性者差矣。

兩教の根本原理を一にせりとするもの、是れ以て證するに餘ある者也。彼又世儒の之を辨知せざるを難じて曰く、

當知孔氏之道與佛相當表裏、而性情之論如合雙璧然。然世之儒生、猶不欲同焉。則無佗、以其欲異於釋氏故也。是非君子之道也。君子黨理。全人于宗、吝之道也。韓子其人也。甚矣不黨而好異也。云云。

又曰く、

古之言性情者、於其理也一矣。曰節情復性而已。

如上の所説によりて中岩は儒佛兩教の根源を同一視したるものたるを明知すべし。而して中正子の内篇に於ては主として如上の性論をなし、以て佛教を論ずとなし、其の内篇に於ては主として仁義中

正經權の道を説きて、以て儒教を論ずとなし、而して外よりして内に歸せしめんとせり。是れ豈寧ろ儒を解説して以て其の地を開くものにあらざるなからんや。且つ彼が平生の所説を見るに、多くは儒教によりて立説し、特に殆んど易の外に出づることなく、其の佛理を説くや極めて寥寥たり。彼は其の詩に於ても、佛偈の類殆んど之なく、全く世間的也。否實に其の人物性格に至りても、全然禪徒の類に非ざること、是れ吾が既に前に辯じたる所也。(別中岩性格論あり)然らば彼は時勢のために已むを得ずして暫く籍を桑門に列せるものなるか。否耶、試みに彼の崇拜せる人物を擧げんか、實に仲靈潛子其人にあるなり。彼曰く、

或曰釋氏能者誰、曰潛子以降、吾不欲言。非無也、吾不欲言。

と。是れ焉んぞ孟軻が孔子の傳統を以て自任せし語と相異ならんや。顧ふに潛子の儒佛の一貫を首唱したるや、猶ほ當時儒者の排斥に當らんとしたる所もありし也。然れども中岩の時や、朝廷の儒者萎靡不振、復た歐陽修の如きなし。抵抗の要もなく、否寧ろ儒教即世間教を以て、亂世の民心を統一するの要ありしなり。是れ後日義堂等の取りし方針にして、亦た中岩の志向も之に出でざりしものたるや知り難しとせざる也。惟だそれ彼等は儒に依ると共に、佛教の要處に達したるが故に、佛家として猶その儀表を保持するを得たりし也。

第二 中正論

中岩の中正論は儒佛の關鍵を成すものにして、其の説や佛説より出でしにあらざして寧ろ儒に依り、易理に根元せるものたり。即ち易の利貞性情の語を拾ひ來りて、貞正によりて天道人道の活動を成就せしめ、以て情をして性に復せしむる者となし、而して情を性に復せしめし者を靜とし、極とし、中とし、之を成す者を正是也となせり。此の正に依りて以て靜にして極中なる者を得ば、初めて天地萬物人道、運行活動するものとなせる也。(其文節節に引用せる如し)蓋し彼の中正論は全く性論より來る者に外ならざる也。唯之を佛教の空理に求めずして易理より推し、而して徒然性論を爲すに非ずして敢て中正の論を主張し、遂に中正子を著したるに於て見るも、彼が學說の主眼とする所は、佛説の如くに性其物に就きて絶對の見解を立つるに馳するにあらずして、性に達する手段に就て特に意を用ゐしを見るべし。加之彼の性を求むるや、佛理特に禪理の如く、直指見性の類にあらざる也。然らば彼が儒教に於て中正を標榜したるは、猶ほ宋儒の敬を説き、陽明の知行合一を論ぜしと相異なるなき也。その儒教の變性たるや皆一也。

中岩又中正銘を作りて其の説をなせり。其の序に曰く、

道之大端有二。曰天、曰人。天之道誠也。人之道明也。夫惟誠明之合乎体、則中也正也。正也者遵道而不邪。中也者適道而不偏。適故能通。遵故不失。不失者微乎理而正也。能通者精乎事而中也。中正也者道之大本也已。予所居皆以中正扁焉。庶幾乎道乎。

其銘に曰く、

執中乎性。以行厥正。惟道之盛。天錫爾慶。遵之以正。恒而母病。行正乎躬。以執厥中。惟道之通。天錫爾豐。適之以中。變而無窮。中兮弗過。正兮不頗。馴致大和。母以叢睦。惟通之大。行之母墮。

是れ子思中庸の道より出でたるものにして、中岩の特に中正を以て稱説する所、其の一步を進めし所たり。而して之を以て横渠の東西兩銘に比するに、更に醇なる所あり。抑も中正仁義の説は既に仲靈に在り。又早く濂溪によりて掲出せられたるものなり。濂溪の大極圖説に、聖人定之以中正仁義而主靜とあるもの是也。濂溪の説と中岩の説とは甚だ相近きものあり。中岩又仁義も亦た正たるべきを説きて仁義篇あり。曰く、

春元夏亨秋利冬貞、天之行也。仁以生禮、以明義、以成信、以誠人之行也。仁也者天生之性也。親也孝乎親也。義也者人倫之情也。宜也尊也忠乎君也。忠孝之移以仁義相携也耳。名異而實一也。仁義之離楊墨之道也邪之道也。偏之道也。楊也爲我。墨也無親。無親何以爲仁。爲我何以爲

是。故墨之仁非仁也。揚之義非義也。墨之道不能推而移。所以仁義離之者哉。云云。惟聖人者能推而移之。是以仁義不離正之道也。中之道也。云云。

中岩の仁義を論ずるや、韓子原道篇に於て論ずる所と殆んど相全じ。然れども中岩は仁義を以て遂にその所謂中正に歸せり。韓子は道徳を以て立論せり。兩者自から問あるなり。

中岩は其の中正論を以て萬事を斷ぜり。方圓篇に於て方圓共に偏するの不可を辨じて、左の言あり。

中正子曰、方者上知之與下愚也。圓者中人也。可以上焉、可以下焉。教使然也。莊周言、吉祥止々、以天爲自然、而槌提仁義之教、則無它、專執方而不知乾々不息之道也。揚雄取水含山而曰惡劃也。亦無它。事循々圓、而不知直方大之理也。孟軻言性善者、好中焉者之方、而惡曲焉者之圓而云爾。荀卿言性惡者、惡偏焉者之方、而好和焉者之圓而云爾。云云。或問伯夷何人哉。曰方也、柳下惠、曰圓也。皆不可取也。云云。周公孔子之圓、亦以天下言之。向使周孔有位、則其行於天下亦方也必矣。

是亦た易の方圓論に基くものたりと雖ども、中岩は之を以て其の中正論を辨せんとするに過ぎざるなり。而して彼が性論の如きも亦た、中正論に由りて立説せしものにして、特に注目すべきものとなす。

第三性論

中岩が易によりて儒佛の性論一也を説きしこと、既に前章に於て述べたるが如し。今その性情の區別を辨ずる言によりて、更に彼の性論を審にすることを得べし。彼れ性より情の發作し來るを説きて曰く、

性之本靜。靜之舛虛。虛故有靈。靈故有覺。覺故有知。知感於物。感則動。動則欲。欲不可量也。欲而得之則喜、喜則心平。心平則善也。欲而不得則怒。怒而無度則暴惡也。一喜一怒、可以善、可以惡者情之混。韓子所言中焉者是也。但非性也。

其の性なるものは、樂記に所謂人生而靜天之性也と言へるものと同じくして、又その情は感物動情之欲也とせると同じき也。又その中庸の中和を説きて、

所謂中則靜也。喜怒哀樂未發則性之本也。天命稟之者也。性之靜、本于天也。是性也靈明冲虛。故曰覺。喜怒哀樂之發則情也。情也者人心之欲也。是情也蒙濤闇日月。故曰不覺。

と云ひ、又、

靜者性之体也。常也。感而動、則其用也、變也耳。

と言へるが如き、何れも朱子の説に和するに佛説を以てしたるに過ぎざる也。然れども其の性善惡を論ずるに至りては朱子と同じからず。朱子は性を以て寧ろ善なりとせるも、中岩は善惡を以て、情の事にして性の事に非ずとせり。

孟軻氏以降、言性者差矣。或善或惡焉、或善惡混焉。或上焉、中焉、下焉。而三之皆出乎性者言之耳。舍本取末也。性之本靜而已。善也惡也者、性之發於情而出者也。末也混焉者。兼二末而言之、亦是末也。

是亦た仲靈の説に由る所ありと雖も、程朱學の漸く勢力を得んとするに當りて、猶ほ此見あるを得たるは、蓋し其の佛説に據る所あるを以てなり。

性也者、非善、非惡、非混也。善者惡者善惡混者皆情也。性之末也。情之本靜而已。孟荀揚三子者、不見正於佛教、故誤也。但韓子出佛教之後、當見正於佛教、當知孔子之道與佛相表裏者也。然區々別之。甚哉韓子舍本而取末。與孔子子思之道相遠也。如此甚矣。

此の如く孟軻以下の性説は皆非にして、亦た孔子子思の思想に非ずとなし、孔子子思の性説は佛説と相違はずして、善惡なきものなりとせる也。是れ其の佛説に發達せる体用の見解によりて論究すれば當然の論結なりとす。然るに朱子は其の説明の法を藉りて、而して必ずや孟子の説に附和せんとせし

より、思想混亂を來したる也。其の性理の絶對の物を指して以て善也とせるもの是也。若し論理の順序より推せば、中岩の説を正也とせざるべからず。然れども之が爲めに孔子の儒教なるものは既にその体格を變じ來りたるや蔽ふべからず。何となれば、虛無を説くは孔子の思想に非ざればなり。

中岩又其の死生篇に於て、情の發動の源頭に遡り、

性因於靜。性靜能覺。覺而能知。知在格物。物格而知。知而后感。而后動。覺者性也。動者情也。

靜と言ひ格と言ひ、格物と云ひ又感動と云ふ。能く儒佛を調和し得たりと云ふべき也。而して格物に就き説く所、佛の因果によりて前人未だ言はざるものあり。

惟物之格也、亦非無因素乎。善者果乎、善者素乎、惡者果乎、惡者素乎、天人果乎、天人素乎、鬼神果乎、鬼神乃至素乎、禽獸草木果乎、禽獸草木无素不果無乃業之報乎、業之因素乎、陰界而其報果乎、陽世也必矣之理不可疑之。惟物之格也、以神不以形也。故不可度矣。

彼又人の性情を以て天之四時に比して、冬至を以て終の發着點となせり。後世大高坂芝山に此説あり。某氏以て前人未發の説となすは非也。

四時之行、終而復始。周於冬至、冬至之日建子。冬者終也。子者始也。是月也、動息地中、商旅

不行、後不省方則天之靜也。然春陽之來、草木之生、亦以天命之性也。既生者必求長養之道。故夏之草木蒙鬱冒者天之欲也。欲之長不可淫。故秋發之氣、擊彼草木之蒙鬱冒者、發而中節之義也。然而冬之至也、靜焉、而後復其見天地之心乎。是故曰人生而靜天之性也。

之を要するに、中岩は靜を説き、又覺を説くも、常に易の復を以て之を一貫するを以て、能く動靜の兩方面を把持して、混茫の空に陥らざるを得たる者也。

中岩學說の一節は明治三十四五年の交哲學雜誌に仲靈學案の附録として掲載せしことあり。

第四節 性 格

中岩の學說の冷靜なる、禪徒の間に孤出して能く實際的の方面に重を置きし者、蓋し其人の性情に關する無きを得んや。彼の性格を見るに、彼は決して冷靜枯淡なる禪僧にあらず。亦耽理沈潛の道學者にもあらず。唯々一個の詩人たるのみ。彼熱情活氣内に充ち、狷介孤峻苟も世と相容るゝを好まざるもの也。而して時勢は紛亂して又彼を容れず。彼の事業文章は事々時と相阻垂せり。故に仰俯徒に感慨に滿ち、纔々禪規の嚴なるによりて之を制せられ、充分に其の不平の氣を發するに至らざりしのみ。然らずんば其の時と其の人と其の腕と殆ど少陵の位置に在るものにして、亦た一代の詩史たるを得たりしならん。惜むべしとせんか。

中岩の偶看杜詩有感而作の詩に曰く、

久廢成野趣早涼讀杜詩、男兒功名遂、亦在老大時、起予四百懶、庭樹稍秋颺、彌信古賢語、譬之
病遇醫、我本勇夫子、墮地爺橫權、祝髮學西佛、心空是立基、一得空心盡、萬錄咸相隨、絳絳偏
縱性、天地誰顧之、豁達存大度、局迹何其羈、是夏惜陰住、屋矮暑毒寒、裸程無禮法、聽渠癡兒
嗤、或面襜褕子、叱弗問尊卑、狂名增遠扇、衆口金可糜、自今天化我、爽氣多々來、數學母厭倦
式副初心期、進修求戮力、祖父遺清規

其の男兒功名遂と云ひ、我本勇夫子と云ひ、絳絳偏縱性と云ひ、狂名増遠扇と云ふが如き、何ぞ禪者の語ならん。霸氣盈々たり。彼は元と兵亂のために早く其の父に別れ、又母に別れ纔に一僧の收むる所となりて、其生を佛刹の中に寄せしものなり。境遇事情は先天より悲惨淒涼を極めたり。一僧立翁と稱す。彼後之を祭りて語あり。

月也夙以險巖、仍罹愍凶、生不踰月父竄西邦、奕代之業、一旦掃空、母也不育叔伯咸窮殆道路、
獨師厚憫抃吾爲命既碧且亂育我助我、以解寒暑百身贖恩、不可以盡云々（祭義師立翁）

中岩夙に抱く所の志大にして、區々禪規中に局促すべき徒にあらず。又其の性格や熱血多感にして冷かに理を觀じ得るものにあらざるなり。其の一度歸來して百丈の法嗣たるを表白せしより、衆口讒

金彌々彼をして心血湧躍せしめたり。又竺仙に與ふる書中に、

僕頃在受業師會中見諸人嫌猜、言語嘖々、而欲吾志之奪、且於兵革紛擾之中、無路畏避、臬兀不安、若坐叢棘、由是神識荒散、殆乎狂癡、平生所學文學義理、無復記持（與竺仙和尚書）の語あり。且つ自ら招友の詩を作る。中情の熱せるもの見るべし。

胡爲百沸湯、輒々烹吾腸、誰將此一日、延成萬劫長、長日且難遣、腸熱何可當、山深人不見、積雪厭春陽、粗識天之命、否塞宜括囊、動輒心猿躁、去就誤行藏、止之母復道、中心孰與商、悠悠望君來、君來我何傷

彼は方外に方を設くる者なり。

荆州願識久心期、偶得相逢白水湄、世路艱虞何可說、宗門淡薄實堪悲、人窮智短今猶古、法弱魔強我怨誰、蹭蹬不唯眼前事、文王箕子亦明夷（和答融書記兼東明極和尚）

乾坤何處可安身、窮獨渾無極急人、詩句憑誰吟共伴、干戈脅我死相鄰、惑君交不崇庫別、憶祖全應叔伯親、過訪論文消半日、縱今以後望頻々（和謝忻太喜相訪）

竺仙及清拙は時流の中に於て最も彼の推服する所なり。兩人に向つて其の窮厄を訴へし言、彼の眞情を表はすあり。

與竺仙和尚書中に云ふ、

僕性愚魯而不佞、且褊急而不能優柔言辭、故平生每々於尊長乃至平交間、纔出一語、輒觸其諱而逆其耳、是故時輩以僕爲狂者、是則天命吾、以絕交於一世、獨立而不懼者也、云々、所以願者、立志而不屈、氣養而不餒、守信而不失、適義而不偏、寧可百千此身、而以見粉齏、決不可托已自辱、以爲媒於立身揚名之捷運也、云々

與清拙和尚書中に云ふ、

某拜辭之時私自期謂無何之間、卽當旋京以飫親炙、不料一到關東、兵華梗途、于今五載、不遂前志、以是其間無一日不馳渴企也、云々、且四五年間、或在村郷、或居本師會中、亦因時節艱危、縱逸來久、情意傲散、並不自務、不知修進事業、竟爲何如、反顧中心何啻茅塞而已、直是榛棘參天、勢不可治、良可感也、

落拓恍憐の狀以て見るべき也。

又和韵贈太虚の五古の序に、今冬無雪、春來太暖、天爲窮者厚其賜也、豈可之不仁乎、二月桃李已盛矣、既而將清明節、俄爾太雪、予甚異之、充太虚有詩語太若、乃和之とあり。而して其の詩に曰く、充弟已能詩、時或過我來、嫩慢欲杜絕、未免門爲開、因喜頗聰明、萬一磨靈臺、每見將文章、

添吾書案堆、嗟予同受業、孝不及老萊、丈夫期遠大、莫甘他殘盃、天理有定分、樂極便生哀、且如今年春、早暖晚雪催、桃花誇豔冶、俄然色如灰、世事皆非常、識者唉哈々、

其の丈夫期遠大莫甘他殘盃の語、杜家の遺訓とする所なり。

中岩既に時輩と相合はず。獨立特行自から恃むのみなりしが、猶ほ二人の契交あり。別源及不聞是也。彼其の戲贈別源不聞の五古中に、況我二三友、事業時無敵、此處當聚頭、此日豈不惜の語あり。

不聞別源亦當時別調の者乃ち三人相親しむに至りしも亦宜なり。彼の答不聞の詩に曰く、

願我爲人也、內可能亡慚、生於世濁惡、道滑泥流汙、獨不識時運、無用欺枯槁、雖復齒諸任、怯弱不欲戡、愚乎竄武子、孰若吾恣々、碌々隱衆中、養蒙類眠蠶、懶拙不征利、豈敢謂不婪、榮頤求口實、或見人供甘、連歲遭喪亂、以髻免佩鐔、中間略得意、藤谷住小菴、恒產不多獲、亦可數夫擔、契經課餘暇、目擊阿毘曇、講師鄰開席、教海徒手探、禪水固深奧、誰窺九龍潭、將此輕薄語、欲吐口自含、忍對坐中客、轉作孟諱譚、死蛇莫打殺、滿盛無底籃、活句沒滋味、癡漢肯嗜食、吾道東也不、使人增憂悵、輿尸知幾何、安得長子覃、吾友不聞子、萬象胸中涵、內外兼濟才、小大專研覃、常棣燕兄弟、吾心樂且妯、時流或並稱、韓非忝列聘、或怪賢讓劣、程本歸自鄴、講劇或下問、舍諸壽頭藍、向來稍契潤、秦兵不窺函、天卷蘇秦舌、重遣何速管、息味本相同、議論恰蓋

函、其間文理妙、可觀會稽蚶、玄微固及盡、宛轉而旁參、幽遠誰能到、古洞帶煙嵐、天龍當推轂、迷途獲指南、鸞風生鸞鷲、田鼠化鸞鶴、秦否共有極、常理人皆諳、不見夫鐘聲、達微異羸顛、和詩燈前坐、四鄰絕詰誦、籟沈更鼓近、五夜已過三、雋盟纔方歛、文字戰將酣、河北姑頂救、南陽終劉龕、

是れ藤谷に塾居せし時、不聞亦隣をトし相唱酬せしもの也。又答別源二首に曰く、

心以形勞何太迷、錦毛照水眩山難、新題詩見篇々妙、久廢甚應著々低、天也丘軻無遇魯、時哉管晏有功齊、想君寒榻永宵坐、憶我全舟過湖西、

窓間吐月夜沈々、壁角光生藤一尋、窮達與時俱有命、行藏於世總無心、夢中謂彼非此、覺後方知古不今、自笑未能除僻病、逸然乘輿發高吟、

左の一篇の如きは彼の境遇と爲人を想見せしむるに足る者也。

兜率寺陋房、夜爲大風雨所擺搖、睡醒而作

雨澎滂海雪浪、激々帷々侵柴牀、欄建飯潢盈庭、屋欲流兮動不停、中正子住其中、至於此極未爲窮、睡受三禪天上樂、夢覺又御冷然風、

彼の上表して時弊を救はんとせしは、杜子美が三大禮賦を献せしに似て、彼の藤谷より更に利根に

去るや、杜子美が蜀に入りて草堂を營みしと相類す。其の大友氏に依りしは、杜が嚴武に依りしに似たり。然れども彼は少陵の如き温厚の者にあらず、縦横の氣は太白に似たるあり。故に諷規の作亦多し。

客有寄詩數扁、其首題曰、讀淵明歸去來辭、余甚有所激、故書其後云

淵明達道者、眞意豈於詩、詩尚非所於、其外竟奚爲、歸去復何意、折腰誰弗辭、去就共不屑、不屑亦母思、母思猶涉思、是非總從之、惡詩辱淵明、々不攢眉乎、

偶 興

蜘蛛巧羅網、日打群飛蟲、々殺幾千億、獨爾口腹充、腹充身隨大、凡類理皆通、始汝看菽許、今體與錢同、體大網張廣、殺蟲倍蓰衆、爾後不可測、勢欲羅虛空、

效老杜戲作俳偈體

堯桀治天下、恬愉不得皆、陰陽分喜怒、居默見龍雷、僥倖較存喪、信囊引跪齋、鴻蒙何等者、雀躍實奇哉、日本自無虎、夜半何有變、觸藩非羝羊、作怪應狐狸、煙荒雲冷處、天陰月黑時、隻履似催我、歸去來愆期、

庚寅七月六日早涼走筆記怪

今歲蝸牛多、蚌蛤并田螺、蒲盧亦敏政、細腰修泥窠、微物動大地、人立勞池螺、螺者蝦蟇子、織尾欺龜哥、龜哥告龍王、貶浮東海波、春秋記異例、吾詩重吟蛾、誰知油與錦、邪佞勝祝鮓、

此等の諸作を以て見るも、彼が一般詩僧の沈靜冷寂に入らず。死灰とならずして生命あり。即ち千理の人にあらずして情の人たりしを知るべきなり。今其の亂離風塵の世に寄せし彼が滿腔の同情は、實に少陵を再生せしめしもの観あり。彼曾て胡爲乎賦なるものを作り、其の不遇感憤の志を洩し、且つ時勢の非なるを歎ぜり。其序に記する所以て見るべきなり。

壬申夏四月、予歸自江南、時罹病息于博多、秋八月病愈、遙跋故里、東海渺漫修、無有爲援者而止、借榻神山門房而臥、有客來問曰、嚮見行有與犬喝道而東者曰某人使江南所獲獒犬獻於關東、某州某官、昇之而進、道傍過者、辟而遠望、不敢近視、子亦江南而來、其爲利于國不若之犬也哉、呂東萊以蕭氏儲至臺城故、斥佛者爲衛君之鶴、今子之不遇、或由之乎、且夫之犬所幸者、獨非土性耳、子疇適他今從來實非異土所產、故不見貴乎、予聞之愀然不答、客退、予獨惟韓愈感二鳥賦固然、然不訓致命遂志之理、故有感激怨讟之詞、知道之士、必不取爾、予作胡爲乎賦云々、又百姓の困頓を寫して庚午三月東陽和尚書所見詩韵の如き、

女兒備織布、日爲家人哺、年荒將縮手、未忍棄而走、粥技不當直、圭撮輕兩疋、質躬慈獲錢、助

饋慈母筵、

能く時情を盡す。亦小詩史と稱すべし。

送澤雲夢

乾坤干戈未息時、氛埃眯目風橫吹、餓者轉死盈道路、荒城白日狐狸嬉、我問樂土在何許、一身可
以安棲遲、固欲適他無所適、之子先我將何之、倉卒告別難爲情、袖出剡藤索吾詩、浮雲流水無定
迹、再得會合誠難期、久厄艱危我羸臥、磨墨揮毫皆不爲、感君拳々有厚意、勉強起來拂烏皮、惜
君學道不日成、如何早離金仙師、想君似我乏供給、不得已故得相辭、望君此去逢佳境、招我蓀蘋
同充餽、

悲涼激楚亦少陵の遺書なり。

和祖東傳二首

幽々巖石下、獨耕餐秋葩、曷云谷口眞、浮名遂風沙、長安驕兒輩、醜敵徒自誇、西方有美人、德
音遠嘆嗟、想立東籬下、三嘯采其花、悠然望無窮、遽爾生有涯
遠々天一方、行々窮微茫、夢殘孤枕冷、寒蟾照屋梁、幕府羅猛士、可以守四方、念彼秋胡妻、采
々陌上桑、寸丹千年碧、梧桐待鸞鳳、悠哉又悠哉、我懷白眉長、

此等の作千古長く人を感激せしむるに足る。要するに中岩の性情の流露する所即ち然るものにし
て、而して其の比較的の僧規を脱し、自由に世態人情に順應したるが爲めたりと云ふべき也。即ち其
の詩を取りて其の人の性格を見るべく、其時の思想をも窺ふべし。蓋し五山にありては以て唯一の世間
的詩人と稱せざるを得ざるなり。絶海の如き技能に至りては固より優れりと雖も、時代と接觸したる
もの幾許ぞや。予故に中岩を接して獨り眞詩人の風ありとなす。

第五節 詩

中岩の詩其調の高に於ては自から五山第一に居る。蓋し絶海の作体格齊整にして亦た氣韻雋麗、千
古に獨歩すと雖も、惜むらくは大概中晩唐に則を取りしを以て、規模未だ甚だ大ならず、雄篇大作の
見るべきなく、亦盛唐の風調を欠く。中岩に在りては然らず。全く盛唐を以て準とし、敢て對律の末
にのみ拘々たらず。力を長篇に用ひ、其五古は太白を規撫して能く其輪廓を得、其七古は少陵を學ん
で能く其氣息を得たり。七律の如きも少陵に近し。蓋し其の性格の相似、乃ち然るを得たるもの歟、
而して終に一篇の純偈語とすべき者なく、些の筍蔬の氣を留めざる也。

先づ五古にては、

和祖東傳二首

幽々岩石下、獨耕餐秋葩、曷云谷口真、浮名函風沙、長安驕兒輩、醜敵徒自誇、西方有美人、德音遠嘆嗟、想立東籬下、三嘯采其花、悠然望無窮、遽爾生有涯、

遠々天一方、行々窮微茫、夢殘孤枕冷、寒蟾照屋梁、幕府羅猛士、可以守四方、念彼秋胡妻、采々陌上桑、寸丹千年碧、梧桐待鸞鳳、悠哉又悠哉、我壤白眉長

太自古風の趣あり。

擬古三首錄二

浩々却來風、風塵飛蓬々、天上日色薄、人間是非隆、螻蟻逐臭穢、鳳凰棲梧桐、獨有方外士、俛仰白雲中、

天上何所有、仰看色蒼々、兩輪於其中、驅逐相繼光、星宿雜經緯、縱橫燦然張、下土地不平、風惡塵飛揚、人生如夢幻、凡百應無常、愛別怨憎苦、日夜焦中腸、何嘗乘雲去、飄然入帝鄉、

二首亦古風、前編特に適上、

古意

一片春空雲、藹々天成文、數竿風前竹、憂々自然曲、々兮不入俚入耳、文也不爲時俗喜、春雲乃消竹風乃止、斐然競作咬哇起、世間得喪猶循環、大雅豈可止而已、

筆を就けて空靈活潑なり。

題畫二首與原楚錄一

野雉傍野竹、雌雄相追逐、牽情七十翁、孤臥悲幽獨、幽獨誰家子、琴操有牧犢、因憶柳々州、石門禪榻宿、

題竹堂行卷

竹裡開竹屋、汎覽竹堂錄、長吟引清風、吹我屋外竹、萬竿一時搖、琳琅勝金玉、掩卷爲三歎、孰敢弗歆服、

夜起求火

秋風吼林垌、秋蟲泣沙庭、遠近秋聲併、入枕雨冷々、得句書無燈、覓照四隣局、火刀鈍且澁、百打無一星、癡童眠重稔、憂々或夢聽、驚起蒼頭僕、扇最致丁寧、一聲石火迸、灰紙著流螢、硫點微明發、耽々照窻櫺、爨餘爐邊撥、裂破瑣碎零、投燒附熨炭、暗室向臙吟、老眼勝對月、可讀細字經、卽燭磨玄玉、揮毫手不停、詩成人不見、字々徒然馨、降俚丁七嫁、頗自惜嫂娉、

贈珣白石

兄自江南來、弟欲江南往、相逢宮崎西、共聽萬松響、想像泛鯨濤、飄然入滄溟、兄也爲客久、心孤

憶宗黨、此會良慰情、五弟况惆儻、相引坐山堂、清風拂書幌、慙慙問故鄉、山川若指掌、舊友皆零落、風景不同曩、獨喜白雲師、雲深得涵養、吾每逢人言、所聞轉愉悅、祇今因弟語、爬著多年癢、日晚將登舟、告訣心惘々、別離固是惜、遊方亦宜獎、

和答東白

海國風揚沙、幽尋欲移居、粉陰情已曠、鷗社懷未虛、弘道在斯人、毋復思其餘、君方與吾期、伴間修舊書、從此不他適、園圃既自鋤、冉々春強半、盤薦會種蔬、使我霞孤映、林壑意何如、扁輓對青史、師古心聊舒、衡門澹下出、隘菴隔車輿、雖容問字客、庭禁鳴佩琚、幽蘭不見芳、內美伶三閭、寧可化爲碧、暮景唯華予、設使長不死、肯爲竊藥儲、君誠存厚義、中心以詩據、形迹任胡越、大道混戚疏、育德志果行、龍臥假草廬、成敗惟天命、宜守道所於、不見陰陽氣、有吸復有嘘、吾輩機知淺、善詐何及狙、置之勿復言、水到自成渠、

和儀則堂韻謝珠荆山諸兄見留

吾才應無用、世情嫌不羈、比來立太嫩、天性惟由之、落魄隱窮巷、從容交卑微、尙口焉攸用、乃爲時輩疑、門無長者車、免捩百結衣、憶昔頗好事、稽書且賦詩、乃以爲瑣細、問道旁求師、闔南託海賈、適涉滄溟瀾、颶風揚巨浪、萬丈雪山巖、燒紙醉天吳、擊鉦脅怒螭、風定海心清、衆寶交

珍奇、方諸與珊瑚、闢光奪元筭、夜色混天水、身苦居瑤瑤、舟子歎乃歇、客有洞簫吹、始作嗚々聲、滿坐皆無怡、漸有容與態、聽者同舒眉、或復羅尊俎、宴久酒味漓、或設詩文筵、競出囊中錐、海賈五百衆、各縱其天資、獨予闔幽僻、固守無人窺、將過白水洋、暮到耽羅垂、舉手揖尊者、相望隔滌漪、緬想徐生舶、滿載童卯兒、蓬萊在何許、采芝食其黓、回首顧三韓、山勢張差池、敢近九龍潭、遠拒渦漩危、桂林護流求、遼水索高麗、轆轤萬里間、一目視平波、訂泊昌國東、珠玉走相追、時予辭海賈、抽身往南嶽、誓言得道後、歸國化庶黎、海賈感斯言、自欺吾何卑、江南叢席概、布星又分碁、禪悅參未飽、一頓思蒿枝、足迹半天下、中年神已罷、一朝取鏡照、勿驚鬢毛稀、只可據深林、擁葉煨蹲鴟、今春出楚徼、再遊湖水湄、久聞金華地、風俗淳應嘻、振策來靈源、一見如故知、淙々玉磬流、青々祇樹圍、修竹琅并色、寒梅冰雪肌、良明寧易得、庶乎從爾思、物我俱相忘、引得幽禽儀、勝境不忍去、人情難別離、無奈田園燕、胡爲乎不歸、况復粉陰人、勸我多云爲、獨因諸君厚、且緩吾行時、吾行時不拘、所欲還便宜、雨餘穀江滿、一舸輕如飛、七古にては、

謝物外惠青瓷香爐并序略

寶瓷精緻何處來、括蒼所產良可愛、滑潤生光與玉伴、青鐘峙立厭鼎鼐、卦文旋轉觀有倫、檀片吐

香煙瀟々、粟散王國苦亂離、十年不見通貨賣、江南之物皆價翔、陶器况最難運載、藤陰窮僻人不來、來者莫非世所廢、柴門剝啄異常聞、側耳俄然驚警咳、闔窗見之是故人、倉皇迎迓衣扞帶、未叙寒暄先咲言、南屏到眼橫翠黛、決語殷勤留珍貺、物意兼重難爲載、木瓜猶足報瑤瑤、我此情懷孰可奈

多少の疵癢なきにあらざるも、南屏の一語の如き少陵の口にあらずんば出だす能はざる所也。

春 雪

辛巳二月二十五、相陽大雪深五尺、初開郭索步窻前、俄驚樹杪風浙瀝、浙瀝轉作碎泝聲、百千雷霆闐相擊、開窓眯目萬斛灰、急掩扉頃便堆席、去年栽竹忽遭摧、林木挫折何足惜、鎌倉城在海東南、古老皆言未嘗觀、且如今年元日來、天弄陰機非旦夕、陌上泥濘沒牛尻、故舊訪我難爲履、北客見慣能憑陵、土人縮頭不便僻、咫尺鄰里少相過、百賈晝眠絕交易、富門御冬蓄有餘、机租羅張厭肺腊、銷金帳裡那知寒、淺斟低唱情自適、窮家數日突無煙、羸臥陋巷同窳窳、諸書萬卷徒撐腸、竟不能療朝饑怒、一束柴索價遼天、五合黃陳無處糶、或言雖晚瑞豐年、爲我未免按劍戟、少陵の暴風歌に比すべし。

遊武夷山

群峰簇々沒煙靄、天柱獨拔青天外、手援鐵索登雲梯、眼眩股戰心將退、仙翁縱臆上上頭、別有世界窮深幽、下視下方如按圖、九曲縞帶清溪流、天下洞天三十六、何緣縮在我雙目、白石鑿々草菲々、物々無不仙種族、向使秦皇曾一來、徐生不可尋蓬萊、吾家萬里青海外、到此鄉念消如灰、是れ李白を擬せるもの。

寄 東 白

椅桐寄生十仞嶽、處身孤危遠鳥雀、々々適爲鶴所遂、暫時來投欣有托、幽谷積陰長帶秋、風吹寒藤響索々、自然勢不雀輩便、莫言椅桐難棲泊、久矣傾枝欲待誰、世間無復見鸞鷲、

和答明岩

深愧不才名過實、行藏動輒事多妨、轟雷瓦缶器遭重、注水含瓶筍忌長、春淺千山猶雪霰、凍嚴萬木抑芬芳、囚身羨里未爲患、別足荆山豈復傷、苦放寒梅一枝出、會看嫩桂二株昌、學書北海拙成死、避世東方枉入場、欲伴鸞鳳待時出、慵隨燕雀逐風翔、紛然衆目更難理、憑仗宗師力整綱、五律には、

禪袍薰御香、演法事非常、賢相奉天命、老師觀國光、向罹夷貉猾、多見猗葵狂、聖德俄休復、擢登龍阜堂、(定亂之後 朝廷清明極和尚住瑞龍、召見次、藤丞相問道、師偈以答、江湖依韻相賀予亦隨衆)

力餘りて溢る。

高嶺樹枝搖、天風拂況寥、新霜侵曉冷、素月傾秋饒、野外宜綿叢、人間多振苗、仗君臨六轡、駿驥亦能調（和荅方崖）

晨興把短筇、來問石羊蹤、日出金門啓、雲開紫閣重、青天飛白鷗、黑水闔蒼龍、蓮社憑誰約、駕言從赤松（遊赤松官）

歲晚天寒處、風清月白時、長吟乘逸興、獨坐歎幽姿、世事那堪說、人生自有涯、目前如可遣、身後不須期（歲晚）

斷じて僧家の詩にあらず。

藹々春雲細、朧々曉月微、晨興何所適、晚節更疇依、忽覺去留錯、堪嗟力命違、隨時消宿闕、觸事悔前非（早起）

七律にては、

世運醍醐五百春、忻逢聖德有賢臣、龍盤虎踞基依舊、鳳舞鸞翔儀轉新、寂々庭中無獄者、潭々府內聚文人、古來獻替忠良事、豈棄蒼生辭逆鱗、（寄前大理藤納言）

是れ補張全く少陵の精隨を得たるものなり。

人物類遷地未磨、六朝咸破有山河、金華舊址商漁宅、玉樹殘聲推牧歌、列壑雲連常帶雨、大江風定向生波、當年佳麗今何在、遠客蒼茫感慨多、（金陵懷古）

絕海の殘塘懷古、此に類す。
崎嶇跋涉侍師行、况復炎天氣似蒸、重嶺馬驕猶阻遠、平湖槩蕩更清澄、鷄鳴不破關牢鎖、霧罩伊吹嶺勢增、京洛催君歸歎興、風流豈可伴村僧（送紹侍者之龍門）

これ盛唐を擬して明七子の風を帯ぶるもの。
坡上青々松樹間、浩然之氣傲齊桓、好詩應是窮中得、玄義方宜靜處看、脫粟乏儲心自足、寒牀早起夢常殘、志高不肯嘗薑杏、蒙養功成最可觀（和東白）

邁廬天地寄浮世、早晚乘雲歸帝城、風起戰塵吹血臭、日因祿氣帶陰傾、斯文自古嘆將喪、吾道何時必正名、幻々修成心已灰、惟君厚荷不妄情（全）

滿目塵埃宜自賤、更須聾耳欲無聽、雷碩不管擺天地、鴻洞何妨混渭涇、試看高飛千丈絮、竟成飄蕩半池萍、燈窓夜々惟容影、罔雨同來爲吊形（和九峰）

荒城草木不生光、第宅都成瓦礫場、金谷應無花一樹、隋隄空有柳千行、經過繚繞深林塢、來見卽當古殿堂、上利風規猶未墜、地寒僧少似汾陽（和禪興全提韻）

天晴海面渺無窮、俄傾雲雷鼓黑風、陵谷松枯并石老、林巒霧捲又煙籠、萬家結構七鄉滿、百載經營一日空、自古英雄難久業、霸心休効晉文公鎌倉府官七郷（和實翁相陽懷古）

夕陽慘淡古城秋、松檉風高暗送愁、憶昔威雄嚴虎豹、見今黧黑類猿猴、誰將蔚々蒿萊地、來換紛紛絲管樓、舊觀唯餘山內寺、長廊無事有僧遊（和韻相城懷古）

客去藤陰轉寂寥、倚門供望到山椒、寒鴉色引碧雲合、初月影隨紅霧消、海送南風行夏令、天將陰雨怒春潮、居間獨喜於詩律、細著工夫楮葉雕（藤谷春日二首）

麻衣糲飯淡黃齋、不出衡門學虎溪、講易論詩隨分有、高名令望豈思齊、晚蘭將茂力除草、庭菊欲苗停杖藜、動爲舊交情未絕、著書何日得如嵇、

中宵夢破響浪々、應是巖根湧熱湯、笈々分泉煙繞屋、家々具浴各賒房、海涯地暖冬無雪、山路天寒曉踏霜、遠喚澄濛雲霧黑、江湖送月落微茫（熱海）

老來眇世惡浮夸、尙自隨時愛物華、取性應前開小沼、拳頭方外望無涯、逐風蛺蝶迷芳草、得所蜻蜒倚花、若在斯中甘冷淡、便能安住法王家（漫成）

道不虛行行有時、旁流大化塞坤維、龍淵餘滴九淵水、佛國真宗一國師、脚下變成獅子窟、棒頭敲出鳳凰兒、檀林舊業臨川寺、五百年來再築基（寄夢窓國師）

七律中の佳句、

停車麥浪瓏頭立、倒屣菜花籬外迎（謝竺仙和尚訪）

鍼起清羸復剛健、惟天未墜燦然文（和虎關和尚病中韻）

衆醉難容屈原醒、道鴻惟見孟軻淳（和東白韻寄藤刑部）

南家克有廟堂器、東白頗全滄海珠（同右）

黃葉隨風庭拂去、白雲無雨嶺埋平（偶作）

咫尺而居何楚々、乾坤之內一陰陽（謝巖書記送菓子）

絶句五言にては、

登高徒故事、泛海最清遊、爽釣謝黃菊、忘機狎白鷗（九日渡海）

六言にては、

利根山行春六言四首

陰涯或有殘雪、春溪半帶流澌、風日乍寒乍暖、杖履且留且之
白雲溶々洩々、流水潺々浚々、乘興行春未盡、胡爲倦鳥先還
枯藤屈曲蟲盤、怪石爛熳獸躡、拒陽雪積巖罅、搖綠春回燒痕

山深風俗淳朴、民樂無懷之時、溪梅別有風韻、野質村姿更奇

七絶にては、

芳草叢兮嘉樹林、慶雲羅織錦花深、燕泥不敢汚簾幙、合著禪僧坐月陰（追和礪陰翁錦亭）

幽蘭厄雪未全開、先讓春風友野梅、梅下水仙著花否、新詩撩發好相催（寄妙喜）

寒雲忽起洞門中、落日春春烟外峰、城郭與人共非是、千年鶴宿寺前松（和別源韵五首）

夢覺樓頭四鼓鳴、斜々殘月半窓明、楮衾如鉄不堪攤、忍聽山風卷葉聲

日月蹉跎時屢遷、幾回嗟嘆思悠然、何如放下諸緣了、獨向雲林深處眠

窮途不見憐鹽馬、俗眼祇應愛畫龍、拊石今難臻百獸、且隨兒輩賦彫蟲

海氣濛々抹淡煙、矐矐月色似春天、推篷不怕霜風冷、望到青松白石邊（甲申夜在守江和韵別源）

曲岸曲廊隨地宜、輕舟蕩槳泛漚漪、朱櫻似街新來客、故使稠花一旦披（春遊西芳寺）

東望故鄉青海遠、十春間却舊園花、可憐蝶夢無憑仗、飛遍江山不到家（思鄉）

十歲重來鯨背遊、青山疊々思悠悠、仙宮不管興亡事、檻外滄波白鳥浮（龜山）

漁家八九依青石、佛屋三間帶翠嵐、箕踞松陰舒一嘯、天風吹海水接藍

楸梧風冷海城秋、燹火煙消灰未收、遊妓不知亡國事、聲々奏曲泛蘭舟（輛津）

溟濛海氣帶春陰、何似瘴煙蠻霧深、困眠嫩開頭暈重、半醒半醉擁寒衾（藤谷書懷五首）

二月已破三月來、少陵人去沒全才、春風不管風騷變、李白桃紅屬別裁（三月旦聽童吟杜句有感）

臨危獨念故交顧、何處世途非履水、只得胸中無我愛、不干身外有人憎（藤陰雜興十二首）

問花野草亦朝人、余獨何心思混塵、小子更休勤學我、誤來四十六年身（全）

蒼々莫々太無端、未爲人間掃佞姦、草木休言沒情思、看來又有許多般（全）

月白風清秋滿懷、間房僻處小門開、吟哦倚檻三更過、此夕情人來不來（全）

世事隆衰自有時、山河是矣但人非、戰骨未收邊成起、鉄衣早晚復儒衣（惜陰偶作四首之一）

吾聞鷓鴣不踰濟、何緣飛到海之東、摩挲病眼望匡石、坐我江南煙雨中（題橫幅）

風吹雲雨入陽臺、惱得襄王亦怪哉、莫使晝眠等閑熟、引他神女夢蒸來（雨中戒晝寢）

門前楊柳半藏鴉、塔下櫻桃未落花、爲問春風無限意、從今老去屬誰家（春興）

嵐霧壓花朵々垂、山顛斑白鬢絲稀、半江月淡水如鏡、照見衰顏羞欲歸（遊度月橋看嵐山花）

世上人心攢劔危、故鄉書信向來稀、平生膽氣粗豪甚、老去方知萬事非（有客出扇請書）

綠陰深護似無家、傍岸歸帆轉柁牙、蘆葦風清消靄霧、相江日暮望金華（題扇面）

引水淘沙志在金、衆鉦嘈雜少知音、幾宵風雨同牀語、也未能傾一片心

黃牛肥健短轅輕、葛袂風清臥月明、行盡柳陰三十里、通州城外聽鷄鳴（通州蚤行）
通州蚤行の詩に就き靈隱の玄理なる者評言あり。左に載す。

至順庚午中秋前五日、拜于東庵之挹翠樓、玄理曩於前朝至元庚辰歲、先師東陽大和尚進謝清規表至
金陵舟中言朝京有日本月中巖書記在百丈、我會中辨事、其人聽辯過人、携之偕行、所至有題、夸美佳
作多、今紙記得通州蚤行一詩云（詩畧）後開開化大刹、師門不至寂寥、茲因開溪上人回朝便、敬
借前韵述二首奉呈、聊信弟兄拳々嚮慕之意云、前住靈隱法弟比丘玄理載拜、洪武乙卯九月
其詩一首を左に録せん。

鯨濤來徃片帆輕、慧日高懸海國明、消息遙傳天上使、關河雪盡雁初鳴

第六節 文

中岩の文、則を唐に取り、体格未だ緊縮ならずと雖も、態度洋々清趣雅致に富む。正に虎關と義堂
の間に在り、其上梁文の如きは極力六朝を摸せし者にして、佳句麗語多しと雖も、固と其本色にはあ
らず。其の祭文の如きに至りては、最も彼の長ずる所にして筆到り情到り韓子李密其美を專にするこ
と能はざる者あり。其の論説の如きは儒者の經説に類し、其疏文の如きは純清に近く、必ずしも佛理
を通ぜんとするものと異なれり。

百丈法堂上梁文 上有師表闕

異則絡無則禽、一部清規、三代禮樂、往者興、來者繼、百丈法席、四海龍象、要看真正拳揚、更須
斬新作畧、上方主人、炳若之德、丹青猶嫌久而有渝、溫然之姿、玉璧全類廉而不劂、躬工人績、內謀
外成、來董精藍之明年、屢營幹楨以愛日、撤去此堂弊、馴致其棟隆、層以飛閣流丹、冠于雄峰絕勝、結
綺臨春遜壯麗、太形王屋輪巍峩、地屬洪都、訪風恰同滕王之作、梯升雲漢望世界、豈侍張鷟之槎、手
摘星辰肩過日月、天下師表、十八世而中興、上方靈蹤、五百載之餘烈、當作師子吼於師子座上、宜
脫野狐身於野狐窟中、爰拳修梁、輒唱短頌、兒郎偉拋梁東、迦葉峰高插太空、雨霽煙消風景好、
烏輪發彩著圓穹、兒郎偉拋梁南、仙花旗錦水按藍、渾無俗駕到靈境、八面車輪鑽翠嵐、兒郎偉拋
梁西、雄嶺衝雲天宇低、曉起那伽乘月立、斷腸霜狃一聲啼、兒郎偉拋梁北、天柱高兮地勢極、倬
彼昭回如可承、山河在掌生顏色、兒郎偉拋梁上、唐朝古刹人咸仰、梵音依釣白雲中、鬼護神呵來
盼蟹、兒郎偉拋梁下、風俗由來自爾雅、山冷桑麻長稍遲、水清花竹秀而野、上梁之後、伏願宗猷
與時偕行、綱要不墜、帝德致遠能化、基業長存、五氣相和、六民同利、

神山移蘭記

筑之香椎、環海皆山、山之斷爲衍而復起、突如獨峙者多々良也、其麓頽首、下飲諸江者神山也、其

間峩然冠山、翼然臨江者顯江寺也、是山也多有香草嘉樹、所謂香草者蘭蕙其半焉、而土人無有識而採之者、歲吹壬申夏、予自南粵而東海、纏疾息焉、明年春數爲家書所招、臨當促裝、而兵革塞途、故盤桓而止、每日觀望林園、按花艷之、竟夕而歸、以劾王右軍避亂蘭亭之故事也、一日天朗氣清、時携二三朋友、臨水登山、且行且吟、忽聞幽香清適、可愛可親、稍行數步終到參差之中、盛有紫莖赤節、而葩維淺碧者、猗々然滿々然、叢々相望、不可勝計、予欣然分將數叢、滋之寺之間地、磬石砌焉、課童灌焉、數日之後、夜雨滂沱、微曉而霽、早起視吾植、則青秀敷舒、花態豔冶、不減九畹百晦之景、然后土人之好事者、或謁而移之階除、若養之瓦缶、以朝夕愛親、甚者燒燭夜翫、惜其暫時與之相疏也、自昔以降、騷人文士、或以罪左遷者、或率性之遊者、或官吏茲邦者、詩若歌於此、固是取用彼宮崎松、西都梅、其他旁及瑣瑣之景致屑々之風物、亦與焉、獨斯秀質未見咏且稱、何哉、若也昔之未有焉而今乍有焉、則豈可得其盛多如此哉、蓋是凡物之潛乎昔而見乎今者、其爲人所咏且稱、各自有時也、雖然是蘭也、不可有心於潛見、故母以埃也、是故雖久蕪沒蕭艾之林、其態常自若也、所以人不知而不芳而已、故予爲記以尙俾來者知君子之遇不遇、皆有時、而無所埃云、

祭幻住中絕際

歲在戊辰燒燈之前吾辭絕際、々々感然送吾過橋、雪顯照川臨別區々、不忍惜々、日月蹉跎于茲四

年、重來長洲、水滿春田、故徑相移、新柳罩煙、入門問主、主已逝焉、恍爾升堂、哀章累篇、白骨粲々、紅淚連々、金芽露嫩煮清泉、靈也照兮、曷不享旃、

祭母 代虔九峰

嗚呼哀哉、何毒如之、尋師訪道、義斷情忘者、吾釋氏之道也、然兒自幼爲僧、而未遊大方、且於道未有聞、以斯爲恨焉、是歲夏四月適以見不請之友、許兒以親炙、兒私意以爲善人也、必獲所成矣、且以恐有爲他人所障所謀不成、故不告母而往、然彼長者以應佗緣、故未能違志、且隱在深僻、以侍長者間暇耳、於是五月十六日忽聞母訃、兒心愴焉、然疑之不信、然以謂吾母未老、其可至斯乎、無乃欲障吾道者以其非真而傳之耶、不然則兒也比來氣力疲憊故見如此凶夢耶、宜不可信然也、亦再思之、人生不謀常、豈可決不信然、思之時心又愴焉、悅焉、若有求而不得者也、又思、設使不信然、聞母喪可不奔乎、是日已晡、不以夜行、此夜眼不交睫、既曉也、星未稀時、蒼忙而趨來入門而不見母、嗚呼哀哉、心悶々焉、上堂又不見也、嗚呼哀哉、母也亡矣、信然也、非不真而傳之也、亦非夢也、亡也、信矣、不可復見也矣、嗚呼天也、教兒預知應有如此之毒、兒也、當効不敢離也、而況於不告而走乎、且聞之、母臥病日切々念兒而言、吾兒今居何許、於吾何慊之有、不教吾知而去也、或云母病爲之增劇、以至大故、嗚呼哀哉、今言是語、腸熱如火、覆載之中、豈有斯

之痛哉、兒今反思、當初以爲善友者、將非魔作此人、賺兒令坐不孝之罪耶、兒也有激、故有此言、置之勿復言、向來不能節哀、稽遲祭禮、今此表儀、亦不能作文、直述所意而有窮、意不可極、嗚呼哀哉、靈也知否、若有知之、必來歆止、無窮之意、神而鑑止、若無有知、如吾意何、嗚呼哀哉、

江湖勸請不聞住清見寺疏

山環滄溟、鐘落波瀾、想彼勝地於東南、宜稱第一、胸吞雲夢、眼眇吳楚、若此英標在江湖亦爲無雙、人境合符、天龍推穀、共惟某人洞水正脈、武庫全才、志操貞清、鐵肝石腸、雪車冰柱、文藻華密、錦心綉口、玉錦金鍼、參諸光也、皆遭眸子青、歸乃師則知乎殷辣、草木有誰同臭味、應憶隰州梅州爲知音、山川伴我共優遊、孰訝欽山雪山異法嗣、爲投瓜瓞瓊之好、交擔箠跨馬之盟、

第六章 鐵舟

第一節 傳記

雪村より稍や後輩にして畧げ中岩寂室等と同時代のものに鐵舟あり。名は德濟、鐵舟は其字、別に百拙と號す。下野の人、嘗て元に入り諸師に謁す。順宗帝其道義を崇んで特に圓通大師の號を賜ふ。歸りて無極志に天龍に依り後版に居る。尋いで法を阿州の寶陀院に開きて正覺夢窓に承嗣し、後京兆の

萬壽に移る。僉侶集會す。住職一歲にして西山の龍光院に退休す。艸書に妙にして隻字片牋も得る者寶となす。生死の年月皆詳ならず。空谷の萬壽鐵舟和尚贊に曰く、平分古鳳臺中月。奪得天龍領下珠。拈瓣香於補陀。明示懷袍。祝壽萬壽於天衢。大神羅圖。蚤游南國。遠離東隅。侍香遠社。屢遭古智呼喚。典藏開先。幸隨南楚步趨。草書傳懷素妙。詩律咲無本奴。晚歸桑梓。大會江湖。發雷霆音。震驚幽塾。作師子吼。辟易群狐。一朝戔化。萬柄迷塗。涅槃後有大人相。落々龍光射斗樞。

閻浮集中に悼雪村和尚、寒夜即事春屋首座韻、次此山和尚韻送輪上人、送茶石室和尚、寄桐谷愚仲書記、次天龍放牛韻送泰侍者行、酬印昌桂岩西堂韻有吳楚同游此一翁。三千里外又相逢之語。寄三會龍湫和上、寄永源寂室和尚、寄中巖和尚再住建仁、清溪首座韻等諸題の詩偈あり、以て鐵舟交友の及ぶ所を見るべし。

第二節 著述及び詞藻

鐵舟の述作は閻浮集即ち是なり。正徳元年の活字本あり。續羣書類從文筆部及五山文學全集第二輯俱に之を收む。東陵永瑛禪師跋に書して曰く、其文燦然如夜光結緣、不覺使人心目開明、可以垂裕後昆、可以點映千古、他日必有具眼者、同此證明と。然るに集中唯詩偈の類のみありて他の文章なし。其詩特に奇構の見るべきなきも、能く圓成熟達して後代作者の徃徃瑕玼あるを致すが如きに至らざるなり。今左に若干首を抄出せん。

先づ其の七絶にては、

山挾溪流聲濤々。一條略杓臥平波。冰輪影落曉霜上。人自廣寒宮裡過。

度月橋

臘月正當二十八。靄然和氣一時新。黃牛背上牧童笛。吹起人間萬古春。

熙藏主立春韻

欲居岩谷送殘年。世事紛々在目前。爭似靈龜峰下寺。看山看水看雲眠。

偶作寄春屋首座

黃花有意兩番香。白首自羞居洛陽。籬落晚風秋已老。對山無語座柴床。

重陽韻

萬里鯨波一念間。故人又向故鄉還。佗時若又化龍去。只在國師門裡看。

寄侍者韻

月照千峰明似畫。金聲落枕故人吟。衲衣不怕霜威重。起捲疎簾坐夜深。

寒夜寄適庵首座

十年不見異鄉秋。夢到江南第幾州。鞋杖未忘吳楚路。懶將白髮老山丘。

勝庵藏司韻(二首)

閱盡家山四載秋。歸心多在古杭州。天荒地老無人識。西子湖邊一比丘。

同前

雨餘西岫翠成堆。困枕高眠絕點埃。黃鳥喚驚南國夢。一雙睡眼對山開。

靈江山居韻(十首)

老杉古檜策紅霞。盤石垂蘿小徑斜。猿鶴不來山寂寞。風吹桂子滿茆家。

山居(十首)

萬法由來只一源。更將何事入吟魂。挈衣欲澀小溪上。山帶斜陽岳影昏。

同前

把茅深住亂雲間。茗鼎竹床終日閑。地老天荒青眼少。開窓遙禮瑞龍山。

寄東陵和上(四首)

庭梅一樹影橫斜。况是深山道者家。積雪千尋埋不死。枝頭新見兩三花。

庭梅(二首)

吳山楚水再難遊。兩地更無渡海舟。寄語風凰臺上客。天寒歲晚有愁不。

寄石室和尚(二首)

老木怪巖抱梵宮。一泓水自嶮崖通。高談恐觸清波上。驚起碧潭深處龍。

濃州明白庵五境。

蟠龍池

七言八句にては、

龜背千年負梵宮。嵯峨樓殿勢凌空。天兼月影落潭底。風帶鐘聲過嶺東。山鹿听經眠徑草。野僧觀

瀑倚庭松。長橋西去人如織。幽谷禪房有路通。 偶題天龍寺

滿目秋風落葉多。山中寂寞竟如何。一軒松結歲寒友。千里月明安樂窩。向日未融頭上雪。烹茶頻

退睡中魔。當年慣踏六橋路。獨對嵐山笑又歌。 秋日寄勝庵藏主

林下相逢話十年。驚人咳唾響琅然。秋風雁叫碧雲晚。夜雨龍嘘翠竇天。衲摺煙痕眠未就。爐燒山

色興無邊。肩輿明日凌雲去。爭奈山中一宿緣。 春屋首座韻(二首)

道人用處自風流。釣月耕雲護一丘。冷座松根空翠濕。清游巖下暮鐘幽。滿塔黃葉已無夢。幾夜青

燈自照愁。去此西芳精舍遠。白頭遙憶舊時秋。 秋日懷古韻

海山孤僻見人稀。爲有舊交來扣扉。一榻高眠諸鳥列。雙瞳遠送片帆飛。獸爐煙絕僧猶定。鷺渚潮

生漁獨歸。千里封疆難畫出。風前長憶謝玄暉。 題指月庵

山深地僻少羈塵。莫咲野窓猿鶴隣。帝土游軍芳草上。巖中古寺落梅春。白雲無定猶過岫。黃鳥有心似駐人。游子欲行偏惜別。後期難計病中身。璞侍者韻

鳥兔奔馳急似流。靈區勝境更須游。泛杯越漠三千里。飛錫穿雲四百州。吳苑春來同故國。楚山雪霽上高樓。巍々萬仞龍門在。興盡天涯歸即休。送儀禪人赴太元

圓通應現有靈蹤。檜栢松杉指點中。泉下千峰岩背雨。霜寒六月屋頭風。金文未絕咒聲在。玉輦已歸王氣空。回首偶然看白髮。更疑有個煉丹翁。題菅生寺(二首)

截斷利名三尺繩。何年來此寄烏藤。浮嵐積翠半間屋。枯木寒灰一個僧。野狷晝臨岩罅水。山精夜點壁巴燈。如斯座到無心地。菩薩聲聞是汝朋。訪行禪人山居

白髮野僧忘所思。小亭獨倚與誰期。蛩鳴莎砌知秋老。人絕巖房覺地卑。風卷浮雲過遠嶂。天兼明月落清池。茗杯香閣東林寺。座對爐峰正此時。分清亭秋晚

五言八句にては、

絶頂嶮如棧。捫蘿終日登。昔時飛鉢客。今日把茅僧。眼底水千里。脚頭山萬層。嗒然盤礴晚。猿

子掛垂藤。登飛鉢巖

石耳最高寒。峩々路幾盤。林凌飛鳥外。雲聚亂山間。矯首覺天近。凝眸知海寬。老來脚無力。此

地亦難攀。題名耳峰

屋掛蒼崖腹。獨來百念輕。嵐雲如海遠。松籟似濤聲。竹影與僧伴。月痕入幌清。攜杖又分去。山

前雨欲晴。倪書記韻

別に長歌二篇あり、今左の一篇を取る。

牧石歌

老夫勝游赤松間。嵐氣靄然皆是山。地拆天分路百轉。溪水索絡響潺湲。老樹倒生猿猱叫。巖崖崩豁毛髮寒。稍拂煙霏渡雙澗。陰岳有雪夕陽殘。海上九華曾不見。還疑行列武陵關。黃昏听鐘知有寺。朱甍隱映雪盤々。逢僧教我見太守。枕々廣厦多衣冠。太守立言包元化。胸吞八極宇宙寬。平生所藏好奇古。蜀士墨竹劍池蘭。庭柯滿眼石如玉。拔俗千丈誰可攀。親戚在傍來穰々。篋兮墳兮詠鳳鸞。誰謂太守憂國者。擁護宗乘志無端。太守生活如僧舍。寅起焚香禮佛顏。禪悅爲食法爲性。五昇之味豈可凜。此地若是白蓮社。十八高賢當作觀。我也久結方外友。杖履年々不相慳。如今天道明如鏡。爲問祿位長平安。

第七章 天 境

第一節 傳 記

吉野朝期の末より室町期の首に接する間に一超然孤調の詩僧あり、此を天境と爲す。

天境名は灵致、姓氏を詳にせず、甲州の人なり。早歳より剃染して清拙に師事す。禪餘學を好んで博く群籍を綜べ、文雅を以て名を知らる。諸山に徧遊して要職に歴任し、衆に建仁に首たり。康永三年出でて、肥の鳳翔山淨土寺に住す。閑中即事の詩あり。曰く、茅簷人不到。物外寄幽懷。乞得隣庵米。炊成午鼎齋。二三升筧水。一兩東山柴。淡處知真味。吾生亦有涯。(見無規)

貞和二年豊の蔣山萬壽寺に遷る。文和三年洛の萬壽を董し、延文五年建仁に遷る。貞治五年初夏南禪に陞る。應安元年播の法雲寺金華山に住す。六年冬天龍を董す。永和二年再び東山建仁に住す。四方の禪徒隨處雲聚す。晩に龍山の善住庵に退く。一日微疾あるを示す。乃ち自ら入壙の語を作る。復た辭世の偈を書して曰く、色身幻化。無在不在。以空塞空。以海添海。と奄然として化に就く。實に康曆三年十一月十八日なり。閱世八十有一高僧傳作九十一。今從日工空華兩集。勅して寶鑑圖明禪師と諡す。

義堂の日工集康曆三年十一月二十日の記に云ふ。或告天境和尚昨夕示寂と。又同月二十日の記に云

ふ、就于南禪善住庵吊天境。表遺偈曰。色身幻化云々見。廿二日の記に云ふ、善住庵清康藏主。送天境和尚遺書。并遺物新刊科註法華經十二冊者來。余立地接以三轉語。問答罷。乃接遺書。炷香捧書示衆曰。世尊涅槃示雙趺。善住涅槃手寫遺書。且問諸人世尊底是善住底是。是不是不免下註脚去也。法身不動屹如山。善住何嘗入涅槃。試把遺書和泪讀。萎花颯々晚風寒。天境諱靈致。甲州人。嗣澄清拙。享年八十一。余在東山時之舊交。性喜聯句。故雖臥病。亦與客聯句。蓋近世僧中本色宗師也。天境の無規矩集に和東陵和尚韻謝義堂書記來訪二首の偈あり曰く、茅屋柴門老病身。幸然今見舊時人。由來同道同心句。彼此多生植勝因。曰く淵才雅思毫端身。霽月光風物表人。佇看優曇花現瑞。四方雲水結洪因と。又た謝建仁義堂和尚來訪の詩及序あり曰く、余一庵養疾。與世絕交。適蒙建仁和尚寶駕賁臨。速掃南軒。清談移晷。忽忘死之將至。不勝懽忻。漫述荒唐之言。以謝來意之重。俯賜斤削。惟其庶幾焉。占得菟裘地。病身得溢然。高禪臨陋室。靜話慰華顛。未死相逢處。平生久要堅。麤香伸薄禮。爐起一絲烟と。義堂乃ち次韻上善住天境和尚二首の作あり。空華集卷六に見ゆ。曰く、老人年八十。邀我笑訢然。話舊春如夢。扶衰喜欲顛。秋風心益壯。暮景節彌堅。載并新華偈。三薰古栢煙。曰く、示疾元非病。寒灰豈弗然。詩嘲窮島瘦。筆笑醉張顛。鷓鴣秋逾聳。鷓鴣晚更堅。昨陪禪榻畔。留客看茶煙と。是れ以て其生前の交を知るべきなり。天境齡中岩より少きこと一歳、中岩に晩ること六年に

して寂す。時に義堂年五十七なり。無規矩集中又た禪居翁、拙虛堂、此山、石室、別源、竺仙、古鏡、東陵、龍湫、春屋、太清、相山等諸人と和韵應酬の詩偈あり。其外玄惠講書を悼むの詩、二條關白の池に題する詩の如きは、以て其史傳を補ふべし。

第二節 著述及び詞藻

無規矩集一書は蓋し義堂の所謂遺書にして、今史料編纂掛所藏寫本四卷四冊は原と修史局に在りて南禪寺聽松院藏本を傳寫せしものに係り、聽松院本は嘉永中法孫正漸の東山禪居庵藏本を謄寫せし者也。其卷一は淨土、兩萬壽、建仁、南禪、法雲、天龍の諸語錄、卷二は建仁語錄、小佛事、眞讚、自贊、卷三は前半は疏にして不遷、龍湫、太虛、無聞、大椿、大用、清溪、夢岩、九峰、芝巖、龍溪、玉崗、獨芳、椿庭、此山、器之、太清、春屋等住山の爲めに草せし者、後半は序說書跋祭文等にして雪村に寄するの書、默庵中岩此山等を祭るの文を收む。卷四前半は偈頌後半は詩集とす。偈頌百五六十首あり詩は僅かに百首内外なるも、全く筍蔬の氣を離れ、往々にして超脫清迥の佳句を見る。師贊の贊に云ふ、余嘗聞圓明禪師常喜風雅。雖坐病牀。與客聯句。今看無規矩。體製高格。遙離文字之性と。今先づ専ら其詩に就きて若干首を選錄すること下の如し。

天涯飄散跡。梗斷與萍浮。白露清風夜。空山古寺秋。遠看千里月。獨倚一層樓。四十年來夢。追

思暗結愁。 和安侍者秋夜感懷韵

自從携手出東郊。五見秋光滿樹梢。海角天涯清夜夢。風前月下舊時交。千林葉落霜侵榻。一屋燈殘雨打茅。眼底凄凉無伴侶。憑誰請益定推敲。 寄故人

邦如鼎足分。事若奕棋紛。道伴多潜跡。庸流恣結群。頻勞清夜夢。遠入異方雲。我有陳蕃榻。懸之久待君。 次懷遠友韵

閑房養病軀。逾月始能蘇。閉眼還開眼。今吾即故吾。雲收山色露。日上樹陰鋪。萬象皆森列。相邀足友于。 病餘偶題(二首)

萬境悠悠夢裡沈。桑榆末景忽焉侵。平生雪虐風饑苦。併入寒窓一夜心。 和滿侍者寒夜書懷韵

擾々于戈競殺傷。烏鳶飛下啄人腸。城中破壁塵空翳。火後遺基土轉黃。短晷頻催秋已晚。寒風稍動露爲霜。問居不用憂衣服。盡日南軒坐向陽。 丙子秣和序侍者嘆世韵(建武三年)

年來湖海梗萍蹤。寄在荒村破院中。野菜充虛胡亂過。鄉談慣聽自然通。龍峰路遠雲千里。鳳嶠霜寒竹一叢。寤寐相思情不盡。悠悠日夜水朝東。 肥州鳳山間懷寄南禪諸友

吾生萬幸得知音。道義深於海水深。相別以來無恙否。心隨曉夢去追尋。 送友侍者赴洛三首

君乘巨舶赴京都。遠水長夫興有餘。簾底夢回應今我。肥州小院竹邊居。 同 右

風度軒窓竹有聲。竹梢寒月夜清明。吟邊得句評無伴。默坐藤牀向五更。

同 右

扁舟抹過萬波堆。晚泊孤灣小嶼隈。日挂高峰金穀轉。潮圍斷岸雪山摧。長空雁影連雲去。遠寺鐘

聲渡水來。獨坐篷窗誰是友。初生片月上危桅。

晚泊

君航碧海赴京畿。我向空山掩竹扉。老去故交多遠別。閑邊瘦影獨相依。餘生再會真難得。尺素嘉

音亦可稀。南浦綠波斜日晚。風帆縹緲去如飛。

送友侍者之洛

胸懸五典與三墳。問難叢中慣解紛。今日祠堂風冷淡。簡編惟見舊香芸。

悼玄慧講書

多年伴寂寥。義槩薄雲霄。爲法忘軀士。離倫拔萃標。今晨分袂去。前路與雲遙。行脚好時節。千

山爽氣饒。

送廣禪人遊方

先踏巖根路。徐夕到碧層。雲深疑有雨。寺靜似無僧。塔樹千章矗。

爐烟一縷升。凭欄聊送目。遠景集眉稜。

留題清閑寺壁

靜院無來客。禪餘獨倚欄。階前楓葉亂。籬畔菊花殘。短晷須曳轉。新霜次第寒。今秋看又過。逝

水倒流難。

山寺秋晚

久客曾辭父母邦。荒村借宿對寒缸。中庭永夜芭蕉雨。半帶秋風入破窓。

旅夕雨

十里漁村一水潯。晚來天氣半晴陰。東家有兩人歸盡。西舍無雲日未沉。

江村片雨外二首(錄)

壺中清客笑舒顏。雪裡春回几席間。今夕與君吟未寐。似乘明月宿孤山。

友人座上題餅梅

綴枝金粟細交加。滿院秋香一樹花。花影照窓明月夜。月宮移在野僧家。

和松巖木犀韻

忠肝義膽鑄黃金。懶逐庸流入士林。占得雲中環堵堂。圓成歲晚燕居心。庭栽松菊并栽竹。牀有詩

書復有琴。盡把精神疏淪了。渾無外物可相侵。

留題秀雲居士養志齋

仁心洵涌化風饒。檻外清池湛不搖。只爲典刑無適莫。遊鱗宿羽亦逍遙。

二條關白開池號政平水

君今賦倦遊。秋晚欲歸休。兩手相攜話。中腸易結愁。曉行雲外嶺。夜泊月中舟。去報慈闈德。囊

無一物留。

次翔侍者韵贈僧歸寧

老去無朋故。秋來見獨芳。衣涵湘水碧。鞋染楚花香。再會因緣厚。清淡意味長。頃篋同一律。調

不墮宮商。

謝獨芳見訪

戰國山川擁虎賁。壘邊枯骨有刀痕。胡塵漸盡歸桑梓。昔日親朋半不存。

亂後還鄉

數點如星自發輝。隨風或復入人衣。閑僧素不看書冊。更向誰家案上飛。

熠 熠

功名蓋世佩玄蒼。道德馨香麝透囊。眼熟遺文追孔孟。言資至治復懷黃。芙蓉池澗秋萍合。翡翠簾

垂夜漏長。舊日仁風有餘裕。高堂燕雀引群狂。

次方嚴書記韻悼華山左幕下

管寧投老隱遼東。王粲思鄉辭鄴宮。上古諸賢逃亂世。後人千載仰清風。山房復有韜藏計。石壁渾

無藻繪工。月竹臨窓金鎖碎。雲峯入座玉瓊瓏。誰知馬足車塵外。樂在蓬門華戶中。爲謝隣庵同志友。時々冒嶮訪巖叢。和石友侍者訪庵居韻

閑中即事の詩あり。曰く、茅簷人不到。物外寄幽懷。乞得隣庵米。炊成午鼎齋。二三升覓水。一兩東山柴。淡處知真味。吾生亦有涯と。以て其冷淡の生活を見るべし。

又偈頌中にて靈妙なる者及警策となすべき者若干を抄出す。

渾崙一句鏡團圓。提起分明重似山。信手忽然輕放下。森羅萬象笑開顏。禪居室中垂問云十二

時中如何用心

元亨釋典契王公。有詔收歸大藏中。雙樹少林遷化後。諸賢聖出海門東。賀元亨釋書入藏

眉間寶劍七星文。正按傍提殺活分。方便多門無說說。森羅萬象不聞々。次石室和尚韻賀南禪

首座別源西堂三首(録)

見盡支那四百州。扶桑只似一拳浮。真參實詣傳來底。在海東爲般若舟。和禪居先師見日本山偈

吟倚扶桑日未斜。詩囊放下便歸家。天臺五百詩尊者。莞爾相邀步彩霞。悼懶牛融書記蘇州人

肅客簾前禮意饒。鏡船高駕入元朝。一雙眼帶東溟碧。更看錢塘八月潮。送知客之元

修心恰與牧牛同。牧到和純大有功。背上等閑騎得穩。鼻繩隨意步春風。養性

年來爲法自忘軀。破衲衣中有寶珠。今向九州城裡去。不妨拈出照昏衢。送瑞藏主歸鄉省師三

首(録)

歷徧諸方捧喝場。從前所得忽然忘。回來穩坐青山塢。問把烏藤靠舊房。罷參

枯株之質死灰心。拍笑謳歌發正音。賴有同聲相應底。溪邊石女笑吟々。木人

色潤神清玉混散。苔封已被綠衣包。溪邊織錦天機妙。暗把金梭自在拋。石女

和州野廟幾經春。士庶臨階祭享頻。平昔耿光蟾窟晚。晚年高操雪坡筠。萬機餘暇潛求道。一點靈

臺不染塵。大藏經王功德力。仙儀定馭畢連輪。次春屋和尚爲後醍醐天皇轉經韻

天境の文亦簡淨高潔左に其數篇を示す夢巖梅庭等傳中亦別引數疏文

雲林首座住清見山門疏

寺在山中。空翠隨風來几席。門臨海渚。寒潮送月到庭除。須擇當代宗工。以稱斯道盟主。偉哉此舉。出於至公。某端懇精明。瑰璋傑特。遊徧相陽洛下。扣列祖關。推得草宿露眠。了一心性。鑿開萬丈石壁。落成千礎紺園。行解純真。玉無玷金無鑿。道德充茂。水有源木有根。志存林丘。名達樞府。眉間寶劍。震九天之法雷。袖裏兜樓。祝一人之容算。

義空忠西堂住清見諸山疏

流水盈科而進。終能朝海起波濤。達人應世而遊。是故隨方顯蹤跡。有時孤峯頂上坐。或復三家村裡行。矧今公舉非常。當以度生爲念。某扁舟入大元國。烏藤扣列祖關。分半座於智者堂中。靈樹接韶石。東三篔於疊秀山下。禪居有阿戎。凡緇白樞衣何哉。乃人天推轂故也。正按旁提之令。廓爾過去心現在心未來心。單傳密付之功。併歸精進力禪定力智慧力。雷霆奮兮衆蟄齊啓。鳳凰鳴而群喙咸瘖。洛社同盟。相與製疏勸駕。法炬偏照。不勞鑿壁借光。

謝茶詩軸序

山中二月。殘雪未消。時余居廬養病。向爐借暖而已。故人少室。偶來道話之次。惠鷹瓜芽。便是今春之新焙。石鼎烹來。忽聽蒼蠅之聲於蚯蚓之竅。迨乎湯既老。茶亦熟。相對供啜。乃能潤枯腸。發輕汗。開勃眼。慰華顛。仍伸俚語。以謝恩意之厚。少室卽於席上和焉。諸大老諸名勝。競賜賡酬。遂成軸子了也。開而讀之。則錦章綉句。皆含晉唐之遺芳。可以興緇林之盛事耳。山谷有云。東坡嶺南文。讀之如清風自外來。今讀此詩。方覺春風浮動牙頰之間矣。無乃微言之緒絕而復讀者乎。

上雪村和尚書

某甲稽首拜稟。建仁堂上村翁老子大和尚侍兒。卽日季冬。天氣嚴凝。恭惟尊候動止萬福某甲不揣已分。

漫董村院。猶如驢驕負重。非力之所堪也。每恨日來爲業緣之所帶累。散走東西。不向和向爐鑪。而積鍛鍊之功。去夏以來。兩回辱接尊問。焚香拜讀。宛如在坐隅。親聆慈誨。想見東山草木。一經薰陶。精神十倍。海山阻隔。不能就學徒之列。延頸東望。伸拜而已。傳聞禪居徒弟。憑託恩庇。起居惟安。其海涵春養之惠。雖大鑑再生。無以加之。臨風不勝戀向之私。歲晚天寒。千萬爲法自珍。不倦槌拂。衲子有賴。勿々不宣。

祭鼈峯西堂

維貞治三年。歲次甲辰。八月初八日。鼈峯巨公西堂禪師。示寂於南禪單寮。越一日。法眷比丘某等。趨于閣維之後。具香茗庶羞。撥灰以告哀靈骨。曰。公昔壯年。入我師門。爲道孜孜。志氣厚敦。久侍坐隅。親承訓言。毛頭針竅。究明心源。中年踰漢。周遊異域。瞻風撥草。無有休息。能事已畢。回來本國。楚雲湘水。裹在衣襖。暮年高操。蘭在林中。德馨發越。群奔非同。秋風卷地。蘭枯林空。彼蒼蒼。蕤蔚爾成叢。直木被伐。良玉被毀。材之所害。自救無由。公視生死。附贅懸疣。隻履翻々。往而不留。我師滅後。二十餘朞。故家青氈。誰能護持。雲愁鶴原。露泣棗枝。蔬奠告誠。庶幾歆之。於戲哀哉。伏惟尚饗。

外紀

第一章 夢窓

内にしては圓爾、高峰の遺業を成就して虎關、嵩山等と對峙し、外にしては蘭溪、一山の緒餘を潤色して明極、清拙等と拮抗し、道義文學博として南北朝の一大觀を成し、會下の群英遂に室町の天地に相煥耀するを得たる者、夢窓其人に非ずして誰とか爲す。

第一節 傳記

夢窓名は疎石、勢州源氏の子、宇多天皇九世の裔孫なり。母嗣を求め觀音大士に禱り金色の光を吞むと夢みて娠み、十三月を歴て始めて生る。四歳にして母を喪し、九歳にして出家し、甲州平埴山の空阿法師に依る。試に群書を授くるに覽て輒ち記す。十八にして祝髮す。初名は智曜と曰ふ。南都の戒壇院に抵りて示觀律師に禮し、尋いで笈を負ひて顯密二教を學び、之を久しうして歎じて曰く、佛敎は義學の詣る所に非ずと。深く敎外の旨を慕ふ。一夕夢むらく、支那の疎山、石頭の二刹に遊ぶに一龐眉の僧あり、達磨の像を持して之に授けて曰く、爾善く奉持せよと、已に寤めて自ら謂へらく、

吾れ禪宗に於て因縁ありと。因て今の名に改む。洛に上り衣を易へて無隱範公に建仁に依り、椽下に兀坐して殆ど寢食を忘る。明年鎌倉に往いて無及詮・韋航然・桃溪悟・癡鈍性の諸群師に參す。皆法器を以て稱す。正安の初、一山建長に住し、窓を擧げて擇木寮に居らしむ。因つて諸家の語録を詢尋して日に慧解を増す。又奥州に適いて圓福寺に憩ふ。回りに復た一山に見え、去つて萬壽に住いて高峰に參す。又辭して常州の白庭に如いて茅を誅して居る。一夕坐すること久しくして起つて壁に靠らんと欲し、誤りて顛朴を喫し豁然大悟し、乃ち頌を作りて曰く、多年掘地覓青天、添得重々礙膺物、一夜暗中闖碌甌、等閑擊碎虛空骨と。亟に淨智に往いて高峰に呈す。峰實詣を勘驗す。應酬流るゝが如し。峰大いに喜ぶ。辭して甲州に回りに親を省す。檀越淨居寺を開きて留請して居らしむ。四方の禪侶風に響ひて集まる。峰佛光の法衣を以て之に付與す。應長初年龍山庵を親めて移居す。四來の叢客日を逐ふて轉た多し。峰將に窓を招いて上野長樂に住ましめんとす。憲力辭して赴かず。元翁元公と俱に濃州に住いて庵を古溪に卓つ。禪客來集すること前の如し。文保二年北條高時の母覺海夫人窓を請じて關東に到らしめんと欲す。窓之を聞きて土州の五臺山に入りて吸江庵に隱る。夫人重ねて專使をして國守に命じて窓を起たしむ。已むことを得ずして相隅に抵る。夫人大いに喜び、勝榮寺に館せしめ待禮甚だ渥し。喧を厭ひ泊船庵を三浦に構へ退耕庵を總州に締ぶ。正中二年窓年五十

一、後醍醐帝高時に勅して釐して窓を召して宮に詣らしむ。帝便殿に御して特に錦座を賜ひて法要を聞く。乃ち詔して南禪に住せしむ。嘉暦元年印を解いて勢の善應寺を開く。尋いで相の南茅庵に寓す。高時延いて淨智に住せしむ。翌歲錦屏山瑞泉寺を開く。元徳元年圓覺に遷る。居ること二年にして百廢皆舉る。羽州太守に二階堂氏（道蘊居士）慧林寺を甲州に創め、窓を請じて開山第一世と爲す。元弘三年、帝復た相摸守足利直義に勅して官使を降して窓を召す。宮闕に詣りて謝恩す。帝喜ひ介子都督親王の邸を以て更めて靈龜山臨川禪寺と爲し、窓に命じて之を主らしめ、特に國師號を賜ふ。建武元年皇后崩す。帝窓を宮中に留めて供養すること二七日、因つて衣を受く。旨あつて再び南禪に住せしむ。近臣帝に勸めて禪宗を廢せんと欲するもの衆し。帝乃ち百官を率ゐて寺に入り、夜中親ら巡堂して其の行業を驗す。是より信譽益深し。腹田若干畝を賜ふ。三年春京師大いに亂る。因て南禪を退きて臨川に居る。大將軍足利尊氏窓を幕府に請じて欽んで示誨を求む。曆應二年春攝州太守藤原親秀、西方教寺を革めて禪刹と爲し、禮を厚うして窓を居らしむ。秋八月後醍醐帝南朝に崩す。乃ち尊氏に勸めて勅を奉じて天龍資聖禪寺を建て、帝の冥福に薦せしむ。像設極麗、窓を請じて住持と爲す。阿州太守細川頼春補陀寺を造りて窓を延きて開山祖と爲す。康永元年光嚴上皇西芳寺に幸して衣孟を棄く。武州太守高師直景愛寺を改めて眞如寺と名づけ、窓をして兼管せしむ。貞和元年先皇の

七周忌に値ひ、天龍寺に慶讚し、憲開堂陸座す。勅使山に入り特に金襴衣紫袍を賜ひ、太上皇、上皇及び光明帝百官を帥ゐて臨幸す。二年、上足無極玄をして其の住職を續かして雲居庵に退靖す。天皇召して宮に入れ、師資の儀を展べ正覺の號を加ふ。觀應二年天龍の僧堂を建つ。延表寬廣、殆ど一千の衆を容るべし。無極天龍の主を謝し、廷議再び窓を起す。光嚴上皇自から宸翰を齎して心宗普濟の號を加賜す。八月望、先帝の十三回忌に値ひて多寶院に就いて陸座說法し、翌日微疾を示す。鼓を鳴し衆を辭して三會院に退休す。四來の道俗雲委川輪し、戒を授け衣を付すること七日に盈たざるに籍に記する者二千五百餘人、窓衆に告げて曰く、吾れ世縁近きに在り。疑ある者は問ふべしと。衆競ふて入室請詢す。窓乃ち機に隨つて開發す。朝廷醫をして診治せしむるに窓辭して受けず。兩太上皇寺に幸して疾を問ふ。東陵和尚問候して對坐道話す。窓乃ち手書を與へて囑するに寺務を以てす。復た遣誠數條を書して門人に貽す。二十九日偈を贈り檀越に辭して曰く、眞淨界中無別離、何須再會待他時、靈山付囑在今日、護法權威更仰誰と。又辭偈に曰く、轉身一路橫該豎抹、畢竟如何彭八刺札と。書し畢りて乃ち曰く、老僧已に手臂不仁を覺ゆ、明日行かんと。晦日粥罷みて天龍臨川の衆僧并に遠方の耆宿及び官客等を請じて親面に別を告げ怡然として化す。世齡七十六、全身を昇て三會院に塔し、爪髪を雲居の塔に收む。天皇哀憫して朝政を視るを輟む。凡そ僧尼を度する四千餘人、經律論

師にして弟子の禮を執る者一千有餘、實に嗣法と稱する者五十餘員、衣を付し戒を授くる者勝けて記すべからず。後醍醐帝より以來七朝の師號を賜ふ。高弟春屋葩其の年譜を記す。元の四明の東陵瑛塔銘を選し、明の翰林學士宋文憲景濂碑銘を述ぶ。

師變の贊に曰く、佛有十號、依智德圓滿而立稱焉、如夢窓國師、十號之中備其半矣、爲天子公侯之師、出如麟如鳳五十餘員神足者、非是天人師乎、到處寶刹竝興、士庶歸嚮、曠施充牣者、非是應供乎、漢諷和歌之外、萬般工藝、不習而善、人世諸訛、聞即解紛、當時執政或有難決之事、試質于國師、一言之下、合其要領、非是世間解乎、善逝大夫之二者、可不待言而知焉、後學見其句語三昧、則知悟證之分明也、と。

第二節 著述

夢窓語錄二卷、東陵の序文、楚石及び春屋の跋文あり。貞治四年刊。元祿十三年の夢窓の三百五十年忌に、春屋所編の年譜、西山夜話（夢窓と元翁との答問）、塔銘、臨川家訓、三會院遺誡、西芳遺訓、未得垂誡、偶祭文等を補拾して一卷となし、共に二冊、天龍寺藏版。夢窓學問文章兼備せるも、其作固より文學として誦すべきなし。左の一首の如きは稍や此の巨衲の胸懷を窺ふに足るべきものなり。

世途今古幾窮通、萬否千藏一空、傀儡棚頭彼我、蝸牛角上鬪英雄、須知鷓鴣相持處、終墮閻魔考
鞠中、放馬華山待何日、不知頓覺覺城東。 因亂書懷

第二章 嵩山

第一節 傳記

夢窓と同時同調にして才學兼優する者に嵩山あり。

嵩山名は居中、世姓は源氏、遠州最縣の人、年十九にして親を辭して上洛し、興聖の敬翁欽公を禮して剪髮圓具す。去つて無爲元・桂堂林の二老に參す。堂人に謂つて曰く、此後生を看るに志趣宏潤異時必ず吾が宗を弘めんと。又往いて心地・白雲・南浦・高峰・鏡堂・無象の諸大老に見え、一山西澗の來りて法を建長圓覺に開くや、鏡堂偈を作りて之を賀す。北條貞時諸山に命じて之を和せしむ。山も亦預る軸成りて貞時證を西澗に求む。礪山の偈を賞して曰く、衆角雖多一麟足矣と。貞時乃ち山を擧げて巨福に侍客たらしむ。礪の遷り董するに及んで内記を掌る。延慶二年春、海に泛んで元に入り、日東巖に天童に參す。久しからずして郷友と偕に回りて一山に龜谷龍山に依る。文保二年再び元に遊んで古林茂に永福に雲外岫に太白に謁し、後蔣山に造る。住持曇芳忠擧げて第一座に居らし

む。職満ちて虚谷陵・山一・灵石芝・獨孤朋・東嶼海・元叟端・竺元道・中峰本等を歴扣して六寒暑を經、至る所弊識を蒙らざるなし。至治三年の秋、東還して洛西の西禪に出世し、居ること三載にして愛宕山に退居す。檀越の請に應じて精藍を丹の天橋に開く。元徳の初年詔ありて衆林精舎に補せしむ。疾と稱して起たず。元弘二年詔を奉じて南禪に入る。英納奔り會す。明年秋帝召して内に入れて心要を詢ふ。幾ばくもなく播州に往きて集雲峰に卜居す。未だ朞月ならずして天下分崩、劫賊疆を侵す。山も亦丹丘に逃竄す。大將軍足利尊氏敦請して建仁に住せしむ。清拙之が爲めに諸山疏あり。曰く、雪山雪深嵩山雪深。法道大通時節。鴨川鴨綠漢川鴨綠。江河遠漲濤瀾。歲晚天寒。水落石出。某人瓶分吳浪碧。鞋透楚花香。夢入天宮。指鐘阜摩雲作證。燈傳老澗。駕瑞龍行兩方輿。弛也必張。翔而後集。來據洛濱千光之古刹。高臥元龍百尺之危樓。張公在席。李公到門。新盟重尋舊好。東家鬻茶西家剝栗。遠不如近隣。尊氏弟直義と共に親しく來りて法を問ひ、諸官景仰す。一住五歲にして廣燈庵在建仁に退居す。源亞相中院通冬山の名を聞きて朝廷に奏し、特に大本禪師の號を賜ふ。山固辭して受けず。康永元年請に狃ひて圓覺を董し、尋いで建長に遷る。學徒隨集す。晚年瑞雲庵を鹿山の側に結びて居る。貞和二年二月初六病に遘りて偈を書して曰く、生死涅槃、春行冬令、將錯就錯、仲和提景と。筆を擲ちて化す。春秋六十九、廣燈瑞雲に塔し揭して圓照と曰ふ。

第二節 著述及び詞藻

高僧傳に云ふ、山宏學淵才。所作偈頌。高雅可觀。有語錄外集。曰少林一曲と。又其贊に云ふ、山行脚之暇。與今時和明之僧。玩文字和解。逸居無事。稱傳法者。涇渭自分焉。其號少林一曲者。三百餘載之下。教誰聞之と。今内閣記録課所藏嵩山集三冊文明十四載廣燈庵に於て永光の書寫せるものに係り、史料編纂亦其謄寫本あり。巨幅の大冊子たり。此れ蓋し少林一曲と異名同書なるべし。第一冊は西禪、南禪、建仁、建長等諸語錄、第二冊は法語拈香、第三冊は偈詩凡四とす。集中、清拙・夢窓・竺仙等と應酬の偈あり。又雅純の作亦乏しからず。下に其若干首を選録す。

玉殿苦生不記春。寶階斜枕馬蹄塵。良臣明主今何在。白鷺驚飛愁殺人。
 泥水踏翻山下村。凌雲深入碧層々。回頭天外千峰外。六合清風只一僧。
 行盡青山半日程。松蘿影裏海天清。當頭洗脚上船去。三島秋寒孤雁聲。
 一派清溪一棹舟。山中紅葉水中秋。叩舷高唱錦城曲。石女欷歔笑點頭。

鳥羽古宮熊野道中作
 葛城道中(二首)
 藤代津乘船

枯木岩前絕往還。白雲深處到應難。圓通門戶無方所。舉步全身在廣寒。
 孤頂巍然歷四方。不容凡客扣雲關。蘿龕薜室是非外。逸約高風天地間。

熊野河舟中萬奴屋頭有石女之形(二首錄一)
 月輪(二首)
 留題雲堂效禪月作(二首錄一)

天臺南岳倦遊山。方丈蓬萊興未闌。刹海無邊風颯々。乾坤一碧月團々。
 歸棹掩留碧海門。斜風細雨幾朝昏。浮雲吹散蓬瀛外。光射珊瑚月一痕。
 朝來徐步遶江干。芦岸叢々露未乾。行到路窮山轉處。一奩寒玉照蒼顏。
 北地當年曾失計。餘生何幸又投踪。滿懷風月舊時眼。吳山楚水屬一筇。
 三萬里程鯨海中。十霜兩度去來踪。風塵抖擻袈裟角。地澗天寬一瘦筇。
 一宿無端妨靜定。三生舊話又傾情。夜深更有驚人句。風激前灘流水聲。
 昨日正爲萬乘君。今朝却作國家冤。瓊樓玉殿無明主。雨笠烟蓑見至尊。
 廬山雨夜草庵中。白髮寒灯萬慮空。貝葉殘殘坐成夢。百年心事樹頭風。
 一髮千鈞不等閑。相逢欲話齒先寒。百年心事同床夢。遮莫人間行路難。
 背負斜陽入翠微。塢雲深處自忘岐。齒蘭花底和衣臥。滿院清香付與誰。
 義斷情忘別路長。相逢一笑已傾腸。爲君推出窓前月。添得寒梅吐暗香。
 借宿閑雲凝定戶。流光孤月屬禪衣。同心盡是無心友。不是無心無路歸。
 蘿窓放出半間雲。草座移來借與君。孤硬家風須得旨。歸根落葉雨紛紛。
 迢々何事上寒岩。幽獨深慚一小庵。不奈君無棲泊處。又回孤策下烟嵐。

船上拙唱
 船中喜晴
 江上閑吟
 上岸
 再用前韵
 宿臨川
 嘆・世
 効樂天作
 訪同袍閑居
 晚步
 逢舊友
 和升庭韵
 重賜通庵亭知客
 和鈍侍者韵

桃紅李白已無多。愁看春從眼底過。溪塢綠深黃犢草。野塘烟冷白鷗波。一筇穩々飽參遍。千古寥寥絕唱和。三事秋雲盡零落。半生清苦竟如何。客路暮春
 追懷叩角吟。徹曉對寒燭。依宿許閑雲。參徒容野鹿。林丘慣退藏。世路怕傾覆。仰止住山翁。機
 休心自足。夜感

行到水村山郭外。眇然眼界是平蕪。一天和氣花敷錦。四野烟霞春入圖。黃鳥驚飛風景媚。杜鵑啼
 斷日陰晡。可憐多少往來客。南北憧々在半途。鳴海道中
 卷衲曉離岩下寺。崎嶇行盡到平蕪。渡頭雨霽舟迎送。天末雲橫山有無。溪路野梅香馥郁。沙村綠
 竹影扶疎。風光是處渾相似。何必茫茫遊五湖。同右
 客計蹉跎已隔年。蓬窓閱盡幾風烟。寸眸遙接波千頃。隻影孤隣月一圓。揮泪州城楊柳畔。馳懷鄉
 園海山邊。平生心折魂飛動。空叩船舷嘆向天。鄞江船中

第三章 蒙山

傳記

蒙山名は智明、攝州玉造縣の人。生れて一歳にして恃怙俱に喪す。元國の將軍の本州に降れるもの

慙れみて養ひて子と爲し、郷音を操て四書を教ゆ。性敏黠能く誦す。郷黨相勸めて施薬院に投じて糝染し毘尼の法を習はしむ。十六才、規庵和尚に南禪に依り藏鑰を典司す。庵の滅後一山和尚席を踵ぐに及び、明を以て書記に充つ。嘉暦の末、錫を振ひて相州に入る。到る處の禪刹待つに伉禮を以てす。明極和尚鹿福に住するの間明を擧げて第一座に居らしむ。會中の龍象衣を握て請益す。疾に福山の宗蒲に寝ね閑吟十偈を作る。地水火風元屬我、孤燈相對眼如眉の句あり。曆應の初め尊氏聘請して法を筑の聖福に開かしむ。一居六載、印を解いて洛に入る。將軍直義延見して法を問ひ、相知るの晩きを恨む。建仁を董し尋いで南禪に移る。臘德高きを以て四衆斗仰すること百川の歸宗するが如し。將軍義詮先妣二品夫人の爲めに明を請じて陞座し宗要を闡揚せしむ。後光嚴帝其第に臨幸して皇情大いに悦び、敕して金字の法華經一部、水精の念珠一臂、及び錦被三領を賜ふ。明少より老に至るまで法華經一部を日課し、寒暑闕ぐるることなし。每夏首楞嚴を講ず。辭辯無礙、聽者勸むことを忘ると。一日疾を示し、門人に遺誡し、偈を書して曰く、住妄想境滿九十年、虚空崩裂倒上梵天、と。擲筆卽化す。時に貞治五年八月二十日なり。世齡九十。所著語録の外、雲泉集ありしと云ふも傳はらず。

第四章 無極

傳記

無極名は志玄、平安城の人、順德帝四世の裔なり。幼にして南洲海公に願成に事ふ。舞勺の年に至りて落卯受戒し東寺に密を習ふ。久しくして捨て去りて無爲元公に東福圓覺に參し、本源に透得して聲叢林に播る。元徳年中夢憲圓覺に住し法席鼎盛なり。極氣を負ひて顧みず。僧あり縦臆して謁見せしむ。憲素より其の名を聞く。乃ち之を上座に延きて與に語る。機契ひ擢でて版首と爲す。憲再び南禪に住し、復た擧げて分座す。出でて臨川に據る。貞和二年、憲七處説法の衣を付して天龍の席を紹がしむ。會中多士濟々、麟鳳の戯漫たるが如し。皆極の輪下に歸して化を助けて衆事を辨ず。凡そ龜峰に住すること六寒暑を閲し鐘鼓交々響き宗教を整頓す。光明皇帝屢幸して法を聽き、寵賜甚だ渥し。衆景に佚老す。憲の唱滅に及んで詔を奉じて再び天龍に住す。大衆悦懽す。已にして印を解きて舊院に退居す。文和三年南禪の旨を降さる。極老を以て辭す。延文四年仲春微疾に屬す。門人に謂つて曰く、吾れ十六日に行かんと。期に至つて衆を聚め遺誡して坐逝す。享年七十八。慈濟に塔す。敕して佛慈禪師と諡す。極、雄辯強記、當機讓らず。前聞記(佛光録附録)は無極の行狀を録するものなり。中に言ふ、師性粹夷身嚴云云。所著、語録天龍一指、外集色塵集ありしといふも俱に傳はらず。

第五章 大智

第一節 傳記

大智幼名は萬十、肥後州の人、幼より岐嶷塵世を輕蔑す。七歳にして寒巖尹公に大慈寺に投ず。巖一見して之を器重し手づから饅頭を把りて之に與へて喫せしめ、問ふて曰く、汝の名は甚麼ぞ。對へて曰く、萬十と。巖曰く、萬十饅頭を喫する時如何(蓋し語音相近きを以て之に戯むる也)。曰く、大蛇の小蛇を吞むが如しと。巖曰く、汝黠兒宜く小智と命ずべしと。十頭を掉つて肯んぜずして云ふ、小智は菩提を妨ぐ。唯願はくば大智と目せしめよと。巖驚き因つて其の名を立つ。(史傳失考、以素溪或祖繼爲其法號者、上古無之、實是後人蛇足也、面山所撰大智逸傳錄、辨詳之矣)

長ずるに及んで學業拔群なり。後相州に往きて南浦に建長に謁して機語契せず。去つて賀州に抵りて瑩山に大乘に參す。提撕せらるゝこと七年、時に明峰首座たり。智就いて清益して造詣日に深し。延慶二年東明日和尙東渡して圓覺に住して新豐の曲を唱ふ。智往きて拜謁し偈を呈して曰く、洞家春色興將闌、一徑苦封到者難、只有杜鵑枝上語、夜深獨自哭空山。東明稱賞す。回りて明峰を辭し、正和三年歳二十五にして船に附して元に入る。古林茂、雲外岫、中峰本、無見觀の諸名宿に謁して悉く

青願を承く。遍く名場を踏んで諸祖の塔を禮す。淹留十一風霜に飽く。自ら謂へらく、中華濶しと雖も一個も師法とすべきもの無しと。遂に維桑の思あり。英宗聲詔を下して本國の舶に駕せしむ。智偈を進めて恩を謝して曰く、萬里北朝宣玉詔、三山東海送歸船、皇恩至厚將何報、一炷心香祝萬年と。既に洋中に至りて風濤鼓怒し、高麗に飄舶して舟楫皆破る。智偈を作りて王に呈して曰く、曠劫飄流生死海、今朝更被業風吹、無端失却歸家路、空望扶桑日出時。王船を賜ひて國に返らしむ。瑩山明峰を能の洞谷に省觀して洞上の法を嗣ぐ。茅を加州河内莊吉野郷に結びて居る。因つて偈あり曰く、艸屋單丁二十年、未持一盃望人煙、千林果熟攜籃拾、食罷溪邊枕石眠と。四衆歸嚮して土木興作し師子山祇陀寺と號す。臘八衆に示して曰く、果滿三祇道始成、放光動地度羣生、一聲雞唱五更月、枕上誰人夢未醒と。一住數年、肥後に還り鳳儀山聖護寺を菊池郡穴郷斑蛇口山に構へて寓す。檀越肥後守菊池武時(心空寂阿居士)崇仰して弟子の禮を執る。觀應二年菊池武重(武時男)地を玉名の石貫郷に卜して紫陽山廣福寺を建て、智を請して開祖と爲す。武重弟武士亦た智の徳を欽して弟子となる。(祖禪寂照居士)。時に手づから自影を寫し別源(圓旨)をして贊せしむ。正平の際肥前の小城に赴き水月庵を築きて養老の所と爲す。同廿一年臘月十日端順寂す。閱世七十七、闌維して骨を分ちて開規の四處に塔し名づけて大梅と曰ふ。法嗣禪古祇陀廣福に住し傳へて十數代に至る。(此の傳は専ら文政

二年雲龍陳主梵丁選する所の首書増補大智禪師傳に據る。高僧傳と同じからざるものあり。

第二節 著述及び詞藻

大智の偈頌は門人光嚴等の編する所に係り、後に面山の逸偈錄三年保あり。此外龍頭・聞書・頑解・參註參註本等諸註釋書十種の多きに上る。梵丁の首書増補本出づるに至りて最も完備を得文政三年京都出雲寺文次郎板。盛に世に行はる。其作固より偈語を以て主と爲すと雖も、意境超越幽遠玩誦すべき者鮮からず。自ら能く嶄然特立して一家を成す。今其若干篇を錄取すること下の如し。

玉兎推輪半夜天。金鷄報曉五更前。千年古曲無人調。誰把鸞膠續斷絃。
 天冠山聳青螺髻。朶々千峯疊翠嵐。若見毗盧真境界。善財不走百城南。
 千峯頂上白蓮社。十里松門入更深。僧舍不留塵世客。一輪明月照禪心。
 蒼龍吼破崖頭山。不問透關未透關。側耳清風開眼月。幾人來倚曲欄干。
 西風吹雨弄新晴。雲拭青銅宇宙清。回首九重天外立。眼高常與月爭明。
 蘆雪混邊水合空。蓬瀛何必玉壺中。一條古路人間外。不斷風回岸下松。
 篷窻冷對一江秋。智境融時見處周。岸上青山雖不動。波心明月去隨流。
 萬頃湖波萬頃寒。回頭四遠望湖山。銀盃盛雪三千丈。突出瑠璃盆上看。
 看真歇和尚語
 游天冠山華嚴境
 高麗游白蓮社
 松吟庵
 眺望院
 臺 島
 笠津遠望(二首)
 雪後上比良山

煙霞影裏去藏身。不踏人間紫陌塵。把一莖茅蓋頭住。爲誰分與半間雲。
 中原探盡西來意。萬里橫航一葦回。喜見七郎峯下寺。寒岩枯木又花開。
 志慕竺乾林下坐。人間百事已忘懷。山中有箇安禪石。來折松枝拂綠苔。
 洞家春興與將蘭。一徑苔封到者難。只有杜鵑枝上語。夜深獨自哭空山。
 玉輪碾破九重天。萬里秋光在目前。誰坐廣寒宮殿裏。夜深捲上水晶簾。
 一聲寒角發煙村。調入梅花不忍聞。寂々官街無醉客。有誰來扣五更門。
 虛空粉碎化微塵。大地平沈不見人。枯木乍開花一點。喚回空劫已前春。
 念々無常代謝新。浮生安得久長身。百年三萬六千日。胡蝶夢中空度春。
 截斷人間是與非。白雲起處掩柴扉。當軒栽竹別無意。祇待鳳凰來宿時。
 艸屋單丁二十年。未持一鉢望人煙。千林果熟攜籃拾。食罷籬邊枕石眠。
 萬象之中獨露身。更於何處著根塵。回首獨倚枯藤立。人見山今山見人。
 焚香獨坐長松下。風吹寒露濕禪衣。有時定起下雙澗。瓶汲五更殘月歸。
 空林卓錫卜幽栖。冷淡家風實可悲。荷葉滿池無線補。白雲爲我坐禪衣。
 幸作福田衣下身。乾坤贏得一閑人。有緣卽住無緣去。一任清風送白雲。
 寄廣首座
 喜僧自太元至
 寄道人
 上東明和尚
 月 堂
 悟 庵
 雪中示寂山(五首)
 坐中有感(四首)
 鳳山山居(八首)
 同 右
 同 右
 同 右
 同 右
 同 右
 因 事(三首)
 錄二

一鉢隨緣度歲華。禦寒亦有一袈裟。無心常伴白雲坐。到處青山便是家。 同 右
 新豐一曲唱家風。白雪陽春調不同。彩鳳舞風銀漢曉。祥雲半掩紫微宮。 答洞上宗要
 冷煖分明只自知。男兒豈可被人欺。莫將日本真金貴。博易大唐鍮子歸。 送僧之大元(三首)
 太白曾經下鄧峰。萬松甚聽起清風。雖然未敢通華語。知識堂前不患聾。 送僧遊大元(二首)
 佳人一段好風流。花滿春城月滿樓。露出娘生真面目。倚羅小扇不遮頭。 悼戴家女兒
 空堂只見綠苔封。法席無人補祖宗。滿樹落花春過後。杜鵑啼血夕陽紅。 禮永興開山塔
 白浪堆中釣錦鱗。煙波江上捲絲綸。扁舟載月歸何處。十里松行不見人。 悼雪艇和尚

第六章 不 聞

傳 記

不聞名は契間、晩に萬休叟と號す。姓は平、武州河越の人。里中に講主あり。聞の頂を摩して曰く、此兒奇相多し、若し釋氏に歸せば必らず苦海の津梁と爲らんと。聞警敏絶倫、一切の文學、師訓に由らずして自然に通曉す。伯氏に禪者あり。攜へて鎌倉に往き東明和尚に圓覺に投じて童役を執らしむ。法華を讀むに六日にして七軸を記誦して一字を差へず。明大いに驚歎す。十四にして容山の戒壇

に登具し、還りて明に建長に依り賓客を典す。職滿ちて上洛し虎關鍊、雙峰源二老の門に周旋す。正中二年歳二十四にして南遊の志を發し、西の方豊州に抵り關提照公に蔣山に依り、翌年海に航して元に入り、徑ちに臺州の天臺山に登りて無見觀公に華頂に見え、方廣に遊び石橋を度る。既に下りて東嶼海に靈隱に、靈石芝に淨慈に謁して請益する所多し。一日錢塘江に遊ぶ。官吏異域の人なるを怪んで禁收して武昌に送る。聞鬱々として亡へるが若く、詩を館壁に題して曰く、孤筇遠入異郷雲、滿耳語音渾不分、唯有簷頭深夜雨、蕭々猶似舊時聞。會々高昌王子謫居して州に在り。其の詩を讀んで感ずるあり。召見して大に喜び乃ち有司に請ひて義子と爲す。聞厄に罹りしより金剛般若經を誦すること凡そ一百部、又指血を瀝して法華六部を寫す。文宗梁王たりし時金陵より武昌に往きて聞に違ひて之を拜す。高昌王召されて燕京に赴き、聞を將ひて俱に行かんと欲す。聞夙志未だ果さざるを以て辭して金陵に抵りて古林茂、月江印、斷江恩、竺元道の諸老に謁す。又杭に如きて再び靈石に南屏に參し、服勤すること三年、凡そ元に在ること九年。東明書を寄せて東歸せしむ。乃ち回りて明を圓覺の東堂に省す。一日入室廓然了悟し偈を作りて明に呈す。明韵に倚りて之を印す。清拙和尚圓覺に住し聞を擧げて箋翰を掌らしむ。明再び建長に遷るに及んで、擢んで第一座に居らしむ。曆應庚辰東明寂するや、聞塔下に廬して心喪三年す。武州の藤氏天覺居士延いて瑞應精舎に居らしむ。幾ばくも

なくして駿の清見に出世す。一坐十年、相の淨智圓覺に遷る。至る所湖海の土輪下に歸湊す。貞治の初瑞應に歸隱す。亟相足利義詮聘して建長を補せしむ。開辭するに偈を以てして曰く、老病相侵氣力衰、鳥飛西欲入崦嵫、國恩曾荷乾坤大、放待昏鐘一杵時と。應安元年七月病に遷り、十二日偈を書して曰く、也大奇也大奇、末後一句無人知、大洋海底遭火熟、虛空產下木羊兒と。筆を擲ちて坐逝す。壽六十八、瑞鹿山の等慈庵に塔す。

第七章 寂室

南北朝に在りて超然隱逸の一派を立つる者を寂室と爲す。

第一節 傳記

寂室名は元光、姓譜は藤氏、作州高田の人。紗齡より睿智秀發なり。卯歳に及んで京師に入りて無爲元禪師に従つて出世の法を學ぶ。十五にして削染受戒す。辭去して遊方し、江州の田上縣に寓す。約翁の東關に於て大いに爐韜を開きて學者を鉗錘するを聞き、往きて禪興に謁す。翁喜んで迎へ名付くるに元光を以てす。室研精諮稟す。徳治二年二年翁洛の建仁を主どる。室湯藥に侍す。明年雪達磨偈を作りて曰く、暫借空華示半標、普通年事未迢々、西天此土飄零恨、縱使春風吹不消と。一山國師

一見して掌を拊つて稱賞す。延慶己酉翁鎌倉に歸る。室をして金澤の慧雲律師に従つて毘尼を學ばしむ。九旬にして其の梗概を盡す。復た東里會、一山寧、東明日の三大老に侍して益々薰灼を受く。元應二年、可翁然、鈍庵俊等と渡海入元す。直ちに天目山に登りて中峯本に謁す。初め一山之を稱して鉄船と爲す。中峰更めて今の字を製す。尋いで元叟端、古林茂、清拙澄、靈石芝、絶學誠、無見觀、斷崖義等の諸尊宿を訪ひて悉く獎識を蒙る。泰定三年歸帆を理す。一時の諸彦皆贈言あり。既に長州の濱に著き三角縣に寓す。建武の初備後吉津の平氏永徳寺を創めて之を延く。室素より喧嘩を厭ひて雲冥に考槃し、備作の間に韜晦すること二十五年、觀應の初年、攝の福嚴に僑し、繼いで江の往生、濃の東禪、甲の棲雲に居る。延文五年、江州の刺史佐々木氏頼（號雪江）の室の徳望を欽し、雷溪の勝地を以て之を延く。室其の地の僻遠にして甚だ素心に愜ふを見て、乃ち岨を鑿し蘆を編し梵字を緯ぶ。隣邑の士庶競ひ至りて役を執り、未だ幾ばくならずして殿閣堂樓林標に涌出す。之を永源寺と號す。四東の龍象二萬指。玉腕芳、一關夫、月心圓、大拙巧等の若き、富に倚り澗に傍ひて茅を縛して棲遲し、山林の盛事を致せり。光明帝屢々手詔を賜ひて其の徳を旌す。康安貞治の間、相の東勝建長及び豐の万壽に請せらるゝも俱に赴かず。光明帝天龍の詔を降し、春屋中巖等書を寄せて從叟すれども室力辭して就かず。室の啓に一條殿の書あり。（寂室錄に見ゆ）。帝復に手詔を賜ひて法要を問ふ。

室乃ち報奏す。(寂室録に見ゆ)。鎌倉元帥足利基氏亦遠く手簡を齎して心要を諮ふ。義堂の日工業康
 曆二年十月晦日の記に云ふ、等持院忌、府君(義)管領入寺、點心罷、余送君歸、小間而余茶話、君問關
 東諸事及玉岩(基)平日事狀、且謂以書問寂室和尚工夫事、實有是慶、余曰實有是事、余說昔所聞見
 者、蓋玉岩問、以工夫未純一、雜念起時如何對治、又生死到來時、如何回避、寂室答以大慧書中兩三
 改跋書、以金剛寶劍爲喻云云と。即ち是なり。(此書亦寂室録に見ゆ)。貞治六年九月朔、諸子を含空
 臺に集めて遺誡し、訖りて偈を書して曰く、屋後青山、檻前流水、鶴林雙趺、熊耳隻履、又是空華結
 空子と筆を擲つて化す。世齡七十又八、塔に勝して大寂と曰ふ。緇白哀慟父母を喪するが如し。所度
 の弟子千餘人。室楷書を善くす。火に逢ひて字畫壞せざるもの往々にして有りと云ふ。諡して圓應禪
 師と曰ふ。師蠻の贊に云ふ、圓應師續焰佛燈、規風普應、宗說全、禪文熟、一生愛烟霞不蹈京華、然
 亦枯木之衆、逐臭於巖岫間、蝟結蟻聚者四千指、可謂得趣之時也。

第二節 著述及び詞藻

高僧傳に寂室著す所語録兩帙あり。盛に世に行はると曰へり。今史料編纂掛所藏本二卷四冊頭注あ
 り。元祿十年京師書肆文林軒の板行に係る。上卷二冊は偈頌、下卷一冊は小佛事、拈香・字說・書
 簡、一冊は法語なり。末に永和丁巳性均の記あり。云ふ始めて自ら寂室の遺文を蒐集して印行すと。

此に據れば元祿本は或は其の再刊なるか、又附するに寂室の行狀を以てす。寛永二十一年永源の住持
 一絲叟文守の纂録する所たり。

寂室の詩品文格其人物と同じく、清高簡練時輩中に於て居然として別に一家を爲す。惟だ常人の眼
 は其禪語の兀肆過ぎ難きに苦まん。今乃ち其稍や純雅にして誦し易き者若干篇を選録する事下の如し。

借此閑房恰一年。嶺雲溪月伴枯禪。明朝欲下巖前路。又向何山石上眠。 書金藏山壁二首

風攪飛泉送冷聲。前峰月上竹窻明。老來殊覺山中好。死在巖根骨也清。 同 右

勝地千年寺。房々竹樹間。落花埋古徑。幽鳥叫空山。遊客凌晨到。歸程踏月還。留題誰耀壁。才

拙愧追攀。 春日遊吉備中山韻

懶踏利門名路塵。千峰影裡獨凝神。故人俄把柴扉扣。又聽叢林事々新。 次密叟侍者韻

禪人來討贈行篇。暗把枯腸苦搜索。渾無一句可呈君。月照空山秋寂寞。 贈椿上人遊方

凌晨掃葉立庭際。籬落西風露濕裳。時有山童來採菊。報言今日是重陽。 重 陽

身亡王事只名存。悲看荒墳長蘇痕。千古中山春寂寞。岩花香可返幽魂。 成親墓韻

野興催人青晝長。行看岩院滿庭芳。僧從玉樹陰中過。鶯在瑤甌重處藏。擁砌應添山月色。飄窻又

助瓦爐香。老來好景難多遇。眼醉風光心欲狂。 室山看花韻

一嶽壓三府。白雲覆碧巔。峰高踰萬仞。寺古近千年。僧坐虛堂月。猿吟老樹烟。寄言浮世士。來此脫塵緣。

遊八塔寺

八月九月風月好。一聲雨聲雁聲寒。公驗分明須進步。元來大道透長安。

送調上人之京

此地得重遊。春殘院落幽。花難歸樹上。雪易點人頭。鳴竹風吹夢。烹茶客自留。明朝又携杖。去要臥林丘。

再遊大和寺

澗水下人間。巖雲過別山。聊聽幽鳥語。似喜野僧閑。

書椎村山庵壁

索寞春光巖下寺。高人金錫拂烟霞。空山日永將何待。唯有庭前一樹花。

謝訥堂和尚過訪

火後西禪寺。門庭冷似灰。井河聲寂寞。嵐嶠碧崔嵬。唯有山雲宿。渾無俗駕來。上方老禪伯。古格復追回。

宿西禪寺

山院春深客不來。空庭花落沒蒼苔。欲留流景怕無策。猶等佳人念未灰。身老尤宜居世外。雲閑只合臥巖隈。

憶友人

山中行。烟霞遠近失歸程。溪邊跌脚指頭破。流水聲和忍痛聲。

山中住。艸衣藜食閱朝暮。千峰盡日入雙眸。不記青黃能幾度。

山中坐。石榻跏趺惟一箇。全非樂寂兼嫌喧。獨有閑雲相許可。

山中臥。高枕蘿窻縱怠惰。天風吹折老松枝。叵耐鷺吾濃睡破。

庚寅冬。登備前金山。訪功上人幽居。援毫賦山中四威儀。書壁上。

滿頭疎髮撚銀絲。來歲逢春未可知。竹杖芒鞋多野興。山花看到幾株枝。

春日山行

無限風光已索然。殘花尚自舞庭前。春歸定有重來日。人老何曾復少年。幻跡多留青嶂裏。幽懷常

在白雲邊。閑窓晝永如經歲。課罷楞嚴隱几眠。

三月盡

白雲深處掩茅茨。慚愧禪人問舊知。相送出門雨無語。長松影下立多時。

贈宏上人

箇事明々呈似君。不須特地策功勳。風和日暖黃鸝轉。春在花梢已十分。

示僧(二首)

閑寂空巖霜夜月。薛蘿庵裏老夫情。明朝子又下山去。何日重聽敲戶聲。

次石礪韻

夜宿向陽山裏寺。開基尊者我知心。三拜壁間遺像立。春禽啼斷綠松陰。

夜宿向陽寺

去春此地尋花到。今日又看黃葉秋。嶺上白雲凝不動。自慚衰朽好閑游。

書西明寺壁

閑田一片在山前。來相拋來三十年。只採松花充午飯。煙蘿深處掩扉眠。

休耕庵

道人來扣我柴門。欲把參禪旨要論。莫怪山僧懶開口。老愚啼斷落花村。

示村上人

含忠殞命最堪憐。掩恨蒼苔二百年。無事休來平氏客。恐驚泉下永宵眠。

成親墓

不求名利不憂貧。隱處山深遠俗塵。歲晚天寒誰是友。梅花帶月一枝新。 山居
隣寺屢來遊。通宵談未了。山村無更鼓。窻白覺天曉。 宿金剛寺

渺茫楚水拍空流。潮撼錢塘夜不收。玉鑑光寒萬波底。依前天上一輪秋。 江月

石 磻 說

余性喜遊山水之間。一日飯罷。拉同志兩三輩。入屋後山。從樵徑行。殆乎數里。松風吹耳。空翠濕衣。忽見一洞壑。幽邃嵒呀。陰風凜々。老木交枝。古藤垂蔓。兩岸對峙。如側翠屏。中有巨石。高丈餘許。屹然特立。若削青鐵。硃砂礪。怪奇可觀。潤澤被物。草木華滋。溪山明媚。蓋疑內含美玉。乃致然乎。下有磻泉。色似按藍。泓然激澗。浸爛雲根。瞪目俯臨。令人心寒股慄而已。亦恐有靈物。蜿蜒於茲歟。余聊有感懷。卽謂同志曰。坐。吾語汝。古隱士。夏揖塵世。遠尋雲山。棲遲空谷之中。考槃寒溪之上。守志堅確。天翻地覆。不移不轉。心源淵深。歲積月累。彌清彌澄。唯羞世人知住處。亦恐聲名流江湖。而今回觀石澗。與古隱士之道貌。頗相逼似也。汝意謂何如。同志拂袂起。笑曰。老夫實耄耶。苦但謂酷愛彼石澗。天生清純佳致。則良以可也。引古隱逸。偷庸比倫。何其言之訛。豈復非好事者哉。余失所對。赧面而休。夕陽已懸木末。相呼而歸。翌旦泉姪來相訪。淪茗同啜。話及乃事。泉云。或號吾石磻。靡識所由。正欲來從老

夫而聞其說。幸希記山中所見所語。在石磻字尾矣。余曰。前所言者。是同志所捨。汝用是奚爲。泉云。彼已非我。我亦非彼。彼我各異。用捨寧同。余不獲已。援毫書贈云。

答實翁和尚書

越弟來出示所賜手教。焚香繙閱。仍審此日道福兼昌。興寢清勝。欣慰無已。細味來論。區々痛責。愚林下掩關懶於趨世。又云。風雲際會。以膺峻擢。夫何見期太過。何以敢當。自非厚荷存撫。則安得到於此耶。靡勝銘感之至。愚壯歲隨衆之日。東西班列。尙以不敢措意。何況大焉者乎。是無佗。蓋深自量已知分也。頽齡幾乎耳順。蒙昧與年相稱矣。當初所得於友者。十不記一。好一箇棄物。天壤之間。鮮有我顧者。獨頂山居兄。平日道義不寒。退與此廢院子。素有山田數畦。蔬圃二三畝。分甘作箇禿頭老農。躬耕手種。聊以卒歲。亦足以自娛。幸勿煩憂懸。但欲得此生之中。追隨左右。及方山竺峰諸公高躅。詣于嵩山。拜祖塔罷。而歸龍峰。啜茗話舊。亦未可得也。徒增悵快耳。似聞上利。嘗罹元弘兵火。衆屋一燼。如今所經營者。止於佛殿一舉而已。厨下清淡。時或依米度日之多矣。常人分上。必不獲無少勞慮。左右寬量大度。寧復目前世故。足介高懷也哉。切希垂念乃祖之道。危如累卵。不倦槌拂。發揮正宗。無窮法利。溥賑述徒。是則副愚不肖小弟等。所以渴望。至祝至禱。問及元泰。今夏在此聚首。渠又無日不慕左右道風。怕是秋涼。將宗禪同

去執侍座下也不定。姑此略布。極熱。爲法保裔。不宣。

第八章 竺 仙

第一節 傳 記

竺仙の支那より渡來して文字禪を以て南北朝學者の標的となりしこと猶ほ一山の鎌倉時代に於けるが如く、共に我邦漢文學の扶植に於て直接甚深の關係なくんばあらず。

竺仙名は梵僊來々禪子と號す。後楞伽に居りて最勝幢と號し、晩に思歸叟と稱す。元の明州象山縣の人、姓は徐氏大父某校官行道記作正學々たり。父應字は景陽隠れて仕へず。仙六歳にして學に就き未だ一芥ならざるに韻書の翻切に通ず。人の心經を誦するを聞きて輒ち能く記す。體貌清癯にして生葷腥を惡む。父母其俗胤に適せざるを視、十歳に方りて吳興の資福寺の別流源公に投じて驅鳥と爲す。十有八歳にして杭の靈山に行きて瑞雲隱公に依りて落髮稟具す。仙機峰穎脫英氣人に逼る。去つて諸刹を叩く。首め晦機巖、雲外岫、景元瑞、東嶼海、止巖成、中峰本の諸老宿に謁して皆優賞を受く。更に建康に往きて古林茂に遇ひ師資相契す。時に東方より來集せる學徒天岸・中岩・別源等と相知るを得た

り。林曰く「你異時當に化を東方に大にすべし」と。乃ち之を呼んで日本國師と爲す。清涼に典藏たるに泊んで聲名藉甚なり。已にして東浙に還り荆楚に遊ぶ。一錫去留人の慕ふ所となる。天曆己巳の夏、徑山に登る。會々明極の日本に赴くの際乃ち挽かれて共に海に浮ぶ。天岸及雪村友梅亦歸朝同行す。雪村行道記に云ふ、己巳夏。勝幢赴舶泛大洋東歸。即本朝元德改元。師年四十歳矣。仙竺仙泊閩江。寄雪村西堂偈云。掛席同爲海國遊。寸心如水正悠悠。乃ち元德元年六月を以て太宰府に達す。州府大友氏豊後の萬壽寺を以て仙を處らしめんと欲せしも、其名已に幕府に達せるを以て淹留を許さず。明年二月鎌倉に入る。北條高時明極を請して建長に住せしめ、仙をして第一座に居らしむ。正慶元年淨妙に遷る。足利尊氏直義共に之を敬す。建武元年淨智を主る。尊氏金三萬地三千畝を給す。天境に次酌淨妙竺仙和尚の偈あり。曰く、達人隨處興綱宗。無私應物乾坤同。光明盛大耀今古。優曇綻瑞東溟東。胸襟浩與元氣會。鴻濛蘊奧深難窮。提來休居舊左券。掛向淨妙雲外峯。金剛幢子握左手。千里萬里魔軍空。稻荷頂上古月現。一輪正照相城中。汾陽之衆不滿百。匹馬林下揚華風。近聞鏡額銅頭漢。多願北面中原翁。

明年又天柱峰の故址を施して壽塔と爲す。仙其勝境を樂んで楞伽院を翹む。大友氏泰三浦の無量寺を以て仙を請して開山の祖と爲す。中岩の自曆譜延元二年の記に云ふ、淨智竺仙和尚、以舊交之厚、因請

予歸前版、時三十八歳と。源の東歸集に和竺仙和尚請中岩居版首送蘭陳賀之韻と題したる偈あり。曰く、趙州燒却五分香。補職量才禮數常。金嶠春回蘭破玉。依然鼻孔一般長。と。此頃中岩の作に左の詩あり。

謝竺僊和尚訪

窮巷晝長春睡驚。咄々軋々送嘉聲。停車麥浪隴頭立。倒屣菜花籬外迎。光寒里閭人改觀。澤流巖谷草生榮。瓣香欲走謝臨屈。爭奈已成蓮社盟。(見東海二)

曆應元年淨智を退く。四年春旨を奉じて南禪に住す。朝廷昇して天下第一刹と爲す。仙上堂の語中に言ふあり。曰く、南禪無意上諸方院宰相臣力主張合把虛空爲法座宜將大地爲禪牀と。時に中岩關東より寄書して之を賀し且つ鼓舞して曰へらく、今月十六日。神足雅上人過訪。出示四月十三日入寺佛事。焚香端誦。心目朗然。就審上刹今夏開堂安衆。齋々整々。當致宗風復古也。海東叢林。雖是元自不足道者。以關東全盛之時。視今者。則是更苦矣。自經喪亂。至今幾乎十年。其間是處寺院。例不開堂。由是衲子輩。徃々不守規矩於行歩。若夫後生晚進者。則開單展鉢之儀。且未知爲何等事。可傷之甚。立志者之所同憂也。是故今聞法席之盛。爐鑪之熱。凡稱禪衲者。孰不慶幸。而況於如僕者乎。僕頃在受業師會中。見諸人嫌猜。言語呶々。而欲吾志之奪。故至於此極。且於其兵革紛擾之中。無路長

避。臬兀不安。若座叢棘。由是神識荒散。殆乎狂癡。平生所學文字義理。無復記持。當此時也。絕無所賴。獨荷眷知。息肩於淨智。救急之恩。宜同骨肉。永以爲好也。蓋以僕之與和尚。小大材則殊。氣味頗相似者耳。前年因追薦直庵居士。在村院中。柴床爲座。櫻葉爲拂。妄談般若之次。不顧早計之嘲。雖未燒香。略々漏泄。不忘百丈老師之意。爾來心思自定。以本志竟不見奪也。且兩年間。世上氣塵稍豁。既而養素藤陰。誓不出門。由是與和尚相忘於道術。而不在區々人事之中。雖然當初昀濡之渥。未嘗須臾忘之中心也。是故和尚在此不遠。則吾心恃而寬焉。故三月不見。亦無以爲思也。如今京之距此。地踰千里。而心無所恃。故吾思切々。其馳不暫停也。且累日之滋久。則思之滋深。人情之常也。正相思中。忽聞雅公所言。并讀示衆之語。忻抃之懷。不在言也。我海外人。多幸而得和尚浮椀至此。比來蝸角之上不靜。故盛大之光不揚。有識者皆嗟惜之。今則略有太平氣象。榮赴國主之命。又聞等持院協心戮力。贊佐保社。相次當有莫大之功濟也。既得克有厥始。但願和尚凡百堅忍。常以初到博多之時。同在尊念中。事無巨細。皆決於等持。自然克終成其美。方々不可放過。和尚自有本分事。單提獨弄。則無可不可也。見愛之至。故說及此。不知者者。儘教以爲不敬。惟恃和尚寬以容之。明以察之。孟軻曰。齊人無以仁義與王言者。豈以仁義爲不美也。其心曰。是何足與言仁義也。則不敬莫大乎是。僕竊傲焉。凡中心謂之忠。出乎口。謂之言。雖有其心。匿而不發。謂之匿。匿者惡也。故僕傾盡

成り、末に至正十八年八月清欲の題言あり。曰く、竺仙和尚。與余同稟休居先師。嘗記其爲日本國師。既而化行於彼。王臣欽敬。龍象爭參。知子莫若父也。神足天寧壽藏主。錄其三會語。求校正。稱性而說。千變萬化。如天馬駒。不受鞿勒。造次顛沛。不失吾家宗旨。節爲二卷云々。其間有一句半句。大段謬訛。能開天下衲僧眼目。亦能瞎天下衲僧眼目。若也檢點得出。方知日本國裏有禪師耳。と。又正正二十五年梵琦の題言あり。中に云ふ、竺仙禪師。遠涉鯨波三萬餘里。唱鳳臺無說之說。度日本無生之生。屢董名藍。爲彼國王臣之所歸敬。所謂至玉必生峴阜。大材必出鄧林也。徒弟壽首座。於師示滅之後。以毫端三昧。編而刻之。先布大唐。却貢日本。用心可謂勤矣云々。第四冊は則ち天柱集と題して裔淑等の編する所に係り、法語と偈頌と雜著より成る。其偈頌と雜著は今收めて五山文學全集第一輯にあり。自題妙高亭三首より東明和尚塔銘に至る者是なり。冊末至正二十四年紹興路崇報禪寺番陽至仁の序文あり。亦椿庭壽の請に因りて作りし者。其中に云ふ、予既會竺僊于匡廬。又見于雙徑。相知爲最深。茲壽之請。其可默々乎。惟古林諸子多賢。而嶄然絕出者二人。其一南堂欲公(清欲自遺)。道鳴中國。其一竺僊。化徹異邦。可謂二甘露門矣。是錄稱性而譚。妙得家法。縱橫迅捷。雲興泉涌。示用應機。如矢中的。宜乎東人感化。而得度者夥也。或曰。文殊有云。無文字語言。是真人不二法門。達磨之來。不假文字。而直指之妙以傳。若是則是錄豈不爲附贅歟。予曰不然。心法之妙。固

離文字、然非文字。無以發揮心法之妙。所謂總持无文字。文字顯持也。惟在得兔而忘蹄。見目而忘指耳。況此方真教。在乎音聞。大道真體。不離言語。顛公之於法華。安公之於稜嚴。能公於金剛般若。古公於雲門語錄。莫不由茲而證入。然則是錄它日豈不爲學者之指南哉云々。以上諸家記述する所、以て竺仙遺書編刻の次第を視、又以て其學問事業の概略を知るべきなり。

續叢林公論一卷今東大圖書館所藏五山版分つて二冊と爲す。隨筆の類にして各條先づ某一事を擧げ、後に公論曰云々と書し、以て儒佛學道に關する所諸問題に批判を加ふる者なり。特に韓退之・歐陽・永叔及朱晦庵を難するの言多し。仲靈嘗て非韓三十篇を作り、首に其原道の當に原教と曰ふべきを説きしが、竺仙之を引きて其説更に深刻を極む。曰く、蒙則又不然。韓不知有樂天知命之說。故乃口別詭談仁義。心則唯恐人之奪其食利之故。乃有是作也。故其詞曰。古之爲民者四。云々。蒙則謂亦不必曰原教。韓之不通其理。絕無仁義。徒爾特欲騁其虛文。爲爭食之爪牙耳。第曰爭食可也。且韓愈之爭食也。固不異於禽獸矣。豈有仁義之教。曰原教哉。云々。又別に下の一條あり曰く、天龍寺沙彌周逸。年十四。誦習詩草。初以它作偶置之。誦韓愈南山詩。輒不安。一夕先寢。俄而驚呼曰。今不誦矣。今不誦矣。旁人喚醒之。曰方睡。見一人。白袍峩冠。倒執其劍。以怒我曰。汝何誦南山詩。欲刺殺之。劍首且已著體。乃急告以求免。只今左脇上。如有傷而疼。果而綿衣數重。皆透有傷痕。如居常

剃頭時。剃刀悞觸者。三處。取所誦詩。乃混沓它書之下。亦有傷於其詩之題南山字上。刺入透過二十五紙。紙皆重葉。泊極後表紙最厚者。亦透。有血在初刺破南山字上初刺破處。堅澗寸許。後漸狹。至表紙唯二分許。前有杜甫北征及李白把酒問月。皆無它故。特自南山字而刺入。此乃今年二月二十三日也。余以二十四日至天龍。堂頭夢窓和尚言之。即時令妙葩首座於其寮取詩本看。如此。歸以語諸弟子。或曰不知何故若是。余曰。此不待言而可知也。韓愈乃吾教之仇敵。然則若其言或是信實道德之雅言。固何害哉。余少之時。正亦聊見杜及韓此作。而私自謂北征乃一片爲國忠義之言。以紀當時之實事。可謂詩史也。南山悉浪語耳。泊後見它本。乃古人論之在前。孫莘老嘗謂北征勝南山。王平甫謂南山勝北征。終不能相服。時山谷尙少。乃曰若論工巧。則北征不及南山。若書一代之事。輿國風雅頌相爲表裏。則北征不可無。而南山雖不作未害也。二人之論遂定。又東坡曰。北征識君臣之大體。忠義之氣。興秋風爭高可貴也。於是。余亦私自慰喜。以謂余亦難少。乃與古人高論暗合。然於後再觀之。山谷謂工巧。正亦未是。唯宋晦庵論之殊當。曰大抵今人知其力去陳言之爲工。而不知其文從字順之爲貴。故其好怪失常。類多如此。余謂莫逃朱論也。然又余究其作。非獨好怪失常。皆是無稽之虛詞。牽強押韻。俳諧戲謔而已。今夫後生乍入宗門。學無上妙道。固是可喜。然於年少。情素易爲染習。所謂性相近也。習相遠也。以其學道而未見其門。若乃染習其仇讎之好怪失常無稽牽強俳諧之言。入於心

府。則恐終身無用。非特無用。恐其往々流爲邪魔外道。竟成墮落。故神明以顯不測而救之也。固何疑哉。大凡學術不正。非唯無益。而過愆非細也。昭々如此。得不戒哉。今年乃日本康永四年乙酉歲也。記之。又永叔と共に退之を難じて曰く、歐陽永叔曰。晋無文章。惟陶淵明歸去來詞。唐無文章。惟韓退之送李愿歸盤谷序。公論。歸去來詞。已嘗論。未盡也。信是觀其全篇首尾。可謂皆達道也。文不在茲。而俄中間道出消憂二字。猶一粒鼠糞汗却一釜好羹耳。若夫韓送李序。第能婉其詞語而已矣。何謂文哉。而且中間託愿之詞。區々志於得失寵辱。云々。韓之志。但在是。以爲大丈夫。何其鄙也。然此猶庶幾。至於至鄙。則曰曲眉豐頰。云々。釋仙曰。鄙哉鄙哉。孔子云。天之將喪斯文也。後死者不得與於斯文也。文乎文乎。と。又宋晦庵と陸象山と周子太極圖說の無極二字を論せる書を挙げ、晦庵を難じて言ふ、公論曰。道無二道。三教聖人。迭相啓迪。以冀萬有同歸耳。然得之者。有粗淺精深。迷之者。分彼此宗途。又實得之者。必不忘本。譬竊盜者。竊人之物者。豈欲言其自哉。而人言之。得無諱乎。又竊人之物。而必不得其深密大全者。觀其陸朱二子。自相洗雪者如此。明可見矣。又何諱哉。而其聊竊吾家之粗淺者。乃若是。惜其不得吾家之深密大全者也。又朱力諱之曰。而其所見所說。卽非禪道理。公論曰。信哉言乎。蓋且未易窺之。而又何能見而說哉。云々。蓋し我邦に在りて始めて深く韓氏及朱氏等を非議せし者、前に虎關あり、今又竺仙あり、當時學者研究心の一時に勃興せる其狀

亦以て見るべきなり。

五山の學徒は禪學と共に漢文學を輸入せり。然るに其二者の如何にして調和すべきやは常に一問題たりき。竺仙亦嘗て此問題に觸接して門人裔翔と問答の語あり。竺仙錄無量錄の後に附せり。今之を下に録す。

一日小帝裔翔侍者問。大凡作詩及文章。何者宜爲僧家本宗之事。師曰。僧者先宜學道爲本也。文章次之。然但能會道。而文不能。亦不妨也。翔曰。多見日本僧。以文爲本。學道次之。翔見杜子美曰。文章一小技。於道未足尊。以此觀之。况細流乎。故竊以爲恨。然如何學道可也。師曰。汝能知此。猶可敬也。我國之僧。有但能文。而宗門下事。絕不知者。人乃謂之。呼其爲百姓僧。若僧爲文。不失宗教。乃可重也。翔曰。翔於幼年。雖知此非。猶髣髴耳。殊於今年。眞實知之。乃單於學道之志有之。如何可學道去。師曰。觀汝今之問答。筆寫之語。亦乃一一可觀。此乃文也。知其事之非。此乃道之心也。以此二般之事。皆不在人之下。但以道爲大事。以文助之。乃可發揚。凡世間一切。不可嗜而執着之。道法雖大事。然若嗜而執着。成偏僻爲法塵。况文章乎。然譬如人食有飯乃主也。若復有羹。方爲全食。無羹之時。常免涸滯。而少滋味。以道之飯。得文之羹。百家伎能。爲菜爲饌。斯爲妙也。翔曰。六祖不識字。何用文章。翔不求菜羹。只得一飯爲足。師曰。此但隨其根器。不可強爲。若乃固有

天姿。亦不可自捨自棄之。無學則不可大發揚也。是故釋迦名文。佛無不通。方能降伏外道。制諸魔軍。又六祖不識。非不識。示不識耳。試觀其後來說法之時。沛然浩乎。如江如海。汝能及之否。翔曰。達磨云。不立文字。翔但欲學道。譬如造屋。不得棟梁不成也。不須多語。但以慈悲。願聞學道一句。師曰。達磨不立文字之語。人皆隨其語。而不得其意也。是它何曾教人燒毀却文字歟。若欲學道。但會得達磨者一句。道得之矣。何用它求。又據汝云。譬如造屋。不得棟梁不成。然唯得棟梁。而不用椽柱門窓之類。便成屋耶。翔曰。達磨不立文字。而於文中不立文字歟。如是則學道不離文字。若於不識文字人。豈不得學道歟。師曰。汝言而於文字中不立文字。并學道不離文字。是測度語。道與文字沒交涉。若心不得道。世間萬事。頭々は礙。文字亦是礙。若得其道。世間萬事。頭々は道。非礙也。文字亦然。識與不識。非礙道也。(下省)

竺仙の法語及偈頌數百篇、皆其門人交友の爲めに提示せしものにして、人をして深く其傳道の熱心に感ぜしむ。固より以て尋常詞章の觀をなすべからず。然るに其學殖富贍筆力雄健尙善く其人に副ふを見る。今別に中岩・別源・春屋・義堂・椿庭等の傳中に引載せし者を除く外、茲に若干篇を録すること下の如し。五山の文學を賞する者、既に仰いで其峰頭爛熳の美華を視ば、又宜しく伏して林下深沈の清泉を掬すべし。

送鳳禪者南遊

我憶南方舊知識。夢寐只今忘不得。幾霄攜手入無何。白日堂堂觀顏色。黏空碧海連三山。春煖吹暖晴波翻。我有懷思不解寄。無能爲駕飛雲軒。鳳兮鳳兮向南去。自與群飛不同趣。一鳴一止知幾秋。爲吾寄此無言語。

贈澤禪友甲州人

櫻花如雪還如雲。東風墮片成紛紛。分明熾然說實相。大音塞耳誰能聞。甲天下士澤禪友。雲夢豈止吞八九。三世如來只一口。只合个事誰解知。笑指花樹君掀眉。

送澤侍者

門前大道長安路。千人萬人行不住。我自從來不出門。奚堪贈子京師去。塔前灼灼黃金花。夜霜已著紅粉加。盡日相看笑復語。能回冷臉生丹霞。昨霄語我君應至。遲君共說參同契。出紙胡爲索贈言。來因少詰天淵異。去去去無奈何。爲君一曲風前歌。

因熱戲成示葩侍者

不知今日如何熱。呼著南薰不肯來。幸然座中有好客。解衣攜手登高臺。東溟在眼南嶽遠。蒼波有

路青天開。只消坐地遊八極。一塵不動心悠哉。春屋聞此亦撫掌。颺颺万木聲喧颺。

關禪人

透得祖師關。十方恣來去。佛亦不奈何。覓甚閑言句。富士山頭雪千尺。蘇公提畔柳搖碧。閱盡中間來去人。不爲滄波限南北。作字送君行。問君作麼生。春光正明媚。意外啼黃鸝。

小師裔翰侍者

前度去復回。今番再欲去。一片堅固心。已把生鐵鑄。不知爲何事。若此苦專注。雲從頭上飛。龍向脚下過。走徧四天下。不知蟻旋磨。万里海浪吹天風。手援真珠撒龍宮。蚩尤播旗女媧舞。冰夷擊鼓聲隆隆。聽不徹喜自如。看不足歡有餘。居常何曾有此事。懊恨百劫徒守株。船到岸萬人看。歷徧南方知識門。飯來與汝重相見。

自

贊(三首)

黑漆禪板金剛劍。黃錦袈裟弊垢衣。面前指出大寶藏。虛空產下崑崙兔。(以上文學全集不收)

自題妙高亭(三首)

到此虛空最山巔。却於足下看青天。德雲行處日卓午。照見別峰橫翠煙。

訪僊不用蓬萊山。際天海路何漫漫。飛車固足不憚遠。蓬萊今只居人間。語君豈不歎唧唧。免人遠涉勞稻々。世言弱水三萬里。若果止此胡爲艱。是路不可以程限。是山亦非嶺與岬。我以是說嘗自

樂。高歌獨步清溪灣。溪澗遊魚亂無數。似聽我歌越作團。我歌復拍魚再躍。我嗟魚慧人何頑。我歌魚遊誠一揆。魚心我意非兩端。魚能聽歌復聽語。語以咄々千萬般。或謂蝸居坎井窄。或言龍出滄海寬。或謂塵世鬧而擾。或言仙境清且閑。我今有語或時默。魚斯出遊何當還。魚聽語竟去不聽。我觀魚已空無觀。涉波探澗竟無跡。但見怪石如峯巒。狀勢拳奇勝蓬島。巉巖屹立清溪湍。從茲懷袖有滄海。便知此地非人寰。上苑名園種桃李。長條小朵爭折攀。紅白芬芳一時好。艷陽寧耐天風寒。十洲春色頗為勝。數盡亦見花凋殘。何如得此一拳石。凜然相對長怡顏。蓬萊只今在人世。我先有語非相謾。我昔憐君乏盛饌。以此作供希忘飡。不知邇來解飽否。冰盆酌水莓苔斑。

次韻答別源首座盆石石印師乞與者

何處來颺風。萬事如轉蓬。乾坤亦不定。道路成汗隆。盡願作輪穀。不聞彈絲桐。南北阻且遠。推入羊腸中。

擬古三首次中巖首座韻

飛廉撼海嶽。扶雲開穹蒼。欲我觀白日。令人依重光。兩眸正眺望。六合忽開張。照見萬種類。汰淘或播揚。批糠及砂礫。重輕各有常。如何此大明。不燭錦綉腸。問天騎六龍。同遊白雲鄉。

同右

常思謂靈運。掛席拾海月。匪從滄溟遊。却作塵埃沒。每愛李太白。天然有仙骨。縱不騎鯨魚。高

飛跨鳴鶴。同右

東風正吹暖。麗日方融融。名園鬪花卉。刺眼爭白紅。何人種綠玉。挺々森作叢。寒梢滴煙露。高節凌雲空。豈無青鸞紫鳳時來集其上。使我側耳細聽引頸長相望。人間久絕簫韶音。燕語鶯吟雜歌唱。又復野草芳菲。連天峰蝶知幾何。厥性不與綠玉和。瞻彼淇奧念君子。風前彷彿聞鳴珂。下有龍孫露頭角。解々滿林人未覺。豈是人間桃李蹊。風吹未斷花先落。

春景晴竹(畫竹四首之一)

萬本脩篁綠參錯。太半長梢解新籜。三時甘澤飛清涼。千畝渭川滋廣莫。濛濛遠色天外來。壓林雲影空中頽。但見植物氣霖霖。不聞流水聲喧喧。葉々枝々翠藍滴。娟々濯々琅玕碧。蕭騷渾似作龍吟。便恐擊雲去無迹。却愁七賢六逸無所居。又愁世沒虛心抱節之者將何如。忍見人間惡草木。彌道周途滿山谷。不可一日無此君。自欲舉手披青雲。

夏景雨竹(同右)

曾襟流出。蓋天蓋地。不在苦思。着心用意。佛祖之道皆如斯。後生末學多未知。區々不用習言句。卓々但與曾襟期。擘開雲霧。放出日月。萬像森羅有許多。照古照今俱照徹。襟禪人筆端說法風雨快。風雨說法筆端疾。筆端風雨無兩般。風雨筆端元是一。識得一萬事畢。風兮雨兮在吾筆。世上人因風雨二首

竹枝搖搖拂空翠。清風憂擊琅玕碎。竹枝搖々在吾牖。清風憂擊來天外。竹枝清風兩相得。清風竹

枝參同契。 同 右

含暉室記

丁丑歲薦。余以含暉二字扁茲。以備退居之室。弟子請問。乃謂之曰。此地既高而南面。行天日。迭相繼以往來於牖窗窗之間。內入其景。充滿四壁。常照乎而晃然。又於修營之始。障隔皆以楮素。工人愛美。加飾雲母。是故雖雲霧晦昧之宵。天地萬像。莫不皆如聚墨。而此不變。益滋虛白。因觀是勝。乃思人含德輝。猶若是歟。眷我無之。不勝慕尙。既慕尙之。欲時內照。洎訓爾曹。著茲光大。由是而立。弟子曰。唯揭是扁之。未數日。余於寺方丈。夜夢偕數士有分韻之作。然當夢時。未始有記所謂扁事。俄而先成第二句。曰。照世不滅千年光。覺亦哦之自喜。然亦不知何也。復數日。乃欲記其所扁之事。輒憶是句。而深省之。何其祥耶。抑是扁之休徵乎。然我無德。曷有是哉。或吾後世。有進修者。而能致歎。不可無聞。竟續其句。并刻以示將來云。夢中得句何吉祥。照世不滅千年光。願我暗短豈足發。宜爾子孫當自強。

此外與南禪夢窓和尚書。與伯耆殿書。天源庵記。東明和尚塔銘等長篇の散文あり。

來々禪子集は竺仙東渡以前作る所の偈文を收めたるものにして、門人裔翹等の編する所に係る。今東大圖書館別置の五山版は一卷一冊元弘元年の刊本にして、首に金陵鳳臺の休居叟の序文あり。未

長汀の祖銘廬山の悟心通江左の思庵等の跋文あり。其作竺仙錄に見ゆる者に較して、跌宕華麗なるもの多し。左に其若干首を録す。

春風拂々吹日晴。春禽磔々啼窓曙。不把黃金鑄脊梁。笑握青絲織行履。洞裏碧桃花正開。餘香散入菩提樹。擬將天上一枝春。植向南山最幽處。 送風旛寺維那之雪峯

登廬山。登廬山。問廬仙。冷然足躡香爐烟。廬仙在何處。白雲空翩翩。我恐廬仙厭人世。乘雲直往三韓外。不然跨鶴出九州。去赴王母蟠桃會。廬仙不可見。使我心茫然。瑤池九醞漿不願飲。穆王八駿駒休着鞭。人生誰滿一百歲。蟠桃結顆三千年。登廬山。登廬山。廬山高哉。上與浮雲連。金輪貫白日。銀河落青天。擾擾路傍子。無路難蚤緣。君不見五老當年足無力。東南山頭化為石。青天出古面。碧削金芙蓉。宜哉謫仙子。愛此巢雲松。千岩過雨雲錦爛。九江浴日玻璃紅。義和擊玉鞭。隱耳聲隆隆。我本江海客。抱衾眠絕頂。雲蘿生翠陰。松泉寫清聽。梅花入句冰雪香。天風吹人骨毛冷。噫噓噓發深省。回望人間一點烟。百年大夢知誰醒。鑿々青山石。搖々白蓮花。不入帝子宅。偏向山人家。惜哉山中十八士。玉骨埋雲呼不起。一笑空山百世驚。何如一擊天池水。登廬山。登廬山。何當一日力拔之。万里扶搖獻天子。

登廬山天池寺白雲亭作

白月墮江碧。照我雙眼明。馮夷執玉筋。敲作玻璃聲。

題月江吟卷

思入青霄落筆遲。黃金誰把鑄鍾期。玲瓏古月無顏色。春入扶葉花滿枝。

讀子元禪師偈頌

沉寥無雲秋氣清。霜花肅々風冷々。天門夜開桂子落。寒蟾驅轂來中庭。琉璃窓扉照玉几。冰壺田

地無塵土。一色明邊眼似眉。万象光中看吞吐。

月軒

明月皎夜光。竹影金鎖碎。幽人起中庭。耿耿曉不寐。美人無音塵。千里隔嶺海。會面不可期。浩

歌聲一再。清風來天衢。白露滴襟毳。脈々不復言。清光冷相對。

對月得對

幽居在空谷。足音不到耳。佳人咫尺間。相去如萬里。清風搖窓扉。白月墮書几。結以無情交。無

憂亦無喜。茫茫蒼海深。復爲清淺水。悠悠世間人。誰能共生死。尺書天外來。如風月相似。月下

坐讀書。清風來不已。

謝懈庵藏主見寄

渥注水中天馬駒。稜々逸氣凌九區。墮地生成萬里骨。駑駘不可爲之俱。當爲騰崑崙歷西極。飛電

流雲展龍翼。乾草嘶風不解趨。絡月羈金徒好色。男兒心事當如何。拏雲勿使成蹉跎。我身飄々幾

千里。足未越門心已死。赤烏白兔頭上飛。清水黃塵眼前起。地下蒼生望霖雨。無人爲挽天河水。

九堰三江歸去來。解跨龍頭撻龍尾。

送先侍者歸明州

谷鳥聲嚶々。日脚紅酒々。杖屨行曉春。青烟破晴野。流水何茫茫。滔々不知止。落花亦無情。傳

言寄流水。滄海深無底。下有明月珠。行邁壯心在。拔劍斬天吳。

行春三首得野水

會面且驚笑。詩成人未知。飛笻千里外。落筆九天時。身世青山老。乾坤白日移。故園歸未得。鯨

浪不煩吹。

次韻蒼鄉里故人

女媧煉石補天闕。只今餘塊遺空山。山空無人護雲物。千年石罅莓苔班。石老嵌空亂積鉄。五月嚴

寒樹枝折。有主人兮臥幽亭。午簾紛々落蒼雪。主人愛石復愛松。靜聽疎雨敲溟濛。一笑披雲觀萬

象。健吐吐出崔嵬骨。清風天來海波立。露脚斜飛毳袍濕。黃狐跳梁白鶴飛。岳精驚矯波神泣。清

風清風開天關。白月飛下紅闌干。就借吳剛斫桂斧。乘風一鑿崑崙源。

友竹山亭(有別)

千山万山立寒碧。五月六月飛清霜。誰倚闌干叫橫玉。綠蘿風散青蓮香。

題凝翠樓

西山青不到珠簾。金彈斜飛落畫欄。帝子不來歌舞散。曲闌干外雨纖々。

勝王閣

祖銘の讀竺僊吟藁に曰く、掃右出古色。洗松納空光。寥々千載心。坐哦寒林芳。夜讀竺仙詩。白月

照窓面。寒梅摘氷花。細嚼不忍嚙。

第九章 石室

中岩に接踵して福鹿の間に優遊し、室町文學を蘊釀するに與りて特に力あるものに石室あり。

第一節 傳記

石室名は善玖、姓氏を詳にせず。筑前州の人、文保戊午、古先・無涯等と同船入元、一時の禪匠其の門を敲かざるはなし。久しく古林茂に金陵の鳳臺に參して遂に許印を稟く。嘉曆の初め諸友と偕に東歸す。特に竺仙南禪に來り榻を拂つて待つ。會々中巖月萬壽の席を退く。麓下の道舊疏を封じて補せしむ。室の謝中岩寄書の偈あり。曰く、背馳南北未相逢、滿幅繁然詞意濃、雪鶴冲天望逸翮、冰蟾印水想清容、虛明絶對一機密、眞照無邊萬象融、雖是報緣屬虛幻、愧將浪迹繼高蹤、と。尋いで天龍に遷る。和合僧中悉く禪化に歸す。大梅山の清涼塔新に御筆の額を賜はるや室を請じて陸座せしむ。其の慶讚の語に言ふあり、圭章灑九天之雨露、寶墨吐萬杵之馨香、廓爾殷盤周詰古篆、發揚隋珠趙璧耿光、豈啻山川現瑞、便看龜龍呈祥、親遵太上法皇尊師之遺訓、忝慶同門諸子選佛之靈場、直得毫芒未動、文彩自彰、云々。鎌倉の元師左典厩足利基氏其の道華を聞き招くに圓覺を以てす。室錫を持して移住す。義堂絶海相得て友從す。義堂の空華集及び日工集其の往來應酬を記すること甚だ詳なり。應安元年建長に遷る。住持すること六年。日工集應安六年五月十日の記に云ふ、石室和尚來話、及西來門下並建長荒落、因歎云、吾今年滿八十矣、如枯木寒岩、余曰、枯木再開花也、石室呵呵、と。室印を解きて福山の側に金龍庵を構へて居る。又日工集同年九月一日の記に云ふ、作詩送松茸十莖、上

金陵石室和尚云、大如紫蓋小如釘云云、石室即和、八十老牙咬鐵釘、と。又同十二月二十九日の記に云ふ、石室夜話、余出立春和什而爲壽、曰年踰八十髮如銀、一笑能回萬物春、云々。永和元年檀越平林寺を武州の巖築に建て、室を延きて開山始祖と爲す。時に義堂、室に寄するの書に曰く、不拜道容、忽爾兩歲、每欲趨叩丈室、奈何爲奇疾所纏、寸步艱難、但引頸增仰斗之戀而已、昨者聚首座、至出示尊染、薰讀字劃適壯、乃喜和尚年踰八秩、法体彌堅、猶爲來衲子、弗倦於提獎也。仍蒙示及兵部再任之賀、惟劇職大任、造物者所靳於人、而急流勇退、眞箇良計也、爭奈他爲東西兩府公命所迫、弗得已、復領舊職矣、第未知前途如何耳、茲者伏承、邦國不幸、前賢檀備州太守太田公、奄捐館舍、烏乎吾佛氏之道、付囑有力檀那、凡爲佛子者、孰不爲之痛惜哉、況在和尚、三生香火、追感之情當如何、然太田公有子、或爲官繼業、或爲釋嗣法、則和尚法道之所寄、綿綿續續、華宗慶緒、其來未艾也、伏乞寬仰、以延天下法門之壽、乃幸焉、某以疾憊未由趨慰、先遣周東代謁奉慰、萬々自齋、不具、と。又同三年九月二十八日の日工集の記に云ふ、平林石室和尚、寄一偈賀余再住黃梅云、南陽翠竹伴黃梅、祖父田園絕點埃、看取龍天推穀手、豈無鳳詔入雲來、と。康應元年九月二十五日寂す。春秋九十六。室元に在る時崇報の行中仁と友とし善し。行中の謙上人を送るの偈に、若逢石室煩通問、歲晚南湖學種蓮の句あり。法嗣に大義詮あり。豊の萬壽に居る。

第二節 著述及び詞藻

日工集應安二年五月十六日の記に云ふ、赴建長方丈。石室請弓庵和尚。有聽松堂詩。曰。世無寒山子。好音誰解聽。石室和曰。雖無寒拾輩。虛空側耳聽。二首共貼聽松軒左右。時石室話曰。有一秀才。持仰山虛谷書。過元叟和尚於靈隱。時知客不容通信。秀才以詩呈方丈曰。紛々松子落清虛。路入泉聲十里餘。爲報上方知識道。有人來獻仰山書。元叟視驚接。次日上堂說法次曰。今時知客不具眼。徃々失人。と。蓋し石室宿老を以て福鹿の間に居り文字を商量して後進を誘導して倦まざりしなり。又同書同月二十日の記に云ふ、赴建長正統庵忘齋。告主人無礙、住持石室曰。天津橋新成。但恨有境無人。人境兼備。非兩和尚而誰乎。請攀一覽亭。例作偈偈于橋左右。千載嘉話也。云々。今石室錄を檢するに天津橋の七律一首あり。曰く、

截流橋北天津上。千尺紅霓架彩梁。玉殿瓊樓開戶牖。蓮華荷葉滿池塘。只知群褐擁香霧。不覺飯筇逐晚涼。猶有餘生屬嘉賞。古皇天地任行藏。

石室錄一冊東大圖書館所藏別置寫本あり。其目は孝禪聖福萬壽天龍康德建長平林諸寺語錄、陸座、拈香、法語、祭文、題跋、像讚及偈頌等とす。像讚に竺仙・天岸・天神・少陵等あり。今其偈頌中誦すべき者を下に選録す。其句吻の如何に義堂と相似たる所あるやを看取すべきなり。

占斷蓬萊弱水東。老禪方丈在鼇峰。寒潮打碎高崖月。薄霧遮欄遠浦松。仙閣琳宮曾漠々。浮幢玉刹幾重々。昔年我也漫遊輩。慚愧鷗盟鷺約濃。宿清見寺寄無二和尚

大方叢席大人境。小艷詩辭小玉聲。八九月風秋萬里。金雞一拍入京城。送乘侍者之京師

尤愛友山陪石翁。半生漂泊幾西東。包含美玉積苔綠。趣取新詩落葉紅。十載清風孤嶋外。三秋明月短篷中。後期莫負重陽節。共擁禪袍對菊叢。送友山益首座行

妙喜庵中不動尊。分身占斷別乾坤。一庭瀟灑遊涼月。六戶玲瓏燦曉暎。類聚群飛皆燕雀。搏扶獨化是鵬鷗。岩翁同人鳳臺室。把手何時細討論。寄葉侍者兼簡岩翁和尚

我別金陵三十歲。蔣山何識在豐州。飛泉岩樹青猿境。明月蘆花白鷺洲。遺弟弊衣裁布褐。阿師靈骨寄扁舟。孝情金石如君少。萬里歸程海國秋。送選書記奉師翁大同和尚遺囑歸豐州

行計匆匆何所圖。關山秋老入清癯。千年翠柏偃龜谷。九日黃花競帝都。蛩咽岩莎霜氣重。雁飛銀漢曉聲孤。天章一々露文彩。莫道南翁餘韻無。送嘯雲記室行

見色明心觀自在。聞聲悟道豈由佗。海門夜月群鴻叫。武野秋風花草多。送觀誰那之武州

貞治三年三月三。月翁招我宿龍庵。畫屏華褥分賓主。茗椀薰爐助笑談。騰踏峯巒看瀑石。推開戶牖數松杉。明朝飯路春霖霽。又喚征鞍穿翠嵐。宿藏龍庵寄月翁和尚

石人説偈爲何人。須送石翁飯武林。皎月對窓如有約。問雲出岫本無心。胸中文字五千卷。筆底波

瀾萬丈深。譬若衆流投海會。師資道合去來今。送石翁藏主飯武林

我聽信陽山水窟。古來往々出佳人。懷中小玉連城價。堪笑盧公自鬻薪。

送中岳立侍者省勤菴翁和二首

第十章 龍山

傳記

龍山名は徳見、總の下州香取郡平氏の子、桓武天皇の裔と稱す。母氏娠む時日輪を吞むと夢み、母胎に居ること十三月、既に生れて聰慧、俗に混ざるを喜ばず。年舞勺に至りて相の壽福に投じて寂庵昭公に師事し、法華を暗記して復習を勞せず。思慧夙薰、最も義理に通ず。傍ら外典に通じて五車該覽す。庵歎じて再來人と爲す。十七にして滿律戒を具し左右に服して難む色なし。一山に鹿山に參謁す。同じく掛塔を求むる者四十餘員。一山禪床を指して曰く、各試に頌を呈せよ。可ならん者は參堂を許さんと。龍山筆を援りて立ろに成る。即ち侍司に居らしむ。年二十二、志を發して南詢す。寂庵遠遊を許して心印を密付す。維の時蒙古我國を嫌惡す。舶四明に達して著岸を許さず。山謂らく、古人法の爲めに軀を亡す。今正に是秋なりと。夜潜に城に登りて身を雉堞より投ず。豪貴の庭に墮つ。

守卒擒捉す。家主問ひて曰く、何に因りてか此に至れるや、と。山筆を索め書して曰く、我日本に在りて天童和尚の道風を聞く。故に遠く來りて將に禮拜せんとすと。其人素より宗門に歸するもの、乃ち山の悃誠を憐みて官に白して免るゝ事を得たり。携へて天童に登りて具に來由を陳ぶ。住持東巖深志を嘉して歸堂せしむ。既にして辭して吳門に往きて東洲古林に謁し、又江西の諸名山に遊びて錫を匡廬、東林に駐む。分寧に至るに暨んで平山、濟州相續いで雲巖に住す。山を留めて分座す。四方仰抱す。州守擧げて兜率に住せしむ。時に寧州の官員諸山の香宿、香華旛蓋を備へて護送す。一居十年、百廢具に擧る。議者謂ふ、悅禪師の再來なりと。事を謝して大龍翔集慶寺に寄客す。笑隱訥公榻を下して待遇す。寧人類に乞ひて再び兜率に歸らしむ。本朝に返るに及んで歳六十六、貞和五年に當る。左武衛將軍足利直義請じて洛の東山に住せしむ。大將軍尊氏奏して南禪天龍を主らしむ。徳臘俱に邵くして公侯士庶塵を望んで拜伏す。三大刹を歴て大いに禪風を開く。朝廷其の聲價を聽きて特に眞源大照禪師の號を賜ふ。延文三年中冬病に遘る。十二日沐浴して寢ね、中夜に起坐して新淨衣を披し遺誠數紙を書し、侍者の請に依りて偈を書して曰く、西涌東沒、南往北來、末後一句、掘地深埋と。起ちて戶外に出で月色の已に斜なるを仰ぎ、復た座に歸り偈尾に十一月十三日と誌し筆を放ちて化す。春秋七十五、門人全身を東山の知足院に窆し塔を樹て、靈淵と曰ふ。師靈の贊に曰く、古稱丈

夫蓋棺毀譽正定、若夫出世悟達之人、日用現前、自然契規、待蓋棺、堪作甚邪、眞源禪師、爲法南詢、捨身戟城、卻免死難、異域本邦、轉大法輪、其末後去就、復甚奇異、可謂初中後前、生死去留、脫著自由也、延文四年圓月其行狀を作る。(續群書類從傳部に在り)。

第十一章 乾 峯

第一節 傳 記

乾峰名は士曇、一に少雲と稱す。筑前博多の人、母才子を求めんと欲し志賀島の文殊に禱る。大士劍を持して其胸を割かんと擬すと夢みて覺めて即ち娠む。生れて頭に三峰を起し、眼電爛の如し。幼にして神異、經書目を過ぐれば善く記す。十四にして承天寺に入りて南山和尚に謁せん事を求むるも人の導引するなし。乃ち艸上に坐して尙書を背誦す。山聞いて之を異とし爲に蘊染稟具せしむ。山に鎌倉の諸刹に侍し、又佛國に淨智に參し、又建長に掛塔して明極に謁す。極其の氣宇を見て口を極めて稱して曰く、浙の東西若のごときの人を見ず、意はざりき遐方に亦奇物あらんとはと。擧げて版首に居らしむ。結制乘拂一時の酬唱人口に膾炙す。元弘の擾亂を避けて上野の山院に寓す。院に大般若經六百卷ありて兩軸を失へり。峰暗記する所に依りて之を書す。後別本を以て對閱するに一字を差へ

ず。再び明極を南禪に訪ふ。極命じて洪鐘を鳴らし、海衆出で迎へて、請じて首座寮に入り分座乘拂せしむ。尋いで南山を省するに及んで會々府帖を承けて相の崇壽に出世す。洛の普門、安禪、東福、南禪、相の圓覺、建長に歴遷す。文和四年相より洛に歸る。詔ありて入内す。帝清涼殿に御して演法を聆く。丞相藤公菩提院を翹めて峰の壽塔と爲す。峰性純誠靈異多し。賀茂の明神入室受戒、北野天神贈筆求書等の奇夢あり。大將軍足利義詮も亦先考仁山居士の爲に之を請して陸座せしむ。康安元年臘月十一日偈を書して化す。曰く、馬鳴出西天、龍樹入東海、聖箭已離弦、猶有返回勢。世壽七十、全身を菩提院に寔す。塔を大定と曰ふ。南禪に在るを龍興と曰ふ。敕して廣智國師と諡す。

第二節 著述及び詞藻

乾峰著す所に見性義記拔關要及語錄あり。今史料編纂掛所藏廣智語錄五卷五冊は京都東福寺中大機院藏本を傳寫せしものなり。文政元年東福の靈巖の跋文に依れば、享保文化の間諸納刊行を圖りしも成らず、茲に至りて始めて工に命じて上梓すと云ふ。第一卷頭に乙未三月乾峰の自序あり。次に崇壽普門東福安禪南禪圓覺建長の諸語普說小佛事陸座拈香を收め、第二卷に法語序跋銘記疏、第三卷に祭文乘拂贊頌古、第四卷に偈頌、第五卷に偈頌畫圖行狀等を收む。内容豊富、其中散見する所の語を檢して其友の及ぶ所を知るを得べし。即ち鐵庵・明極・清拙・雪村・竺仙・虎關・夢窓・蒙山・鉄牛・無極

無涯・可庵・東陵・嵩山・義堂等の名を擧ぐべし。乾峰の學殖は淺からざるが如し。其の鼎足記に云ふ。又問三教一致之耶。答云。釋治心。道治身。儒治國焉。語曰。夫子之道。忠恕而已矣。忠也者。中心也。顏淵曰。仰云彌高。鑽之彌堅。瞻之在前。忽焉在後。是乃体之起用也。仲尼意在不涉体用之際。言中心也。道德經曰。道可道非常道。自此第一之章。至于八十三章。皆成中道之義也。云々。又問莊周大意如何。答云。地形之大也。我形亦爾也。生于虛無之中。只論齋物而已矣。夢也。未達本郷也。と。其の已に宋學の影響を蒙むれる所あるを知るなり。其文詩に至りては語句踈鬆往々脈絡の明暢を缺ぎ合作として誦すべき者幾ばくもなし。然るに其筆致髣髴として王朝時代幽淡の風氣を存せるは亦一奇と稱するに足る。蓋し其尙ほ六朝の文体を模倣したるに因りて然るか。集中間々潘岳を説く所あるを以て之を知るべし。斯文の變遷を考ふる者の等閑に看過すべからざる所なり。乃ち今其數篇を録すること下の如し。

悼高麗剛死僧軸序

嘉曆元年。渡元而來朝之商舶。以碍耽羅灘上橫波之石。而有無柴燒無水飲之患焉。越乎。相州龜峰遠上人。率其衆七十士高麗原上。以樵以汲。彼島居卉服之仇。濫誤疑混戰而爲害矣。遠也中弩而死也。麗之縣令。以事聞于大元皇帝。帝詔理于舟楫。實以宿春之糧。送逃之士五十餘輩。得再

歸矣。於是。其法門之弟印侍者。哭也有懷。寫復驗經頌。以伽陀吊慰其靈。其志至矣。故同遊之士。長于作者。亦屬而和之。書成玉軸。請予爲序。予曰。夫人聲之精者爲言。文辭之於言。又其精也。稟氣太龐。爲言所不能也。侍者曰。豈不見以音聲求我。是人行邪道。抑不獲已。以書其首。

聚遠亭記

貞和五年八月十八日。余也謝事於洛之南禪之丈室。卜居於近于南都之淨籃焉。一日閑行諸子隨步。尋幽選勝。參雲捫蘿。高登後峰。上有隆屋。且休且歇。瞰南瞰東。冠乎三國。東大寺塔抄入簷牙。蓋于三笠。春日社山色橫窓眼。衆峰獻碧而臣伏。酒空翠。浮晴嵐。名河揚清以朝宗。挂蒲帆。載柴艇。千村萬落。琪林玉樹。九秋千畝。秀穗嘉禾。不籍縮地之方。皆爲欄干之物也。昔東山祖題曰。眼觀不足。耳聽不盡。故取聚遠。重扁斯亭云。老邁何勞獨望州。三千里外一雙眸。如今着襪歇行脚。天下名山在屋頭。

富士山并序

夫子登東山而小魯。登泰山而小天下。余也見土山而大扶桑者也。

大地攝來無寸土。當空還見此山成。海寬纔蘸半邊影。多少虛舟載雪行。(行狀云此係十九歲時所作)

誰把滄溟置太虛。風濤日夜激雲衢。蔭涼大樹非凡木。料得此聲天下無。

聽松

閱竺仙藏主文集名々禪子

時哉粟雨零扶桑。靈毛狡兔多奔忙。山川應是地理志。日月得非天文章。不惜寸陰珍尺璧。子衿莫入歌聲長。載道之器人自缺。教外之旨終無彰。西來萬里駕巨舶。何啻楞伽重發揚。金鑰銀鑰開大藏。左之右之提宗綱。士峯冰雪增寒色。青海波瀾添藍光。湯惠休兮非虎豹。洪覺範兮非鸞鳳。千年一出世罕遇。來來禪子能參詳。

次文侍者韵寄雪村藏主

遙聞彼神州。山川浮古色。聖賢間出興。宗說俱非臆。鸞鳳栖梧桐。鷓鴣竄荆棘。我也欲奮飛。路遠海天黑。時有偏參人。知識尤明白。多幸坐相逢。今夕是何夕。

失題

二十年來兩度過。寧求岑寂避誼譁。山幽猶是聽啼鳥。風定却還多落花。

得月樓

近水一層臺。簾櫳波底開。明蟾推穀出。吟客倚欄來。海嶠誰凝望。雲衢人未回。廣寒宮不遠。階下幾裴回。

第十二章 無涯

傳記

無涯名は仁浩、姓譜考ふべからず。羽州の人なり。鐵庵生公の印を得て錫を攜へて元に入り、姑蘇・金陵に、名宿に謁して歸り、肥の淨土、相の東勝、洛の建仁に住す。延文四年正月初四日を以て建仁の永源庵に寂す。壽六十六、塔を寶明と曰ふ。

第十三章 無文

第一節 傳記

無文名は元選、後醍醐帝の皇子なり。母某氏懷妊の時潛に宮を出で、元亨三年之を洛西梅津の私邸に産み、之を第五橋邊に棄つ。一士人あり。之を拾ひ得て家に育す。文幼にして容貌殊特にして清真畫くが如く、跣坐を好んで嬉戲を事とせず。七歳にして乳媪を失ふ。文慈戀して輟まず。人其の故を問ふ。答へて曰く、死は人の常なり、何ぞ哀むに足らん、而るに渠れ女身を受けて未だ一善を修せずして往く、是れ哀むべし、と。聞者駭異す。八歳山寺に入りて内外の書を読む。天資穎敏にして師訓

に由らず。世神童を以て稱す。十八にして父母に懇請して建仁に至りて明覺禪師（名は鑑字は明窓）の塔を拜して鬚髮粟具し、可翁然、雪村梅二老に親炙し日に資深に至る。康永二年二十一歳南詢す。路筑の聖福を経て無隱晦に謁す。隱慇懃に指南す。辭して元通等と洋に浮びて温州に著く。元の至正三年なり。偶一官人あり。頗る敏博と爲す。文與に語りて益を得て淹留すること數日にして譯語相通ず。乃ち金陵に往きて笑隱訢に龍翔に參す。七年春建寧の大覺寺（敕して妙智と額す）に往きて古梅禪師（正友）に參見し、印記を受け、又仰山に到りて子有有に謁す。命じて侍司に歸せしむ。尋いで南堂欲、千巖長、楚石琦等に見ゆ。至る所皆偈を贈つて之を稱す。元に留まること凡そ八年、名區を歴瞻して天台の方廣寺に遊び、應身を石橋に拜し、徳山に往いて祖塔を拜し、石霜、道悟、浙江、補陀に至るまで跋涉殆ど遍ねし。至正十年義南菩薩、碧巖聚首座と明州に解纜し數月にして博多に著く。本朝の觀應元年にして文二十八歳、明年春京に入り、冬相陽に赴きて中岩月と古先（印元）を訪ひて左武衛に謁し、再び京に歸りて居を西山の巖倉にトし扁して歸休と曰ふ。檀越巨莊を施して建仁の普光庵に住せしめんとせるも辭して就かず。濃の武義に抵り茅を縛して亦た歸休と號す。居ること數歳にして參州高橋の高澤庵に移る。禪侶蟬集し士庶靡然として化に嚮ふ。時に遠州奥山の是英居士（藤原朝藤稱奥山六郎次郎）衆に隨ひて參し招くに所居の地を以てす。至徳元年文錫を杖づいて奥山

に至り其の深遠を喜び茅を誅して居り深奥山方廣寺を創む。雲水幅湊して五千指を下らず。澗飲蔬食して遞に相警策す。復た濃の椿洞に往きて了義寺を開く。包笠跡ね來る者三萬指を下らず。女性慈仁にして曠る色なく、前後諭導すること三十年、遠近崇仰し、兎童走卒と雖も路に逢へば則ち膜拜す。晩に奥山に歸る。雲衲慕ひ來りて二千人に及ぶ。康應二年三月二十二日寂す。春秋六十八。遺偈に曰ふ。生乎顛倒今日即當、末後一句雪上加霜と。又曰く、生如出岫雲、死似行空月、一念認性相、萬劫繫驢橛と。本山に塔す。其の自贊の語に曰く、老倒禪和年七十、袈裟撩亂髮鬢鬆、一生未蹈利名地、千古無隨凡聖蹤、出定經行雲起石、焚香默坐露垂松、僮儂要見我真相、五彩圖成渾不容。無文の傳記は師贊の延寶傳燈錄、日本高僧傳に載する外享保十三年祖秀刪定の行狀あり。行狀の後序に依れば、初め行狀舊記あり。寛文年中に至りて一超なる者増補せるも、紕繆あるを以て更に之を考定すと云へり。此の行狀書一冊明治二十八年帆坂某無文語錄に附して東京に刊行し、末に岐陽（方秀）の應永己亥の方廣寺法寶輪藏記を附せり。今専ら此書に基づき高僧傳を參照して右傳記を綴り成したり。

第二節 著述及び詞藻

高僧傳に云く、選提唱之語不傳、唯遺禪詩數首耳、題廬山開先寺曰云々、後見蓋し師贊未だ文の語錄の傳存せるを知らざりしなり。又其贊に曰く、選公蚤問諸夏。虛往實歸。匿王種姓。修杜多行。不窺北闕。

不赴南朝。深逃巖谷。曠懷水雲。龍象數千。常隨高步。道德之成人也。一何多哉。至其風什。自有盛唐之格律。是特胸襟風露。任運流出者焉已。と。今傳ふる所、無文元選禪師語錄一冊(東大所藏)あり。即ち前に見ゆる所帆坂某の刊行に係る。首に無文の肖像及び文明庚子友勝の眞蹟あり。次いで享保十三年天龍の性琴妙心の道忠及び日州の古月禪材なる者の序文あり。末に建長の玄瑤方廣の知融の跋文あり。内容は首に深奥山無文和尚語下と題し小佛事の語を以て始まる。蓋し其崎冊にして完本に非ざること知融の跋文中説く所の如し。小佛に次ぎて偈頌あり。次に道號及び讚あり。其偈頌の數僅かに二十七首を見るのみなるも、純雅高調亦以て當時の珍と爲すべく、師贊の言誠に錯らざるなり。試に左に録する所を看よ。

綠樹陰々五月天。黃梅枝上雨連綿。疎簾捲起江村暮。滿座薰風氣爽然。

山中偶作三首

五月初頭梅未黃。參差夏木繞禪房。閑吟緩步風前立。架上薔薇著雨香。

同 右

皇都城外西山寺。白馬青袍爛熳遊。花底題詩逐胡蝶。沙頭酌酒散羣鷗。落花吹雪東風急。瀑布穿

雲江水流。聞説先王駐玉輦。從官列道祝千秋。遊龍門寺

艸堂秋夜坐簡然。山月當軒清弄妍。五十年來閑妄想。樹頭風過小窻前。

山中偶作二首

獨坐寒牀嘆古今。青燈白髮動愁吟。窻前一夜芭蕉雨。滴盡江湖無限心。

同 右

深沈蘭若西山下。樓閣重々結構牢。平野星低侵露冷。前峰月上挾霜高。一江流水自愁色。萬壑松風亦海濤。禮誦聲長天欲曉。滿溪雲氣濕方袍。宿法輪寺

寒牀靜坐向深更。萬壑風生松有聲。莫道山中無快活。紙衾柴炭適吾情。

山中偶作二首

白髮山人睡自微。霜風一夜怯單衣。寒窻聽雨天將曉。開戶方知黃葉飛。

同 右

杖錫飄然歸舊山。松杉寂々避人寰。滿庭黃葉無人掃。唯有閑雲自往還。

再歸舊隱二首

秋風白髮蕭々至。門外塵埋路更深。與我青松如有約。於今不變歲寒心。

同 右

年老心愚事未休。無端惹起別山遊。一宵同話江湖夢。雨雹敲窻冷白頭。

次韵酬超書記

飽參衲子傑藏司。遍歷諸方宗說通。八萬塵勞胸下盡。五千經卷眼中空。清晨起定雲成蓋。薄暮談

禪花散風。他日大蟲生兩翼。何人爭得活機鋒。送傑藏司

幽居自是境緣清。夏木排窻帶雨濃。柯葉四時曾不改。歲寒心有澗邊松。

書虛碧亭三首

白頭深愛林間好。三伏松風徹骨清。此地由來無俗事。只將吟嘯遣幽情。

同 右

孤榻夢回天未曉。泉聲一夜洗紅塵。流螢窻外照書帙。引得詩情句更新。

同 右

一別蹉跎經歲月。不知霜電積頭顱。傳聞東國雲巖寺。如是道風千古無。

次韵酬陽山和尚(以上見語錄)

參差喬木藏樓閣。烟霧忽開山色清。瀑落高巖翻雪浪。風生遠嶽起松聲。雲間唳鶴驚僧定。霜外啼猿動客情。此去再來知幾日。題詩青竹獨自行。題廬山開先寺(見行狀及高僧傳)

秋風杖錫翻々至。瀟灑幽居過客稀。深巷艸荒疎雨冷。孤村日落亂雲飛。一雙鬢髮帶霜老。萬里鄉關入夢歸。我亦平生丘壑志。特來此地扣巖扉。訪廬山隱者(見行狀)

旅館風寒不著眠。清泉一夜自涓々。疎鐘始動霜橫壁。長笛頻吹月滿天。好景題詩憐艸木。書筵把筆掃雲烟。十年同作他鄉客。遙語關山路懸。寄鄉友

第十四章 此山

中岩鉄舟等の道友に此山あり。

第一節 傳記

此山名は妙在、姓氏を詳にせず。信州の人なり。佛國高を拜し參究多年にして記蒞を授けらる。辭去して元に入り諸師の間に遊ぶ。嘗て石霜に在りて藏經の鑰を典る。歸朝の後衆に天龍に首たり。中岩之が爲めに江湖疏あり見東海一瀛集。遷りて建仁南禪圓覺三道場に住す。隨處雲衲爛として門垠に盈つ。其の

圓覺に住するや、天境爲めに諸山疏あり。中に云ふ、其修行功滿。菩提果圓。三十年遊浙東西之叢林。芒屨踏出通霄路。千萬里參湖南北之知識。藤杖敲開向上關。片吼歸郷七住院。云々。見無規晚に鹿山圓覺の定正庵に居る。永和二年の季冬病み、門弟に遺誠して諸山に牌を入れ并に祭奠を設くるを許さず。明年寂す。高僧傳以爲正月十二日寂。然按義堂日工集。永和三年八月二十九日記云。方丈此山和尚遺偈に曰く、賣弄一生過。有二偈。並阿堵之賜。余謝返阿堵。和尚必欲余受。云々。乃知其滅不在二年正月也。彌天罪犯多。今朝機轉位。無佛亦無魔。と。春秋若干歳、或は曰く、八十二。本庵及洛の十如是院在建仁に塔す。天境の次石室和尚韻悼此山和尚の偈に曰く、賢聖隨緣徧現蹤。莫將生滅觀禪翁。百城烟水通方眼。萬象咸皈一照中。(見無規短偈類)

第二節 著述及び詞藻

此山の偈稿を若木集と曰ふ。五山文學全集第二輯之を收め、附するに建仁の高峰東峻師の編する所の拾遺及附録を以てす。附録は高峰・明極・別源・夢窗・雪村・鉄舟・古劍・義堂・中岩・天境等の諸集中より此山に關する偈疏を蒐録せるものにして一覽に便なり。

義堂の此山に答ふるの詩の一に曰ふ、寫成瑤偈壓文房。清氣令人熱肺涼。擊節何曾能唱和。焚香只合爲稱揚。詞鋒涼々青蛇出。筆勢翻々彩鳳翔。多謝放開鐵門限。陪談容我主賓忘。と。然るに其集純ら偈語に屬し、詩として誦すべき者は幾ばくもなし。今惟若干篇を抄出して其筆致を示すのみ。

道人花木裡。乘輿出禪房。認鹿沿溪岸。觀魚跨石梁。寒雲隨杖策。冷露判衣裳。似竹霜前操。如梅雪裡芳。飢殮金鼎液。渴飲玉壺漿。靜思芭蕉遠。深居薜荔長。頭陀栖地傑。聲譽破天荒。路上丹崖上。庵傍紫翠傍。心無攀月桂。口懶頌甘棠。古佛靈猶在。神龍囑豈忘。鶉衣纏戒體。塵拂挂禪床。念念修勳業。新新守憲章。形儀如虎視。氣貌見鷹揚。動靜誰相伴。行藏自激昂。祖宗期遠大。教法要恢張。石笈橫林杪。蘿龕接竹篁。庭階垂暮柏。泉石轟鋒莖。梵貝深蓬戶。生臺倚藕塘。鐘聲交磬響。香影映燈光。散誕心無壓。從容喜欲狂。玉磨增潤潔。金煉見精剛。長物曾無篋。餘糧更不箱。春穰忘變易。日月任奔忙。隱逸心彌古。平常道自彰。笑談忘永晝。歸興送殘陽。清雅思梅福。風騷似柏良。吟聲清更峻。文艷炫猶昌。筆撼風雷疾。詩成草木香。清高齋五岳。豪逸甲三湘。耳目窮千里。聲名滿萬方。

酬吾藏主遊芭蕉庵韻

萬壑千峯紫翠中。山川秀氣天所鍾。青蓮世界瑠璃地。四際繽紛華雨濛。雲外清廳來鸚鵡。天仙下禮紫金容。金鐘梵雜瑤塔靜。玉鼎香飄帝網重。艤裡瓊漿非世味。高談雄辨孰相同。春風蕩蕩融和面。秋水澄澄凜點瞳。吟出新詩精怪哭。文光萬丈吐於胸。何年遠離綿州路。世上清名玉撞春。慰我岩房冰雪冷。淳風自古懷神農。明朝得路青雲上。不知何處更欣逢。 可齋李

先生遊芭蕉庵韻和就送

一片閑雲鎖洞房。雙清舊隱幾星霜。松窓月影猶如古。菊圃秋容正向陽。詩筆更餘湘水秀。聲名大破楚天荒。清泉白石佳隣在。再會春風興未忘。 次九日空外寄友石絕隣石泉韻

仙鷗曾騎出洞霞。飄然跡影遍天涯。明朝歸去西山塢。應看蟠桃新著花。 李先生回龍興西山

瘦筇侵曉出禪關。丹桂香飄八月天。千古山陰清興遠。秋風又買剡溪航。 瑞上人回越

合欄橋邊送別時。秋風分袂各東西。明朝歸到家山日。記取寒猿月下啼。 友人歸鄉

一策風高萬里程。歸歎清興雨初晴。行々莫道家山遠。雲漢時聞鳴鶴聲。 高上人回鳴鶴

萬里清遊不忍歸。橫肩鐵錫快如飛。江南徧歷兼江北。著々無非向上機。 北方忍上人遊方

茂林脩竹滿江湖。景物多堪入畫圖。平昔未償行脚債。祝融登了却回廬。 茂上人遊岳回廬

關中消息靜中看。世味何如曲臂眠。門掩夕陽春寂々。更無花鳥到塔前。 城中閑居(錄二)

山房岑寂趣何長。樹々蟬聲噪晚涼。一點更無塵俗意。自趺雙足座禪床。 夏日偶作

砂鍋汲月小溪間。鈍鑿鋤雲屋後山。只箇生涯隨分過。是非榮辱不相關。

和芭蕉庵主寄韻(十首)

歸興樂欣々。千人獨出群。卷簾看暮雨。凭檻見朝雲。倒按吳王劍。掀翻竺國文。好音應有待。清泰奉明君。 文無字入京

百城烟水片雲飛。習々薰風取次吹。内有靈神呼即應。猶如五彩畫空時。

南谷(有序省略)

隱庵

第十五章 友山

傳記

友山名は士偲(幼名は士思、字は友雲、後革む)、姓は藤、山城州山崎の人なり。韶齡にして英俊、離俗の志あり。東福の南山雲公に投ず。文保の初南山圓覺を領す。山隨侍す。關提に蔣山に參して侍香と爲り、潛溪に瑞龍に謁して藏教を司る。嘉曆三年法兄正堂顯公と同じく元に遊ぶ。時に年二十八。周く兩浙を歴て撫隱逸、月江印、南楚説、古智哲、平石砥、無見親、了庵欲、夢堂靈等の門に參敲し皆啓迪する所あり。最も月江、南楚兩人に密邇す。初め月江に眞淨に謁して偈を呈するや江之に和して曰く、山河大地本天然、何用千言與萬言、拈却扶桑并渤海、倒騎佛殿出山門、風頭稍硬難回互、煖處商量就討論、三十烏藤輕放過、要知一滴出曹源と。去つて空林果公に松江に見ゆ。林歎留して之を遇すること骨肉の如し。因て其の門に往來すること殆ど七年、時に國僧の元に在る者石室玖・無夢清・此山在・無涯浩・一峯玄・古鏡千・古源郡等の如き互に鞭勵を加ふ。至正四年、山

姑蘇の承天の南楚の會中に在りて後版に居る。冬至乘拂す。山録して月江に呈す。江偈を贈りて之を賞す。南楚亦贈るに長偈を以てす。序あり曰く、扶桑友雲首座、命居第二位、説法機圓語活、有作者之氣概、職滿東歸、異時當大有爲、以恢吾宗、吾尙翹首東望、故説偈以張志云、眉間掛劍血射北斗、全殺全活、全放全收、抹過西天此土、坐斷四海九州、個是英靈烈漢、不同捕影迷儔、更奮九天扶搖鵬搏之壯志、漲起扶桑那畔百萬里逆水之洪流と。至正乙酉の夏此山在公と同じく歸揖を理す。我が貞和元年博多に到り、尋いで洛に入り、明年柳溪愚公を西山の臨川に訪ふ。三十年前相州鹿山の舊遊なり。相得て甚だ驩び席を分つて居らしむ。三年甲州淨居の請に應ず。一住三載。大いに禪化を播す。觀應三年京師の安國に移る。延文二年の春精舎を山崎に建て扁して正續と曰ふ。徑山の圓照を慕ふなり。康安元年釣帖荐りに至りて東福及び臨川を主る。晩に慧日山の萬年庵に逸老す。應安三年六月一日病に屬し偈を書して曰く、生は何物、死は何物、打破虛空、風生八極、と。書し畢りて逝く。享年七十。

第十六章 龍泉

虎關の法嗣十餘人にして最も忠實に其の師の美を濟せしものを龍泉と爲す。

第一節 傳記

龍泉名は令淬、後醍醐天皇の皇子なり。其の胎に在るの時帝母を源氏某に賜ひ尾の海東郡に生る。乳母平氏學を好んで佛理に通じ口づから諸神呪を授く。泉即ち能く誦す。船年にして讀書するに聰慧羣に過ぐ。父之を虎關和尙に濟北庵に投じて童役を執らしむ。關之を器重す。關の勢洛の諸刹に住するや泉皆從侍して左右を離れず。内外の載籍通ぜざる所なし。建武元年衆に濟北に首たり。帝之を便殿に召して宗要を問ひ寵遇甚だ渥し。帝疑難數條を寫して泉に問ふ。泉釋疑論を作りて進呈す。帝大いに喜ぶ。貞和二年泉瑞松に在り。南朝後村上帝詩を賜ひて泉の海東の牡丹を求む。泉御韻に次して曰く、夢破春閨塵事空、芳心一點遠相通、同根知是在天地、花發南山與海東。蓋し帝は泉の兄君なればなり。虎關順世して泉海藏に居る。觀應元年東福の第一座に擢んでらる。職滿ちて楞伽圓通、筑の承天、洛の萬壽を主る。禪客之に歸すること市の如し。是より先虎關の釋書藏函に入れんことを請ひて兩回上表せしも朝議執拗して行はれざりしが、延文五年泉先志を憤いで關に詣りて表奏す。帝敕して之を許す。貞治四年十二月十一日海藏に示寂す。世壽を詳にせず。

第二節 著述

龍泉著す所、松山集、東福寺塔頭靈源院所藏古寫本あり。五山文學全集第一輯に收めらる。又海藏記

年録一卷あり。今は混びて傳はらず。松山集は偈頌、賦、書、銘、說等より成る。偈頌は全く禪語を用ひて瘦硬特拔、容易に常人の齒牙に上らず。

第十七章 東陵

傳記

東陵名は永瑛、元國四明の人。少より參方し天童の雲外岫に隨ひて洞上の宗を得、法を本州の天寧に開く。學徒奔歸す。常に扶桑に遊ばんと志して渡海に由なかりき。至正十一年春混山の客謂つて曰く、大倉縣に日本へ往く舶ありと。陵欣然として包を整へて附載して博多の津に著く。本朝の觀應二年なり。聖福寺に憩ふ。秋七月都に入りて夢窓に謁す。窓其の遠涉を稿ひて館の西芳蘭若に延き待遇懇篤なり。會々無極玄天龍の事を謝し、窓も亦病牀に坐す。即ち陵に屬するに寺務を以てす。上堂の語に云ふ、宋離南土、白日青天、既到扶桑、山長水遠、應緣而住、似鏡臨形、幸無彼此之分、那有去來之間、云云。明年秋、詔を奉じて南禪に遷る。陵會て大仰に在りて清拙と友とし善し。此方に至るに及んで大鑑遷化す。陵大息して已まず。因つて塔上の銘を作る。後相の圓覺建長に住して化導甚だ盛なり。貞治四年五月六日逝く。南禪の西雲庵に塔す。朝廷徳を崇んで妙應光國慧海慈濟禪師と諡す。

師蠻の贊に曰く、禪祖自支那來者亡慮十有五人、皆是一時英傑也。歷遷五岳、宗規傳世、瑛公殿後來、唱新豐田、禪海之深、雖不及古、而非今時明僧之類、然觀其著述間、有所蔽於詖辭、爲瑛公慙之、學者詳焉と。

第十八章 蘭 洲

傳 記

蘭洲名は良芳、若州の人、橘諸兄の胤と稱す。母氏觀音薩捶に祈りて生まる。幼にして教寺に落卵す。稍長じて上國に觀光し一山の道望を聞き幡然衣を更へて南禪の大雲庵に抵る。山已に入寂す。乃ち無相眞公に謁す。相一面器重して獎諭す。久しくして辭して講肆に遊びて諸家の秘願を探盡す。容山の横川に庵居して冬夏一裘、長坐すること三載、更に愛宕山に登りて茅を誅して禪坐す。樵夫糧を饋り山鳥果を獻す。是に緣りて聲光日に顯はる。建武元年夢窓再び南禪に住するや、洲を招きて内史に侍せしむ。攝の溝杭の檀主、善法顯性の二精舎を建てて洲を請じて居らしむ。曆應元年清拙再び南禪に遷るや洲をして藏を司らしむ。貞和乙酉雪村東山を董するや洲趨謁して入室す。洲時に年四十一、師資縁熟す。龍山の建仁に住持するや洲を擧げて第二座に居らしむ。天境、別源等の建仁に主たるの

日皆擧げて版首に居らしむ。攝洲の大守赤松則祐久しく雪村に參して洲と昵交なり。大義金剛の二刹を翹めて演法の間と爲す。康安元年冬楠正儀、細川清氏等南軍を率ゐて京師に入るや大將軍義詮主上を奉じて江州の武佐寺に避く。嗣子義滿年僅かに四歳、左右抱持して夜洲の室に投じて衣中に匿す。洲躬から輿に乗り晝夜疾馳して播の白旗城に入りて虎口の厄を免る。明年義詮歸洛し特に攝の濱田の莊を割きて永く衆供に充つ。貞治二年相の萬壽を權す。四年洛の萬壽を領す。永和四年建仁に住す。康暦二年詔を奉じて南禪に陞る。三寒暑を歴て東山の清住院に佚老す。至徳元年十二月初六日病に因りて沐浴淨衣し偈を書して曰く、須彌倒卓、虛空消亡、日面月面、常時寂光、と。筆を投じて長逝す。壽八十。敕して弘宗定智禪師と諡す。

師蠻の贊に云ふ、余讀蘭洲和尚諸會之語、其玄辯無礙、如下坡丸、非佛祖大機歸于掌握、焉能如斯、或者不見全錄、取靈禽獻果一件、贊辭評騭、猶如不知根源、徒摘葉尋枝也云云。

山 外

第一章 玄 惠

或は曰く虎關の俗弟なりと。觀應元年寂す。禪學の餘儒を修め、博學を以て稱せらる。後醍醐天皇に侍講し、朱晦庵の四書新注を用ゆ。庭訓往來の著者にして、或は太平記の作者の一人として數へらる。門下より北畠親房出づ。

第二章 北畠親房

初め玄惠に就きて經學を修め、資治通鑑を讀み、遂に神儒佛三教に通じ其著神皇正統記最も名あり。南北朝の正閏を論じ三種神器に及ぶ。或は以つて通鑑綱目の思想に依る所ありとなす。又其元々集中には大學の綱領條目や太極圖說などを擧ぐ。

第三篇 室町期 (上半期)

山内

本紀

第一章 (合説) 五山文學に於ける學僧義堂と詩僧絶海 (帝國文學第五卷所載)

五山文學に於ける翹楚は當に義堂及び絶海を推すべし。義堂及び絶海を推して以て略ぼ五山文學の面目何如を窺知するを得んか。林羅山曾て論じて曰く、至足利氏之領天下兵馬之權、洛陽五山諸師之以文字名于時者間出也多矣、於是乎天下之文章、皆流於禪、南禪寺信義堂、相國寺津絶海、草創之禪講乎、少林岩惟肖、建仁派江西、討論之世叔乎、嚴東沼、澤天隱、三横川、脩飾之子羽乎、村庵、雪嶺、月舟、常庵、潤色之子産乎、於是乎禪林文章集大成者也と。撰擇頗る遺脱を感じ、且つ稍や玉石を混同するの嫌なきに非ずと雖も、其の義堂及び絶海を推舉するに於ては否み難き者あり。則ち以て

京都五山の翹楚と爲す可し。而して京都五山の最盛を室町時代とす。正に是れ鎌倉以來輸入せられたる文化をよく吸収し咀嚼し發揮せしむる時也。されば室町に於ける翹楚義堂及び絶海は、やがて又た五山を通じての翹楚として見ざる可からざる也。

義堂名は周信、空華道人の別號あり。土佐高岡郡の人。正中二年に生れ嘉慶二年に寂す。年六十四。十四歳の時其の族に横死する者あるを見、發心して髪を松園寺に落し、淨義法師に従ひ佛經を讀み、諸儒書に及ぼす。十五叡山に上りて登壇受戒、里に回りにて新福寺道圓阿闍梨に依りて密教を受く。十七叔父周念道人に隨ひて上京、夢窓に臨川に禮し、名を天龍に掛く。二十七夢窓寂し、錫を建仁に移し又南禪に轉じ龍山に依る。靈利眞參を稱せらる。三十五鎌倉管領足利基氏の招に應じ關東に行き、圓覺善福に住し群衲を度す。應安四年上杉氏の爲に報恩寺の開山始祖となる。康暦元年五十五、義滿の鈞帖下りて洛に歸り建仁に董し、至徳三年南禪に入る。後慈氏院に退居す。

絶海名は中津、蕉堅道人の別號あり。同州同郡津能氏に出づ。津能氏は長曾我部氏等と並立せる州中の豪族なり。建武三年生れ、應永十二年寂す。年七十。十三歳にして天龍に名を隸して夢窓に侍す。十八歳義堂等に龍山に參す。放牛を八坂法觀に助けて說法す。貞治三年二十九歳鎌倉に

抵り義堂青山を省し大喜に依る。三十一鎌倉を去る。明に渡らんが爲也。應安元年(明洪武元年)汝霖等

と入朝す。年三十三、永和二年(洪武九年)明太祖に謁し歸朝す。康暦元年天龍の春屋が會下に在り。同

二年四十五歳甲州慧林に行き天龍に歸る。永徳三年相國寺を建つ。至徳元年四十九歳義滿に忤ひ攝州錢原に隱る。同二年四州に抵る。歸京す。等持に入る。應永六年、大内義弘反す。同八年相

國に住し鹿苑を兼領す。絶海義堂より少きこと十一歳。化後佛智廣照淨印翊聖國師の諡號を賜ふ。

義堂と絶海とは俱に夢窓の會下より出づ。夢窓の會(文保年間)世を遷れて海南に去り、五臺を攀ちて

吸江菴を縛し、其の高潔なる道風を遺して京洛に入りしより、義堂絶海相繼いで吸江を出でて西山天龍に上り夢窓に拜侍し參問す。時は南北朝既に分れ、南朝にては興國正平、北朝にては曆應貞和觀應の間にして、楠正行・足利尊氏等が相馳驅奔走せる時なり。五山に於ては鎌倉に渡來の幾多宋元の碩衲漸く化滅に歸し、邦僧の秀虎關・雪村・別源の如き學藝に裕なる者も相次いで没したるに、獨り夢窓が天龍の會下には春屋・義堂・絶海・天錫・椿庭等濟々の俊髦幾十員、麟の如く鳳の如く、將に鎌倉五山の勢力を轉じて京都に移さんとする勢ありき。此際京都に於ける道儀學識群を抜くの碩徳を求むれば、夢窓の外に龍山(名は徳見)を推さざるを得ず。龍山は建仁に在り。夢窓世を捐つるに及び、義堂・絶海相率ゐて之が門に入る。時の鎌倉管領足利基氏は年尙弱なるも才識凡に非ず。政事の傍意を

叢林に寄せしかば、相陽の宿老に向ほ中岩・大喜の如きを有する少からざりき。義堂則ち基氏が招に應じて關東行をなすや、絶海復た之を追うて到り、法化を助け共に文學を福鹿の間に振作す。絶海の明に遊ばんとするや、義堂は夢窓が行狀を草して明の宋景濂に託し碑銘を求む。絶海既に飄然海に浮んでより義堂と相會はざること十餘年、其の間義堂は内に在りて五山の文運を鼓吹し、絶海は外に在りて四明の文壇に追逐す。其の内外呼應、永く五山をして東海の表に聳峙せしめし力、敢て其の間に軒輊を試むるを要せし。唯だ如何に彼等が恆に相親和し相推讓せしやを見る可きのみ。絶海の明より歸るや頻りに義堂を鎌倉より招きて入京せしむ。相國寺の建立に際し、足利義滿、絶海をして事に當らしめんと欲し、義堂に就きて彼が才操徳志如何の人たるやを問ふ。義堂對ふるに小僧の及ぶ所に非ざるを以てす。後絶海の義滿が旨に忤ひ攝州錢原に隠るゝや、義堂義滿の間に答へて、或人傳絶海今在海國村院、寂寞枯淡、然於道學禪誦、無一所退倦と。義滿遂に往愆を悔い、義堂をして之を召還せしむ。而して義堂の將に滅せんとするや、特に絶海に遺囑して土を掩ひ法語を作らしむ。絶海が法語に曰く、這裏是慈氏宮殿、這裏是大寂定門、龍蟠虎踞、拓至人之玄境、瑞章異花、開自己之田園、恭惟某福惠兼備、徳望俱尊、景星鳳凰、惟師之雅表也、玉珮瓊瑤、是師之美言也、揭開釋天日月、獨步佛國乾坤、三千刹界、空華結果、六十四年、葉落飯根、無量劫來成就逝多國土、今日因甚向鏗頭邊

塚浪、師兄師兄、聯芳續焰、須付後昆、雙履空棺、莫誑兒孫、後義堂が忌に當れる陞坐の中、小弟兄事眞慈者四十年、詳知師之出處始末、莫如小弟、及其盛徳大業、小弟尙不能識彷彿、況其蘊奧乎、の語あり。二人の如きは互に能く人の美を濟す者と云ひつ可し。自から後世の人の排擠陷躋の態に似ず。兩人が始終の關係の密なるは右の如しと雖も、其の互の性情行徑に至りては甚だ相同じからざるものあり。義堂は器識淵偉にして中に豪爽俊快の氣を含み、應變滑脱の妙機を備へざるに非ざるも、要するに法規を守ること極めて嚴肅清操、實行に力めて高古の道儀を以て立たんとする者也。絶海は則ち神秀超邁、脱然として羈絆の外に出で、狷介にして飄逸なり。堂はむしろ學者風を存し、海や全く詩人的也。故に堂は常に書を講じ道を論じ人を導き、兀々として倦まず。海は即ち既に超然として人境を去り、更に冷然として佛界を出で、仙風道骨を憑空御風の間に托して吟哦自ら放つ。堂が日工集(日乗)は海之を爲る能はず。海が蕉堅藁(詩集)は堂之を得る能はざる也。堂は寧ろ常調内の人品也。故に幾千の雲衲を度し、所在の武夫に説法し、常に師表と仰がれて永く其の位置を保つを得、海は全く調子外れの天品なり。故に一たび宗柄を持するや、議論公評、敢て避くるを知らず。忽ち相國義滿が意に忤ひ、長揖して飄然湖海に去る。されば海を捉ふれば則ち時代の別調を窺ふ可く、若し其の常調を知らんには、先づ堂を控へて略其の相貌を検せんことを要す。

已んぬるかな由來小島國の事たる、保元平治の解網より、一斷一續、殆んど五百年の長きに及び、戦亂の迹は以て支那大陸に於ける春秋戰國の情狀に配しつべきも、其の間に切磋琢磨せられたる學藝道術の一面に至りては、彼我の懸隔特に莫然たるを認む。我には竟に孔老孟莊を出さず。離騷說難を得る能はざりしなり。然れども今若し更に一たび回首以て彼の干戈矢石の間に點綴せし五山十刹の叢林を尋ね、高僧領袖が行化の迹を檢し來りなば、亦頗る人意を強くする者無くんばあらず。小大の辨こそ存すれ。彼の寧一山の來りて鎌倉に五山教學の基礎を堅め、一派の門流傳統を創服せしが如きは孔子の初めて儒門を周末に立てしに似たる莫らん乎。而して彼が多面的全能の各一部は、弟子虎關・雪村・夢窓・中岩等に依りて傳へられ、更に諸種の分派を作り成し、且つ彼等弟子の亂世に處するや、亦孔門の弟子に匹似して王公侯伯の師表と爲り、救時濟世の苦衷を盡し、之が爲には其の方便の何如を顧みるに暇あらざりき。故に翅に禪理に依り佛説を講ずるに止まらずして、着實當行の儒教に憑る所頗る多きに至りしは、是れ當時の一特徴として見つ可き者也。然れども彼等が事業を防碍し、或程度よりして上に到らしめざりし所以の者は、畢竟其の本質の出世間的たるが爲めたるに在りしなり。但だ時艱の急は、彼等を激發して世間的たらしめんとするも、法規の束縛は其の極端なる奮飛を許さざるを奈何せん。これ脫然羈絆の外に立ちて各自異説の主張を縦にし得たる春秋戰國の儒家道家名家諸

流の如きの輩出する無かりし所以にあらざるか。且つ夫れ縱かに一亂世を以て孔老を贏ち得、離騷說難を贏ち得んと期するは、寧ろ愚に近からずや。然も猶ほ此の間に於て一義堂の仁義道德の説を抱き、假武修文の爲めに侯伯の間に周旋終始したる、稍や孟子の風貌に擬議し得べきあるを得たるは、亦以て單調なる國史の一異響として傳ふるに足らん歟。

義堂は洵に學者として生れ來りしなり。彼が祖父は儒釋兩教を兼修せし人なりき。當事釋教の傍に儒教を修めし者は正に徳川時代初世の儒者と相配比し得べきものたりとなす。蓋し當時に流布せる釋教は一般の見て以て常とせるもの、猶ほ西洋學者の形式的に基督教を奉ぜるが如く、單に社會の風習に従ふのみ。若し義堂の如きをして其の縮衣を脱して世間に在らしむれば、直ちに一個師表の圓頂の儒者藤原惺窩を見たらんのみ。然れども義堂の如きは徒らに縮衣を蒙むりし者に非ず。無住無着の心宗に參し、衆妙門内の玄々を得たる者、固より彼の腐氣俗臭に飽き靈界の機微に接觸し得ざる淺薄卑陋の世儒と其の撰を同じうせず。惺窩の世に出づる既に假武の際に在り。人は儒林の開祖を以てこれに許すと雖も、元來才學力量の敢て世に誇る可きものあるが爲めに非ず。林羅山の輩に至りても亦然り。其の爲す所單に受動的に出で、時勢の變轉によりて纒かに其の位置を得たるに過ぎず。然るに世は猶ほ羅山を以て叔孫通に比するものありとせんか、義堂を擬議するに孟子を以てするも、亦敢て其

の當を失ふものとはなさざるべきなり。

義堂が學術の素養は其の家學に承け、又淨義法印より得たる者あり。而して其の俊銳の資質は無爲枯禪に靜坐をのみ固守する能はず。又眼を佛典のみに曝らす能はず。詩あり曰く、玉帳修文講武餘、遣人來覓舊藏書、牙籤映日窺蝌斗、縹帙乘晴走蠹魚、北上一編看不足、鄴侯三萬欲何如、照心古教君家有、收在胸中歷五車。これその金澤文庫を見て作れる者なり。其の關東に在りて福長鹿覺の間に周旋するや、商今權古、遂に魯誥竺墳泛覽遺す莫かりき。且つや此の際には彼の日本紀及び中正子の著者たる中岩等の尙存して共に談ずべきあり。然れども義堂は寧ろ中岩等とは其の出處を異にせるを見る。中岩の中正子を著すや自から謂へらく、亂世に生れて以てする所なし、偏に翰墨を以て游戲し、餘波二三子の講明に及ぼし、遂に中正子十篇を成すと。斯かる冷眼的旨義は獨り中岩に於て然るのみならず。濟北集、元亨釋書の著書たる虎關に於けるも、又其の他の衲僧に於けるも、幾分か此の傾向を有せざるなきは、天地閉塞の時勢之を導きしなり。獨り義堂が師夢窓に至りては頗る他と趣を異にせるものあり。夢窓既に世界を外にすと雖ども尙ほ之を捨てず。南北朝分裂の際の如き、帝室の爲めに周旋せし所洵に三たび意を致せしものあり。其の足利尊氏に勸めて天龍寺を建立せしめしは、滔天の罪惡を悔懺せしめ後醍醐帝の冥福を祈らんが爲めたりしなり。寧一山は實に五山學統の始祖たり。而

して其の道を一貫して造次顛沛も國の爲めに盡瘁を忘れざりしものは夢窓に至りて始めて之を見る。彼は濃の古溪に窮し、土の吸江に隠れ、總の退耕に嘯く。其の王霸消長の間に出處進退を疏にせざりしの迹歴々として見つべし。七朝國師の號空しからず。夢窓が門下七十子あり。大概龍の如く蛇の如く、而して義堂を以て之が魁となす(師號が贊による)。義堂は初め夢窓が風を慕うて天龍に入り、巾瓶文室に侍し、叩問勤確、寢食具に廢したる者也。夢窓が感化の浸潤せる深きを知るべし。而して義堂は其の精神を養ふに王道主義なる儒教を以てしたりしかば、王霸の争鬪に向つては滿眼の感慨を催うせざるを得ざりしなり。彼曾て東光寺に護良親王を痛哭せしことあり。又たその後、鳥羽の帝陵に題するの詩を見ずや。

承久雄圖運已窮、乾坤反蕩火災紅、雲車遠出蓬壺外、畫像猶存野廟中、故國茫茫桑變海、歸心杳々水涵空、那知平氏功成後、甲冑仍生蟻蝨蟲、
曆數於天道不窮、萬年枝上萬年紅、干戈起自開邊後、社稷終歸戰國中、宴罷瑤池秋日落、春闈叢路晚花空、遊人不管興亡事、閑讀碑文認篆蟲、

社稷は終に戰亂の中に歸し了りぬ。志士仁人の坐視するに忍びざる時とはなりぬ。義堂も亦緇衣を拂つて立ち之が救済の事を以て自から任せざるべからざるに至りぬ。而して彼もと桑門に在るを以て、

先づ佛法を説きて武夫の心を和せんと欲せしは固より其の所也。故に足利義詮の佛書を求むるを賀して曰く、香凝玉帳留人處、不問兵書問佛書と。又足利夫人の爲めに説きて云ふ、敬佛崇僧惠民、國家不令而治と。然れども今や亂離の爲めに人心は荒れ果てぬ。幽玄なる説も益なきなり。是に於てか彼は先づ着實平易なる儒教によりて際離を抑束し、以て人道を正し挽回の功を收めんと欲しぬ。而して此の主義を達せんには、有力なる爲政者に依りて先づ上よりして之を下に及ぼすの便宜なるを見たり。時に天下の事一時粗定まり、足利氏の基礎漸く堅し。彼れ鎌倉に在ること十一年、管領基氏、氏満父子の爲めに文學を勤め仁義を説き、治國平天下の道を講じぬ。基氏は貞治六年廿八歳を以て死し、義堂の之に侍せしこと前後九年、其の銅雀研記の文の如きは特に基氏の爲めに作りし者也。英才の聞ありし基氏、金澤文庫を見し義堂、此の兩者の間の關係より推すれば、足利學校再興の事を以て基氏に歸するの世説も亦庶幾きものありと云ふべし。基氏既に死し氏満繼ぎて立ち、漸く長ずるや、孳々之に勸むるに學を以てせり。應安四年二月十八日の自記に、

府君入寺(瑞)燒香、余引接方丈而茶話、余勸以文學、且云治天下國家者、無不以文先、君專勸文學、願繼業以副外護之望、君領之、

とあるが如きは是也。而して之が爲めに貞觀政要を擇び頻りに講明に努めぬ。同五年の記中の

府君入保壽而燒香、余獻貞觀政要乃云唐太宗治天下、皆收在此書、曠下治天下、亦宜準此書、府君領之、

の如き、又た

大休寺忌齋、府君相伴齋罷、府君遠賀召余、余乃赴、君引入書閣、披貞觀政要、而令余講之五紙、の如き、同六年記中の

在報恩寺、講無文々集、保壽僧奴來告、府君臨駕、余忙々地走赴、略謝來意、仍讀貞觀政要六紙、及晚歸駕、

の如き、如何に教導に盡せしかを知るべし。而して是れやがて後世寺子屋教育の基礎を置きし者たるを記せざるべからず。亦當時儒者の活力なかりしが爲めなり。然れども義堂は猶ほ此の如きの業を以て儒者の事と做し、名家の後をして之が職に當らしめんとせり。曾て氏満に説きて曰く、毎々儒に命じて孝經及び貞觀政要等を講ぜしむべし。是れ乃ち國家政道の助なり。何となれば則ち人にして仁義五常の道を知らずんば君命に遵はず。君命に遵はずんば政事はれざるなり。今より以後宜しく粟田口儒人を召し、孝經政要等を講ぜしむべし。則ち庶幾くば國家安寧にして尊徳日に新ならんと。粟田口の菅氏は遂に招かれて書を講じぬ。因りて想ふ徳川の初政に於て林羅山僧澤庵と軋轢し、却つて其

の壓迫を受くるを免れざりしを。是を義堂が能く他を容るゝの高懐と併せ見て以て人物の高下を判ずべし。義堂は其の法規を守り道表を類さざらんが爲めに、敢て自から儒者の職に在るを忘みしと雖も、文教の爲めには黙止する能はず。氏滿が治國の要を問ふに答へて曰く、

凡治天下、文武二道也、武則治亂而已、文則爲政之術也、昔唐太宗貞觀之政、至今爲美、其初太宗以弓問弓工、答曰木心不正、太宗乃召十八學士、問政事之要、吾日本三代將軍之世、以十八人之士分爲番、侍幕府之講、無乃擬十八學士乎、然則古今治天下國家、非文武二道則不可也、凡人爲上者憫下、爲下者敬上、是則非生而知之、以學而知之也、不學而知者未之有也、千萬以學、政治之備則幸甚焉、

藤原惺窩も亦將軍に招かれて貞觀政要を講ぜし事あり。而して啓迪提撕未だ此の如きの功に至らざりき。宜なる哉氏滿遂に才武群を抜き威名關東に振ひ、鎌倉幕府を構造して頼朝が規模に擬し、隱然京都幕府に對峙し、更に駕して而して上らんとするの勢を爲せる。且つや其の子滿兼の秀才を以て之を承け、遂に攝泉紀の大封を以て京都幕府に反抗して起ちし大内義弘と相通じて大事を擧げんとするに至りしが如き、當時の諸侯が一に全盛なる室町幕府の鼻息を窺うて其の進退を決せるの際に在りては、寧ろ殊勝の擧と稱すべく、亦自から其の素養する所ありしが爲めたるを見つべきなり。

鎌倉は關東政教の中心なりき。諸侯の會する者亦隨つて多かりき。義堂の學を勸め道を説く、獨り幕府の爲めにするのみならず、苟くも諸侯と相見ると亦此の道を以てす。上杉氏の爲めに曰く、文學を以て政務を補ふべし。公宜しく力學すべしと。又曰く、天下の爲めに公道を行ひ、以て眞俗を安んずべしと。野州駿州守等に向つては曰く、凡そ天下を治め權柄を執る者當に文學を勸め以て其の智を益すべし。然らずんば闇昧にして多く通達せずと。此際彼は遠く京都管領細川頼之に寄するに六臣注文選を以てせり。其の詩に曰く、蕭統編成七代文、六臣競注漫紛紜、老僧不敢閑囊秘、馳獻明公助策助と。彼は又曾て佐竹氏の爲めに常州に行き、斯波氏の爲めに深く奥羽兩州に入りしこともあるなり。其の擾々たる武夫の間に立ち、左顧右眄、偃武修文の事に周旋せる、正に孟軻が諸侯遊説の事蹟に酷似せる所に非ずや。彼の更に康暦二年を以て京都に赴き足利義滿に謁するや、則ち先づ之に勸めて儒者中宜しく孟子を讀むべしと説く。孟子を以て自から任ずるもの莫からんや。彼は其の口吻に於ても孟子を學べるものあり。

一人修善、則一家化之、一家修善、則一國化之、一國修善、則天下人皆化之、天下人皆修善、則欲其國之不治政之不行其可得哉、故曰爲善不同、同歸於治。

南嶽隆坐

但し彼は素と方外の僧籍に在る者、且つ境遇は狹隘なり。孟子の圭角鋒芒を望むべからず、亦た齊に

用ゐられずんば梁に之くの自由なきなり。一に或有力なる爲政者を捉へ之に據りて文教を布くに急なりしのみ。義滿言を納れ、儒者菅原秀長に就きて孟子の講を聴き、更に大學を講せしめんと欲す。義堂曰く、大學乃四書之一、唐人學四書、先讀大學、意者治國家者、先明德正心誠意修身、是最緊要也、敢請殿下四書之學弗怠、則天下不待令而治、と。又爲めに説きて云ふ、徳を修むるを文となし、戈を正すを武と爲す。武の用は天下を安んずるに在り。必らずしも干戈を事とせず。故に武王紂を誅し兵を戢め文を修む。尙書武成に乃偃武修文と曰へる是なりと。彼の説く所毎に此の如し。義滿更に周易讀む可きや否やを問ふ。彼答へて曰ふ、易知命之書也、凡天地人三才萬物、皆收在其中と。左傳何の書ぞ其の儀何如の答に、左氏春秋、先王大法、褒貶爲例、知我罪我者也と。以て諷刺の意を交へ、又た略説四書次第入學、中庸最爲治世之書を説く。凡そ此の如き勸學修徳の事たる、彼の奢侈淫逸に耽り貪婪飽く無き足利諸將軍に向つては洵に偶像を捉へて説法するの感無き能はず。然れども人性未だ必らずしも全く惡となさず。且つ多少の宗教心あるは人の情なり。今儒釋兩教を以て之に逼る。義滿頑なりと雖ども、顧思する所無きを得ざるなり。故に彼は奢侈に耽りしと雖ども、必らずしも父祖の暴逆に倣はず。能く佛を護し僧を崇め巨費を投じ叛臣の起るあるをも省みずして相國寺の大堂塔を營み、叢林の徒をして文學に潛心するの餘裕あらしめ、遂に此の徒に一託するに政事顧問の事外國使

節の事等を以てし、文物輸入の爲めに盡すを得せしめなき。兵馬倥傯の間に於ては亦奇とするに足る。

絶海は相國寺に在り、鹿苑を兼領し、義滿が爲めには太だ苦々しき所ありしと共に、亦た其の顧問としては最も力ありし者なり。曾て之を稱して曰ふ、倚長策駕馭英雄、懷羣何鎮撫社稷、考之異代、齊桓晋文之致霸業、盛則盛矣、未有今日之文治、漢明梁武之崇度門、尙則尙矣、未有今日之武威、文武兼濟、儒釋俱崇、未有盛於今日者矣、と。言は誇張に失すと雖も、要するに當時儒釋兩教の并用せられしは一の注視すべき者たりしなり。足利氏の初め大義名分を過まてる、人をして長く嫌惡の感を牽かしめざるを得ざるも、政教の爲めに盡瘁せし五山碩衲が苦衷の迹は斷として他と共に没却せしむべからざる也。唯惜しむらくは義堂等の徒、身法門の擊縛を受くるあり、且つ時勢は正に天地閉ちて賢人隱るゝの際、竟に其の唱道する所をして世に風動せしむる急轉直下、惺窩・羅山・關齋等の偃武後の徳川に於けるの勢あらしめ能はざりき。

義堂が其の抱きし儒道を甚だ世に行ひ得ざりし所以の一半は其の佛徒たりしが爲めに在りき。而も佛徒たりしが爲めに儒學に於ては却つて發明する所ありしなり。彼れ儒佛の關係に就きて謂へらく、凡孔孟之書於吾佛學、乃人天教之分、齊書也、不必專門、姑爲助道之一耳、經云法尙可捨、何況非法、如是講則儒書即釋書也と。彼はたゞ人天教の分を以て儒學を取れるのみ。直ちに見て以て儒佛を混同

して亂る者と爲すは不可也。故に又曰く、在儒仁義禮智信、在釋不殺不盜不婬不妄不酒、儒謂之五常、釋謂之五戒、其名異其義同、佛初爲下根凡夫說人天乘即五戒十善也、然則佛教得兼儒教、儒教不得兼佛教と。其の五戒と五常とを以て相配せしが如きは吉備眞備既に王朝に試みしもの、唯だ其の佛教得兼儒教、儒教不得兼佛教の語に至りては新に稍や學者の聽を動かすに足る者か。蓋し孔子の天道を見て而も人道を主説せしもの儒教是なり。宋の程朱に至り佛學を藉りて強ひて儒の本體を現さんと欲し、補助に力ありしも面目をして漸く變ぜしめしこと、宋代に於ても已に人の指彈に上りしもの。本邦にては虎關初めて朱子の醇儒たらざるを見、義堂に至りて更に明白に説破して曰く、宋朝以來、儒學者皆參吾禪宗、一分發明心地、故註書與章句學、迥然別矣、四書盡於朱晦庵、庵及第以大惠書一卷、爲理性學本と。又曰く、漢以來及唐儒者、皆拘章句者也、宋儒乃理性達、故釋義太高、其故何、則皆以參吾禪也と。朱子竟に蔽ふ能はざる也。然れども彼猶苦心の痕を止む。其の中庸に註するや、喜怒哀樂情也、其未發則性也、無所偏倚、故謂之中、發皆中節、情之正也、無所乖戾、故謂之和と。無所偏倚の四字以て性を救ふ。義堂は則ち一言にして之を盡す、曰く、未發即佛教一念未生以前也と。而して曰く、這介田地、非誠情者能所及、但能忘情者得到と。一念生ずれば何如、曰く、古今天地、古今日月、堯舜何人哉、一念正、則末法即正法、一念邪則正法即末法。而して正念は一信を以てす。信心一

念所出生、即是此信心是佛心、此心一了一切了、既に是れ佛界なり。故に因果應報を説き儒の天命を排する自然の勢。人の嘉遜貞古之意を問ふに、時節因緣天分定數を以て應ふ。更に有爲の外に無爲を説く。古今天地間、有生者必有母、有母者必有恩、有恩者必不可不報、報有二焉、曰有爲、無爲、王祥臥氷、丁蘭剝木、是有爲而報者也、釋迦升天、目連設飯、は無爲而報者也、而又不見有爲之相、亦不見無爲之相、至這裏也、無因可報也、無愛可斷也、無生死之可離也、無涅槃之可證、如是報者、眞實報恩者也、如是斷者、眞實斷愛者也、如是離者、眞實離生死者也、如是證者、是眞實證涅槃者也、と。而して云ふ、雖然如是若約祖師門下、未爲眞實報恩者、且道作麼生是眞實底拈香拈香漸く是れ拈花微笑の一指頭禪に入る。

彼れの儒を見ること斯の如し。差別を以て之を混ぜず。而も同果を以て之を捨てざるなり。故に叢林の中に於ても之が講究を禁ぜざる也。但彼は曰く、凡讀書先須正心而讀之、詩三百思無邪是也、今時學者、心術不正、故讀書雖多、無所施用、只呼爲書簾而已、是無他、以心不明也、正心は本なり、學は末なり、故に曰く、上等坐禪工夫、中等坐禪兼學、下等惟學と。彼は其の徒に向つては主として靜坐參禪を促す。然も惚忙多端の時運は動もすれば彼等をも驅りて今時則僧俗會合、共談世上治亂、以爲茶餅の狀あらしめ、俗人の寺に入る者も法を問はんが爲めに非ず。僧の俗舎に入るも法を説かんと

欲する者に非ず。兵器を蓄へ權利を争ふに遅れざるを是れ努む。洵に佛法維治の難關也。法規を嚴守せる義堂は又た之が爲めに坐視する能はず。常州資中の僧侶にして其の徒に儒學を授け益々排佛の勢の高まるあるを見、諸子に告げて曰へらく、資中蓋謂附佛法外道也、凡入彼門者、皆起邪見、以斥佛者、沿々皆是、近者或人染着深者、余摧而歸正、汝等外學傍兼可也、勿以爲宗、宗者當部所尊尚也、吾釋氏當部乃佛也と。然れども此勢は尙ほ遏止すべからず。永和元年七月八日義堂は遂に書を修し、常州月山樞書記に寄せて之を論じて曰く、資中身爲沙門、口讀儒典、教壞諸佛子之徒、令起邪見、雖不足論、而末世附佛法之魔也、佛法衰微之漸、可不戒乎、請白太守、集止禪徒學於資中門、則佛種不斷之助其一也。義堂は蓋しよく儒佛の趨勢を觀しものあるか。唯夫れ義堂が解釋するが如く、儒を以て佛の一部分と見做し來れるの間は尙ほ可也。而も當時行はれし程朱の學は固と斥佛の學統なり。斥佛の學統にして其の本體は禪理に依りて現はさるゝ者。禪徒の爲めに入り易く、將か顧みて佛を斥くるに至るに極めて便利なる手引きとなるなり。竟に長く歸儒者の殻を脱して輩出するあるを防ぎ得べきにあらず。幸にして世運未だ平ならず。且つ朝廷の儒者に活氣なく、識力なく、能く古典に精なりしと雖も佛理に通ぜず。偶々朱書を閲するも其の奥義を解する能はざる者あり。其の竟に禪徒の下風に立ちしも宜なりと言ふ可し。氣運猶ほ此の如し。されば禪徒の爲めには恐るべき大敵も暫く其の叢林

の中に愛育護養せられ、義堂に承けて岐陽出で、易の陰陽に依りて儒佛不二の説を成し、遂に朱註に和點を施し徒弟の便に供しぬ。岐陽に次いで惟肖出で、清啓出で、皆朱學を講明せり。此の時代より應仁の變亂の爲め學統二分し、一は五山の中に藏して更に陽明學を混和せられ、遂に佛、朱、陽三素の中より半脱したる半僧半儒の惺窩をば相國寺より出すに至りぬ。他は則ち桂菴等によりて諸州侯伯の砥礪となり、山崎闇齋に至りては、叢林の蟄蛇全く脱化し去りて雲蒸龍變、五山の天佛國の土、爲めに毒氣害焰を蒙むりし事も亦甚しと云ふ可き也。闇齋は初め妙心寺に居る。妙心寺は十刹の一也。後南海の吸江寺に學ぶ。吸江寺は夢窓の創規し義堂・絶海の出でし處なり。義堂・絶海が衣鉢は西胤・鄂隱・旭峰・待雨等によりて長く此處に絶えざりき。闇齋則ち野中兼山に依りて還俗し、神道を崇びて更に國體を論じ、徳川儒林の思潮を鼓動し、其の佛教に向ふや力を極めて抵排するに至りしと雖ども、實は其の初め自ら禪徒たりしの反動に過ぎずして、又五山文學の傳統を引き來りたるが爲め、能く宋學によりて儒佛の關係を判別し得たりしに外ならずとす。されば若し能く徳川儒林の其の盛運を致せし所以を尋ねれば、義堂等が禪徒の干戈亂離の間に儒道の尊ぶべきを示し、朱學の取るべきあるを明らかにせし者、如何に其の力ありしやを知る亦敢て難しとせんや。

學者としての義堂は既に之を概見しぬ。彼は洵に彼の補教論原の爲めに長廣舌を弄せし宋の仲靈が

自から任せしが如く、釋門の孟柯を以て自から居らんとしたりき。唯だ時に一個有力なる排佛の儒者歐陽永叔其人を缺きしは、吾人の寧ろ邦學開發の爲めに遺憾とする所たらずんばあらず。彼は其の豊富なる學殖と靈利なる識見とを有しながら竟に一好敵手も得ずしてやみぬ。然れども文壇に於て馳騁磨勵すべき俊秀は五山三竺の間に多く、爲めに縦に麗藻を藝林に灑ぐを得、其の詩其の文共に亦一代の巨匠たるを失はざりき。特に之を其の文に於いて觀る。仲靈が奇偉の文氣は夙に釋門の韓柳を以て推さる。義堂が道勁の筆力も亦敢て多く之に譲らざるものあり。詩あり曰く、仲靈一筆春秋筆、埋沒湖山烟雨中、輔教遺編誰可續、緇林棘藜落西風、と。又曾て謂へらく、昔吾僧家者流、有功於字門者、如永明・明教(一)、大惠・中峯、皆以禪教託之於文字、千歲不刊傳也。彼が向往傾注する所も亦初より知るべかりし也。兩者の間に存する氣局の大小は自から之が識別を要とするも、其の相似する所は文章體裁の末に至るまでも之を承認せざる能はず。要するに義堂の文章家として見るべきものある、微しも學者として見るべきものあるに減ぜざること、猶ほ仲靈の然りしが如く然りしなり。曾て齊藤拙堂が文話を讀む、中に言へるあり、室町氏之時無文章、然余觀僧義堂空華集、頗有可誦者、最喜其深耕說、文字非無痕疵、然說理核實、意在筆先、今世文章家、能無愧乎と。室町氏の時文章無しと爲す者は亦山陽が見と同じく、撰を取ること常に五山の内にするを忘れたればなり。但だ其の能く義堂を

評騰せし眼識を具すると、之に推服するの厚きとに至りては、猶ほ文話の著者たるに耻ぢずと云ふべし。

深耕說、空華叟郊居、無事出游、泛觀田野桑柘之間、有大麥同畝而異熟者、質諸老農、曰惰農爲也、問其所以、曰、凡地耕而淺者、所種之物、必早熟而不茂、耕而深者、所種之物、必晚成而肥碩、是以善學稼者、患乎耕之淺、不患成之晚也、而彼惰者、用力弗專、所以耕有深淺、而熟有早晚也、嗟呼今吾徒也、耕道不深、而患名之晚者、豈無愧於老農之言也耶、余竊有感於中、遂書以告同學端介然、端介然深耕者之徒也。

抑も五山詩文の氣風が一般文物の風潮に涵されて、宋元の潤化を蒙むり一新生面を開き、茲に初めて正格なる漢詩文の筆路筆致を得るに至りしこと前既に之を言へり。而して五山の文豪と稱すべきもの、義堂の前に虎鬪あり。其の元亨釋書は我邦僧史の權輿と呼ばれ、司馬遷の史記に擬して其の結構を成し、亦一世の大著たるに洩れず。且つ其の濟北集を合して之を見れば、自から鬱然として能く一家を作すに足らずとせず。而も其の勢調は未だ徳川末造の群作家と其の清新の致趣を争ふに至らず。纔かに義堂に至りて始めて之に當るを得べく、以て二千年の前を藐視し數百年の後を下瞰するものと爲すも必らずしも過賞とせざるべき歟。斯かる位置に在り得べき義堂は、則ち時に駢四鬮六の古調を